

# 緑井大上遺跡

—広島市安佐南区緑井八丁目所在—

2019

公益財団法人広島市文化財団

## はしがき

緑井は、平安時代中期（10世紀中頃）に編纂された『和名類聚抄』に記載がある「緑井」に比定されており、広島市内でも古い地名のひとつです。また、江戸時代後期（1825）に編集された『藝藩通志』では、緑井村には枯れることも溢れることもない不思議な井戸があり、緑井の語源になったという説が紹介されています。緑井地区には、阿武山と権現山から流れる小河川によって形成された扇状地があり、戦前の地図によると、湧水に恵まれた扇端部分には当時から集落が形成されていました。

しかしながら、平成26年（2014）8月20日の局地的な豪雨により、これら小河川で大きな被害が発生し、多くの方が亡くなられました。今回の発掘調査は、避難路や雨水の排水路を確保するための都市計画道路開発に伴うものです。この調査では、この地に暮らしてきた人々の弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と古墳の遺構を確認することができました。このたびの災害でお亡くなりになられた方々への哀悼の意を表するとともに、この報告書が一人でも多くの方に活用され、郷土の歴史を解き明かす手がかりとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御指導いただいた諸先生方及び御協力いただいた地元の方々、並びに暑い中寒い中を発掘作業に従事していただいた方々、多方面で便宜を図っていただいた広島市都市整備局復興工事事務所の方々に厚くお礼申し上げます。

令和元年（2019）9月

公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

## 例　言

1. 本書は、広島市安佐南区緑井八丁目における都市計画道路長東八木線ほか1路線道路新設工事に伴い、平成29・30年度に実施した緑井大上遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、広島市都市整備局復興工事事務所から委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、I・II・III-3の一部を兼森帆乃加が、III-1・2及び3・6の一部、IV-1及び4の一部を田村 規充が、III-4・5及び6の一部、IV-2・3及び4の一部を濱岡 大輔（特定非営利活動法人広島文化財センター）が行った。編集は、田村が行った。
4. 遺構・遺物の実測及び遺構の写真撮影は兼森・田村・濱岡が、遺物の写真撮影は濱岡が実施した。
5. 発掘調査に係る基準点の設置は、国際航業株式会社広島支店に委託した。
6. 本書に掲載したラジコンヘリコプターによる航空写真の撮影は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
7. 図版53に使用したX線写真撮影は、公益財団法人大阪市博物館協会に委託した。
8. 遺物の科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 第1図には、国土地理院による25,000分の1の地形図「中深川」「祇園」を、第2図には、地理調査所による25,000分の1の地形図「祇園」（昭和25年第二回修正測量・昭和27年8月30日発行）・「深川」（昭和25年第二回修正測量・昭和27年2月28日発行）を、第54図には、国土地理院による25,000分の1の地形図「中深川」「海田市」「祇園」「広島」「川角」「廿日市」を複製して使用した。
10. 第3図には、広島市発行の2,500分の1の広島市都市計画図(I-9・I-10)を複製、合成して使用した。
11. 第4・5図における基準点のデータは下記のとおりである。

|                        |               |
|------------------------|---------------|
| 基準杭1 : X = -168660.000 | Y = 29400.000 |
| 基準杭2 : X = -168696.364 | Y = 29382.520 |
12. 本書に掲載した挿図の方位は、第1・2・3図以外は方眼北である。
13. 本書に使用した遺構の略記号は以下のとおりである。

|            |             |              |         |           |           |
|------------|-------------|--------------|---------|-----------|-----------|
| SH : 穫穴住居跡 | SB : 掘立柱建物跡 | SX : 壁を伴う平坦面 | P : ピット | SD : 溝状遺構 | ST : 埋葬施設 |
|------------|-------------|--------------|---------|-----------|-----------|
14. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』(37版日本色研事業株式会社発行2014年)に拠った。
15. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、公益財団法人広島市文化財団文化財課において保管している。

## 目 次

|     |               |    |
|-----|---------------|----|
| I   | はじめに          | 1  |
| II  | 位置と環境         | 3  |
| III | 遺構と遺物         | 8  |
| 1   | 調査の概要         | 8  |
| 2   | 基本層序          | 8  |
| 3   | 集落跡           | 17 |
| 4   | 緑井大上第1号古墳     | 43 |
| 5   | 緑井大上第2号古墳     | 47 |
| 6   | 時期不明遺構        | 52 |
|     | 緑井大上遺跡の自然科学分析 | 84 |
| IV  | まとめ           | 92 |
| 1   | 集落の変遷及び構成について | 92 |
| 2   | 緑井大上第1号古墳について | 93 |
| 3   | 緑井大上第2号古墳について | 94 |
| 4   | 結び            | 98 |

## 挿図目次

|        |                |    |        |                  |    |
|--------|----------------|----|--------|------------------|----|
| 第 1 図  | 周辺主要遺跡分布図      | 4  | 第 19 図 | SK16 実測図         | 33 |
| 第 2 図  | 周辺地形旧版地図       | 5  | 第 20 図 | SK17 実測図         | 33 |
| 第 3 図  | 周辺地形現況図        | 9  | 第 21 図 | SK18 実測図         | 34 |
| 第 4 図  | 調査前地形測量図・調査区割図 | 10 | 第 22 図 | SK20 実測図         | 35 |
| 第 5 図  | 基本層序(1)        | 12 | 第 23 図 | SK21 実測図         | 35 |
| 第 6 図  | 基本層序(2)        | 14 | 第 24 図 | SK22 実測図         | 36 |
| 第 7 図  | 調査後地形測量図・遺構配置図 | 16 | 第 25 図 | SK24 実測図         | 37 |
| 第 8 図  | SH1 実測図        | 18 | 第 26 図 | SK26・27 実測図      | 38 |
| 第 9 図  | SH1 遺物出土状況実測図  | 20 | 第 27 図 | SK28 実測図         | 39 |
| 第 10 図 | SH2 実測図        | 22 | 第 28 図 | 第1号古墳実測図         | 43 |
| 第 11 図 | SB1 実測図        | 23 | 第 29 図 | ST1 実測図          | 44 |
| 第 12 図 | F2 区ピット群実測図    | 24 | 第 30 図 | ST2 実測図          | 45 |
| 第 13 図 | SX1・2 実測図      | 26 | 第 31 図 | ST5 実測図          | 45 |
| 第 14 図 | SX3 実測図        | 28 | 第 32 図 | 第2号古墳実測図         | 47 |
| 第 15 図 | SX4 実測図        | 29 | 第 33 図 | ST3 実測図          | 48 |
| 第 16 図 | SX5 実測図        | 30 | 第 34 図 | ST4 実測図          | 49 |
| 第 17 図 | SK3 実測図        | 31 | 第 35 図 | SD2~4, SK1・2 実測図 | 52 |
| 第 18 図 | SK4 実測図        | 32 | 第 36 図 | SK1・2 実測図        | 53 |

|      |                |    |      |                     |    |
|------|----------------|----|------|---------------------|----|
| 第37図 | SK5～13実測図      | 54 | 第47図 | 弥生土器・土師器実測図(4)      | 64 |
| 第38図 | SK14実測図        | 55 | 第48図 | 弥生土器・土師器実測図(5)      | 65 |
| 第39図 | SK15実測図        | 55 | 第49図 | 弥生土器・土師器実測図(6)      | 66 |
| 第40図 | SK19実測図        | 56 | 第50図 | 弥生土器・須恵器・鉄器実測図      | 67 |
| 第41図 | SK23実測図        | 56 | 第51図 | 第1・2号古墳出土遺物実測図      | 68 |
| 第42図 | SK25実測図        | 57 | 第52図 | 第2号古墳出土遺物・鉄器・石器実測図  |    |
| 第43図 | 石垣実測図          | 57 |      |                     | 69 |
| 第44図 | 弥生土器・土師器実測図(1) | 61 | 第53図 | 石器・土質土器・黒色土器・須恵質土器・ |    |
| 第45図 | 弥生土器・土師器実測図(2) | 62 |      | 磁器実測図               | 70 |
| 第46図 | 弥生土器・土師器実測図(3) | 63 | 第54図 | 広島市域の5世紀代の主要古墳      | 97 |

## 付表目次

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| 第1表 | 玉類観察表              | 51 |
| 第2表 | SK5～13観察表          | 55 |
| 第3表 | 土器・土師器観察表          | 71 |
| 第4表 | 須恵器観察表             | 80 |
| 第5表 | 土質土器・黒色土器・須恵質土器観察表 | 81 |
| 第6表 | 陶磁器観察表             | 83 |
| 第7表 | 石器観察表              | 83 |
| 第8表 | 広島市域の二重幕塙・割竹形木棺の古墳 | 93 |
| 第9表 | 安芸地域の鉄製武具・農具出土古墳   | 95 |

## 図版目次

|       |                                |        |             |
|-------|--------------------------------|--------|-------------|
| 図版 1a | 遺跡上空から太田川上流方向を望む(航空写真・29年度調査前) | 図版 7b  | SB1         |
| b     | 遺跡上空から太田川下流方向を望む(航空写真・29年度調査後) | 図版 8a  | F2 区ピット群    |
|       |                                | b      | SX1 粘土塊出土状況 |
| 図版 2a | 調査前近景航空写真                      | 図版 9a  | SX1 遺物出土状況  |
| b     | 29年度調査後航空写真                    | b      | SX1・2       |
| 図版 3a | 30年度調査後航空写真                    | 図版 10a | SX3         |
| b     | 基本層序C-C'                       | b      | SX4         |
| 図版 4a | 西側斜面近現代土取り痕跡                   | 図版 11a | SX5         |
| b     | SH1 B-B' 土層断面                  | b      | SK3         |
| 図版 5a | SH1 遺物出土状況                     | 図版 12a | SK4 土層      |
| b     | SH1                            | b      | SK4         |
| 図版 6a | SH1                            | 図版 13a | SK16        |
| b     | SH2 遺物出土状況                     | b      | SK17        |
| 図版 7a | SH2                            | 図版 14a | SK18 遺物出土状況 |
|       |                                | b      | SK18        |

- 図版 15a SK20 遺物出土状況  
b SK20
- 図版 16a SK21 土層  
b SK21
- 図版 17a SK22 土層  
b SK22
- 図版 18a SK24 土層  
b SK24
- 図版 19a SK26 遺物出土状況  
b SK26
- 図版 20a SK27 土層  
b SK27 遺物出土状況
- 図版 21a SK27  
b SK28
- 図版 22a 第1号古墳  
b 第1号古墳
- 図版 23a ST1 木棺変質土及び自然石出土状況  
b ST1 木棺変質土及び振り方断ち割り状況
- 図版 24a ST1 遺物出土状況  
b ST1 完掘
- 図版 25a ST1 完掘  
b ST2
- 図版 26a ST5  
b 第2号古墳
- 図版 27a 第2号古墳周溝 (SD5) 内土層 (基本層序 B - B' 南側)  
b ST3 遺物検出時上層土層
- 図版 28a ST3 遺物出土状況  
b ST3 素環頭大刀出土状況
- 図版 29a ST3 鐛・斧出土状況  
b ST3 鐛出土状況
- 図版 30a ST3 完掘  
b ST4
- 図版 31a SD2・3 土層  
b SD2・3, SK1・2・19
- 図版 32a SD4  
b SK1 土層及び礫出土状況 (基本層序 A - A' 南側)
- 図版 33a SK1 土層及び礫出土状況 (基本層序 D - D' 中央付近)  
b SK1・2 遺物・礫出土状況
- 図版 34a SK1・2
- 図版 34b SK5～13 検出状況
- 図版 35a SK11 土層  
b SK11
- 図版 36a SK14  
b SK15
- 図版 37a SK19 土層  
b SK19
- 図版 38a SK23  
b SK25 矶出土状況
- 図版 39a SK25  
b 石垣裏込め土層
- 図版 40a 石垣  
b 石垣
- 図版 41 土器 (1)
- 図版 42 土器 (2)
- 図版 43 土器 (3)
- 図版 44 土器 (4)
- 図版 45 土器 (5)
- 図版 46 土器 (6)
- 図版 47 土器 (7)
- 図版 48 土器 (8)
- 図版 49 土器 (9)
- 図版 50 土器 (10)
- 図版 51 土器・須恵器
- 図版 52 須恵器・鉄器・玉類
- 図版 53 鉄器
- 図版 54 鉄器
- 図版 55 鉄器・石器・土師質土器
- 図版 56 土師質土器
- 図版 57 黒色土器・須恵質土器・磁器
- 図版 58 自然科学分析図版 植物珪酸体・花粉分析プレラートの状況

# I はじめに

## 調査に至る経緯

平成 28 年 2 月 15 日、都市計画道路 長束八木線及び川の内線新設工事に伴い、工事主体となる広島市都市整備局復興工事事務所（以下「復興工事事務所」とする。）から、広島市民局文化スポーツ部文化振興課文化財係（以下「広島市文化振興課」とする。）に対して、工事計画地内における文化財等の有無及び取扱いについて照会があった。この場所は遺跡の有無を確認する必要がある区域に登録されていたため、広島市文化振興課は同年 11 月 21 日、24 日工事計画地内の現地踏査及び試掘調査を実施し、その結果、工事計画地内において山城と想定される遺構が確認された。これを受け、その取扱いについて協議が行われたが、工事の計画変更をして遺跡を現状保存することは困難であるため、やむを得ず記録保存をはかることとなった。

そこで、平成 29 年 1 月 6 日、復興工事事務所は公益財団法人広島市文化財団に発掘調査を依頼し、これを受けて同年 7 月 21 日に契約を締結した。第 1 次調査は平成 29 年 10 月 16 日から平成 30 年 3 月 23 日まで、第 2 次調査は平成 30 年 5 月 30 日から同年 9 月 12 日までの期間実施した。

整理作業及び報告書作成は、平成 30 年 9 月から令和元年 9 月にかけて実施した。

当初は、中世の城跡を想定して緑井城跡という呼称で調査を開始し、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と古墳の遺構を確認したが、城跡であることを裏付ける遺構は確認できなかった。そのため遺跡名称について、広島市文化振興課と協議を行った。その結果、集落跡と古墳の複合遺跡であるため、字名から本遺跡を緑井大上遺跡と呼称することとなった。

発掘調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島市都市整備局 復興工事事務所

調査主体 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

調査関係者 円奈 勝治 理事長

田原 篤朗 常務理事

福永 治 常務理事

香川 寛治 常務理事

大森 寛 常務理事

江崎 一博 文化科学部長

菊楽 章 文化財課長

高下 洋一 文化財課長補佐

調査担当者 田村 規充 主任学芸員

兼森 帆乃加 主事

瀬岡 大輔 特定非営利活動法人広島文化財センターから派遣

|       |        |       |        |       |       |        |
|-------|--------|-------|--------|-------|-------|--------|
| 調査補助員 | 大島 俊治  | 岡本 真澄 | 香川 和信  | 加藤 恒子 | 角 和夫  | 川本 寿美江 |
|       | 川本 博久  | 熊谷 公徳 | 正圓 正暉  | 杉原 克栄 | 田中 実  | 谷口 敏枝  |
|       | 谷口 紀子  | 坪本 裕志 | 土井 博之  | 戸田 絵己 | 中川 ゆみ | 藤本 敏之  |
|       | 舛田 愛子  | 宮下 洋昭 | 宮地 美穂  | 柳田 志信 |       |        |
| 整理作業員 | 佐伯 ひとみ | 菅原 彰子 | 住川 香代子 | 橋本 礼子 | 村田 智子 |        |

なお、復興工事事務所、広島市文化振興課、地元の住民の方々には、調査を円滑に進めるために多大な御配慮と御協力をいただいた。さらに調査にあたって、広島大学大学院教授 野島 永先生、広島大学総合博物館教授 藤野 次史先生、県立広島大学教授 鈴木 康之先生、比治山大学教授 安間 拓巳先生から、貴重な御指導、御助言をいただいた。また遺物について、公益財団法人広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室 恵谷 泰典氏、順田 千織氏から、貴重な御助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

## II 位置と環境

### 1 位置と自然的・地理的環境

緑井大上遺跡は、広島市安佐南区緑井八丁目に所在する。緑井地区は、広島市の中央を流れる太田川下流域の西岸に位置し、北から西にかけては阿武山（標高 585.9 m）と権現山（標高 396.8m）が連なる山地、東から南にかけては古川、西から南にかけては安川に囲まれている。なお、古川は太田川の旧流路であり、1607 年の大洪水で太田川が現在の位置に変化したという記録が残る<sup>1)</sup>。

本遺跡は、阿武山南麓の独立丘陵上、標高 29.75 m～33.25 m付近に位置する。周囲は、阿武山支谷の小河川による複数の扇状地が重なる複合扇状地である。南に約 300 m の距離には古川（直近の標高：8.3 m）が位置し、本遺跡との比高は約 21.5～25 m である。

### 2 歴史的環境

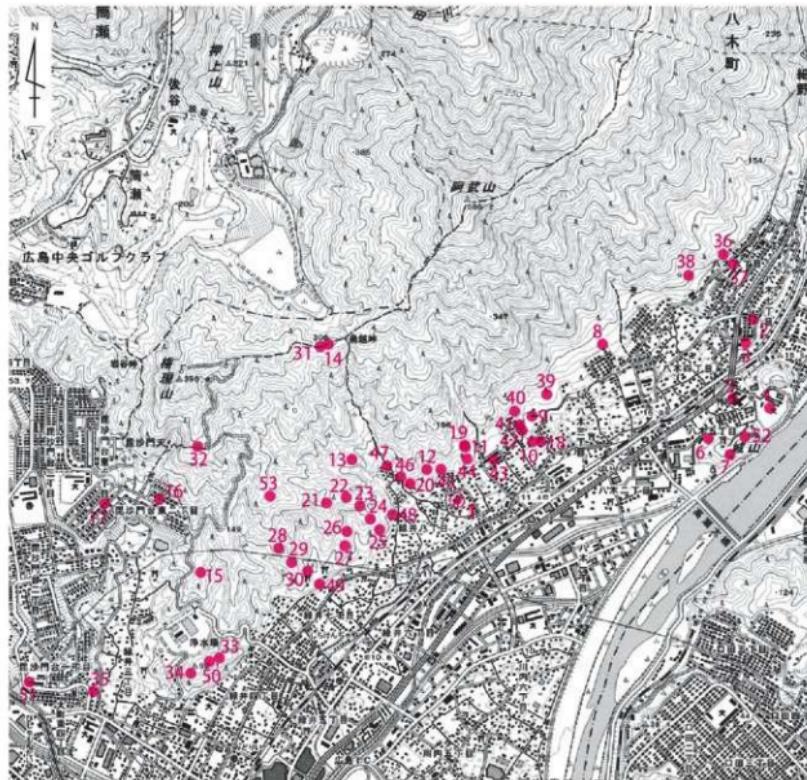
#### 弥生時代

緑井大上遺跡のある安佐南区緑井地区では、弥生時代以降の遺跡が複数確認されている。最も早い時期は弥生時代中期で、神宮山第 2 号古墳の付近から土器片が出土したが、明確な遺構は確認されていない<sup>2)</sup>。弥生時代後期については、緑井地区的権現山遺跡とシンナシ遺跡、緑井地区的北に位置する八木地区的水元貝塚、足谷遺跡と細田遺跡<sup>3)</sup>などから土器などの遺物が出土している<sup>4)</sup>。ただし、いずれも貝塚や土器包含層からの出土で、これまで八木・緑井地区では明確な集落の遺構は確認されていない。周辺の遺跡では、権現山南麓に位置する毘沙門台遺跡<sup>5)</sup>と毘沙門台東遺跡<sup>6)</sup>で、弥生時代後期の住居跡が計 160 軒以上確認されている。

これまでの調査で、弥生時代後期における広島湾岸の集落跡は、おおむね丘陵上に位置している。これは、治水技術が十分に発達していなかったことから、太田川のように氾濫の被害が大きい大規模な河川を避け、その支流周囲の低地で稲作を行う一方、付近の丘陵上でムラを営んだためと考えられている<sup>7)</sup>。これらの集落を規模と存続期間という点で比較すると、比較的短期間に数軒程度の住居跡で構成された小規模なものと、弥生時代後期前葉から終末・古墳時代初頭まで継続的に営まれ、10 軒以上の住居跡からなる大規模なものに分かれる。この 2 種類の集落跡は、主要な河川の支流ごとに、拠点となる大規模集落と、そこから派生・分村した小規模集落という関係にあると捉える考え方<sup>8)</sup>もある。

#### 古墳時代

古墳時代には土地利用が変化し、広島湾岸では丘陵上に古墳が作られるようになる。中でも緑井地区は、県内でも早い時期に古墳が作られた地域の一つである。緑井地区的宇那木山第 2 号古墳、神宮山第 1 号古墳は、埋葬施設が竪穴式石室で副葬品として鏡が出土しており、古墳時代前期の



1. 緑井大上遺跡（これまで大上古墳として『広島市遺跡分布地図』『広島県遺跡地図X(広島市)』には記載）

●弥生時代～古墳時代前期頃の遺跡

2. 細田遺跡
3. 細迫遺跡
4. 菊川山遺跡
5. 城山遺跡(地点1)
6. 城山遺跡(地点2)
7. 城山遺跡(地点3)
8. 水元貝塚
9. 中田公園遺跡
10. 足谷遺跡
11. 小原遺跡
12. シンナシ遺跡
13. 烏越遺跡
14. 烏越峠遺跡
15. 権現山遺跡
16. 昆沙門台東遺跡
17. 昆沙門台遺跡

●前・中期古墳(時期不明のものも含む)

18. 光広古墳
19. 小原古墳
20. 大上古墳(『佐東町史』記載の位置)
21. 宇那木山第1号古墳
22. 宇那木山第2号古墳
23. 宇那木山第3号古墳
24. 宇那木山第4号古墳
25. 宇那木山第7号古墳(上山古墳)
26. 宇那木山第5号古墳
27. 宇那木山第6号古墳
28. 八敷第1号古墳
29. 八敷第2号古墳
30. 宇那木山南古墳
31. 烏越峠西古墳
32. 権現山古墳
33. 神宮山第3号古墳
34. 神宮山第1号古墳
35. 白山第1号古墳

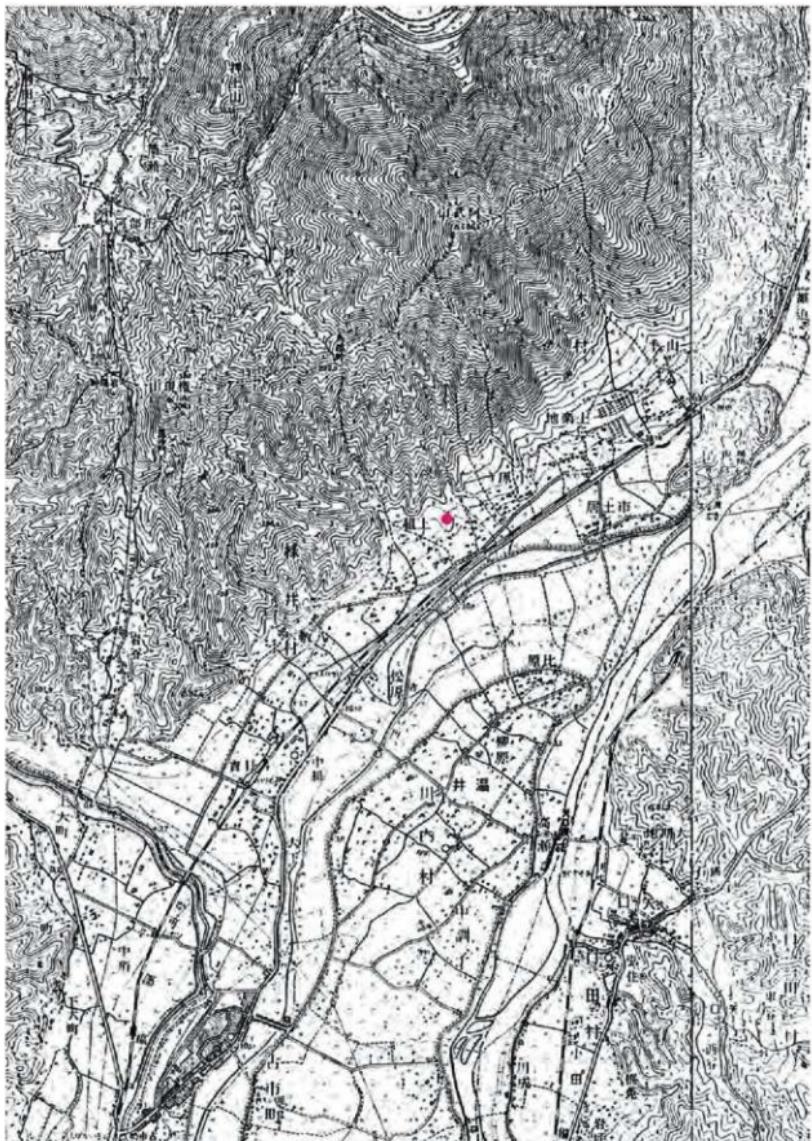
●後期古墳

36. 別所古墳
37. 大畠古墳
38. 天井林古墳群(3基)
39. 足谷古墳群B支群(3基?)
40. 足谷第3号古墳(足谷古墳群A支群)
41. 足谷第2号古墳(足谷古墳群A支群)
42. 足谷第1号古墳(足谷古墳群A支群)
43. 上小原古墳群(4基)
44. 小原山古墳群(2基)
45. 原山古墳群(2基)
46. 上山古墳?(シンナシ古墳?)
47. 烏越古墳
48. 四本寺古墳群(2基)
49. 宇那木神社古墳
50. 神宮山第2号古墳(箱形石棺)
51. 白山第2号古墳(箱形石棺)

●山城跡

52. 八木城跡
53. 中城跡

第1図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 周辺地形旧版地図（赤丸—遺跡所在地・S=1/25,000）

築造と想定されている<sup>9)</sup>。宇那木山第2号古墳の調査成果からは、3世紀末葉にヤマト政権と連携し、太田川下流域において最初に前方後円墳を築造した地域首長墓が想定されている<sup>10)</sup>。これに続いて4世紀前葉の築造とされる神宮山第1号古墳からは、内行花文鏡と考えられる鏡片が出土した<sup>11)</sup>。

八木・緑井地区において、これまで周辺の遺物採取等で中期古墳と推定されていたものは、大上古墳<sup>12)</sup>に限られていた。ただし埋葬施設が箱式石棺で須恵器、人骨が出土という断片的な情報はあるものの全壊しており、詳細については明らかではなかった。

後期古墳としては、緑井地区では箱形石棺を埋葬施設とする神宮山第2号古墳、横穴式石室を埋葬施設とする鳥越古墳<sup>13)</sup>、四本寺第1号古墳、四本寺第2号古墳<sup>14)</sup>などがある。八木地区では、横穴式石室を埋葬施設とする別所古墳<sup>15)</sup>、天井林古墳群、足谷古墳群、上小原古墳群、小原山古墳群<sup>16)</sup>などがある。鳥越古墳や四本寺第2号古墳の調査成果からは、地域交通の要衝を掌握し、畿内政権と繋がりのある被葬者像が想定されている<sup>17)</sup>。

## 古代・中世

平安時代中期（10世紀中頃）に編纂された『和名類聚抄』<sup>18)</sup>には、「佐伯郡緑井」という地名が記されており、現在の安佐南区緑井に比定されている。また、律令制度の中で五畿七道が成立し、中でも都と太宰府を結ぶ山陽道が最も重視された。『延喜式』<sup>19)</sup>（967年施行）に記述がある山陽道の安芸駅と伴部駅は、それぞれ府中町と沼田町伴に比定されている。古代山陽道は古市周辺で太田川を渡り、安川を遡るルートをたどるとの説もあり、その場合、緑井郷の南端は山陽道に面していたことになる<sup>20)</sup>。

源氏と平氏が争った治承・寿永の乱後、鎌倉幕府は宗氏を佐東郡・安南郡（安芸郡南部）の本補地頭に任命したが、宗氏は承久の乱で後鳥羽上皇方につき敗北した。代わって、承久三年（1221）に佐東郡の新補地頭となったのが香川氏である<sup>21)</sup>。本遺跡は香川氏の本拠があった八木城跡と、香川氏関係の城とされる中ノ城跡<sup>22)</sup>が見渡せる位置にあることから、山城関連の遺跡が存在する可能性は十分考えられたものの、今回の調査ではそれを裏付ける遺構は確認できなかった。

## 注

- 1) 「保田家系譜」「佐東町史」広島市役所 1980年
- 2) 福谷昭二「第二章 佐東町のあけぼの」『佐東町史』広島市役所 1980年
- 3) 佐東町教育委員会『広島県安芸郡佐東町細田遺跡・宮迫遺跡調査概報』 1968年
- 4) 2に同じ。
- 5) 犀沙門台遺跡発掘調査団『犀沙門台遺跡発掘調査報告』
- 6) 広島市教育委員会『犀沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990年

- 7) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』 1991 年
- 8) 7に同じ。
- 9) 脇坂光彦・小都隆「宇那木山 2 号古墳」『百聞よりも一見 探訪・広島県の考古学』溪水社 2013 年
- 10) 9に同じ。
- 11) 9に同じ。
- 12) 大上古墳は、『広島市遺跡分布地図』(広島市教育委員会 2002) や『広島県遺跡地図 X (広島市)』(広島県教育委員会 2004) では第 1 図 1 の位置に、「佐東町史」では第 1 図 20 の位置に記載されている。『広島市遺跡分布地図』や『広島県遺跡地図 X (広島市)』の元となった分布調査では、須恵器片や土師器片を採取している。ただし『広島県遺跡地図 X (広島市)』では、概要として「箱式石棺、人骨、須恵器、土師器」、備考として「全壙」の記述がある。また、『新修廣島市史第七巻資料編その二』(広島市 1960) には、緑井大上町営住宅の敷地で箱式石棺や人骨が出土とあり、町営住宅の位置は第 1 図 20 の位置になる。つまり、本来、箱式石棺や人骨が出土した大上古墳は第 1 図 20 の位置のものであり、新たに実施した分布調査により、別の大上古墳が第 1 図 1 の位置に記載されるに至ったと想定される。本文における大上古墳は、第 1 図 20 のものを指している。
- 13) 公益財団法人広島市文化財団『鳥越古墳』 2017 年
- 14) 公益財団法人広島市文化財団『四本寺第 2 号古墳』 2019 年
- 15) 財団法人広島市文化財団『別所古墳発掘調査報告』 2010 年
- 16) 2に同じ。
- 17) 13・14に同じ。
- 18) 「安藝國第百十六」『和名類聚抄』承平年間 (931 ~ 38)
- 19) 「延喜式卷第二十八」『国史大系』第 13 卷 経済雑誌社 1906 年
- 20) 福谷昭二「第三章 古代・中世初頭の佐東町」『佐東町史』広島市役所 1980 年
- 21) 20に同じ。
- 22) 20に同じ。
- 「安藝國沼田五 城塹」『藝藩通史』卷四十八 文政 8 年 (1825)

### III 遺構と遺物

#### 1 調査の概要（第3・4・7図）

本遺跡は、阿武山の頂部（標高 585.9m）から、南南西から南南東へと緩やかに弧を描いて派生する尾根筋のはば先端で独立丘陵状を呈する場所に位置する。西側には鳥越川が形成する扇状地が、東側には大上川や上山川が形成する扇状地が広がっている。直近の平地との比高差は西側で約3～5m、南側で約9m、東側で約12～15mである。

調査は二次に分けて行った。平成29年度の第一次調査では概ね調査区の西側と南側、平成30年度の第二次調査では東側の調査を実施した。

広島市民民局文化スポーツ部文化振興課（以下「広島市文化振興課」とする。）の試掘調査では山城跡と想定される地形改変が確認されていたため、最初に調査区の要所に試掘溝を設定して土層の堆積状況を確認した。その結果、広島市文化振興課が山城と想定した地形改変は近現代の里道や土取りによって生じたものであることが判明した。一方で、弥生時代～古墳時代頃の遺構や遺物が確認できたため、遺構が想定できる範囲について調査を実施した。調査範囲での最高所は中央の広い平坦面のやや南側で標高33.49m、最低所は東端で標高29.78mである。

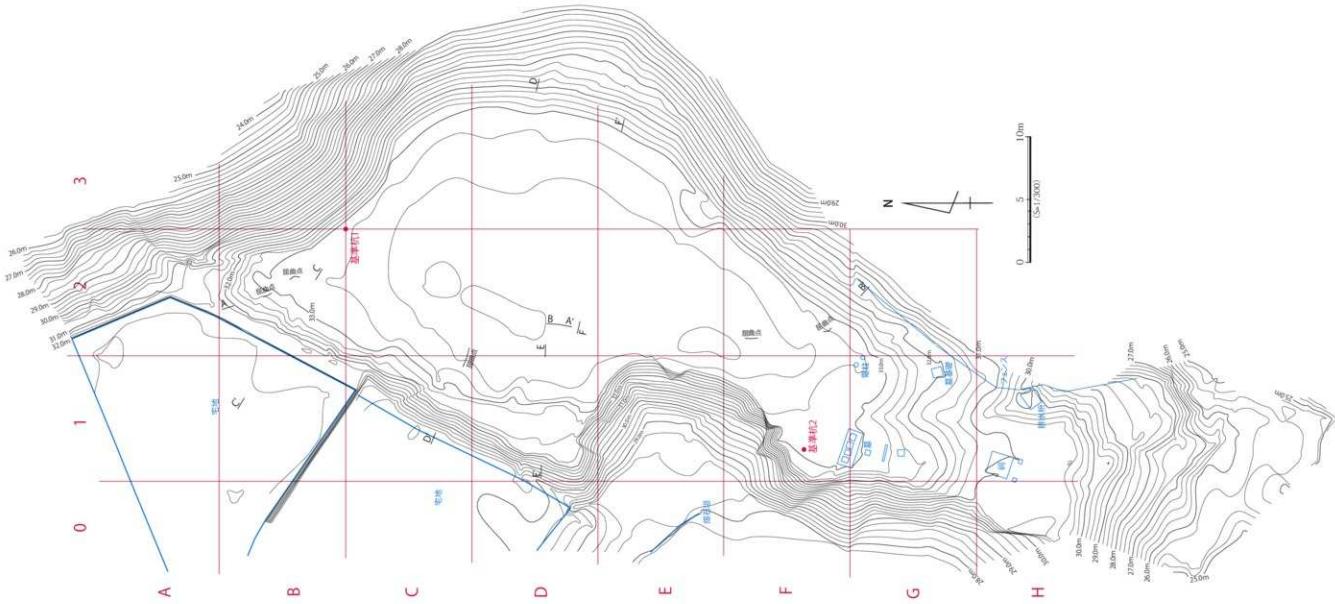
調査の結果、弥生時代後期初頭～古墳時代前期の遺構として、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、ピット群1か所、テラス状遺構5か所、土坑12基を、古墳時代中期の遺構として古墳2基を、中世～近現代及び時期不明の遺構として、土坑15基、溝状遺構3か所、石垣1か所を確認した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・黒色土器・須恵質土器・磁器・鉄器・玉類・石器等が出土した。

#### 2 基本層序（第5・6図）

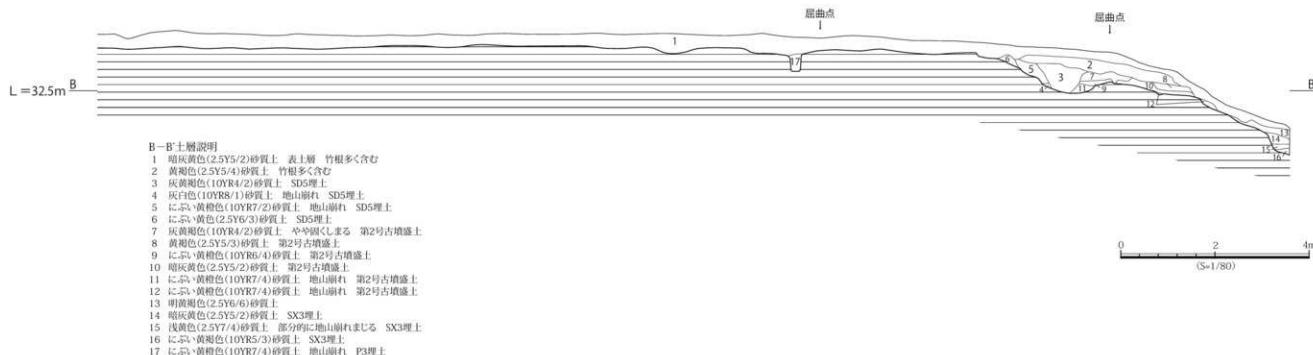
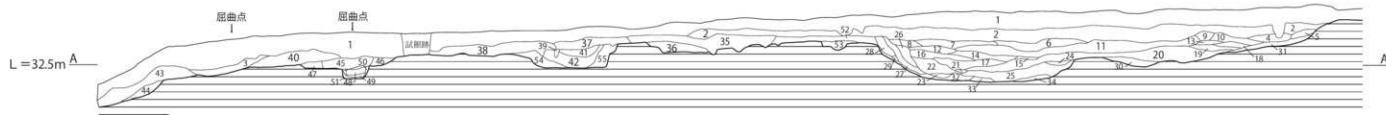
基本層序として第5図A-A'及びB-B'、第6図D-D'について述べる。検出された遺構の下部は、地山面を掘り込んで形成されている。しかしながら、遺構の残存部分や埋土を見ると、ほとんどの遺構は完全な形では残存していないと考えられた。例えば、SH2の埋土はA-A'で見ると52・53層であるが、これらの層が遺構面全体に分布しているわけではなく、攪乱され、近現代に形成された2層の土が遺構面に直接載る場所もあった。SH2はSK1やSD4によって切られているが、それらの影響を受けていないと考えられる場所でも、尾根の中心に近い東側の壁は遺存せず、傾斜面側にわずかに残った西側の壁も想定される本来の高さが大きく損なわれていた。第1号古墳や第2号古墳についても、A-A'1層やB-B'1・2層といった表土層やそれに準ずる層が地山層や流出、削平を免れ、わずかに残った盛土層に直接載っており、また、埋葬施設の掘り方も本来の深さが残存しているとは考えられない状況だった。こうしたことにも加え、表土層の出土遺物などから、本遺跡は、後世でも主に近世～近現代と考えられる時期の利用により、大きく削平されており、ほとんどの遺構の上部は失われていると想定された。D-D'の39・40層はそうした削平



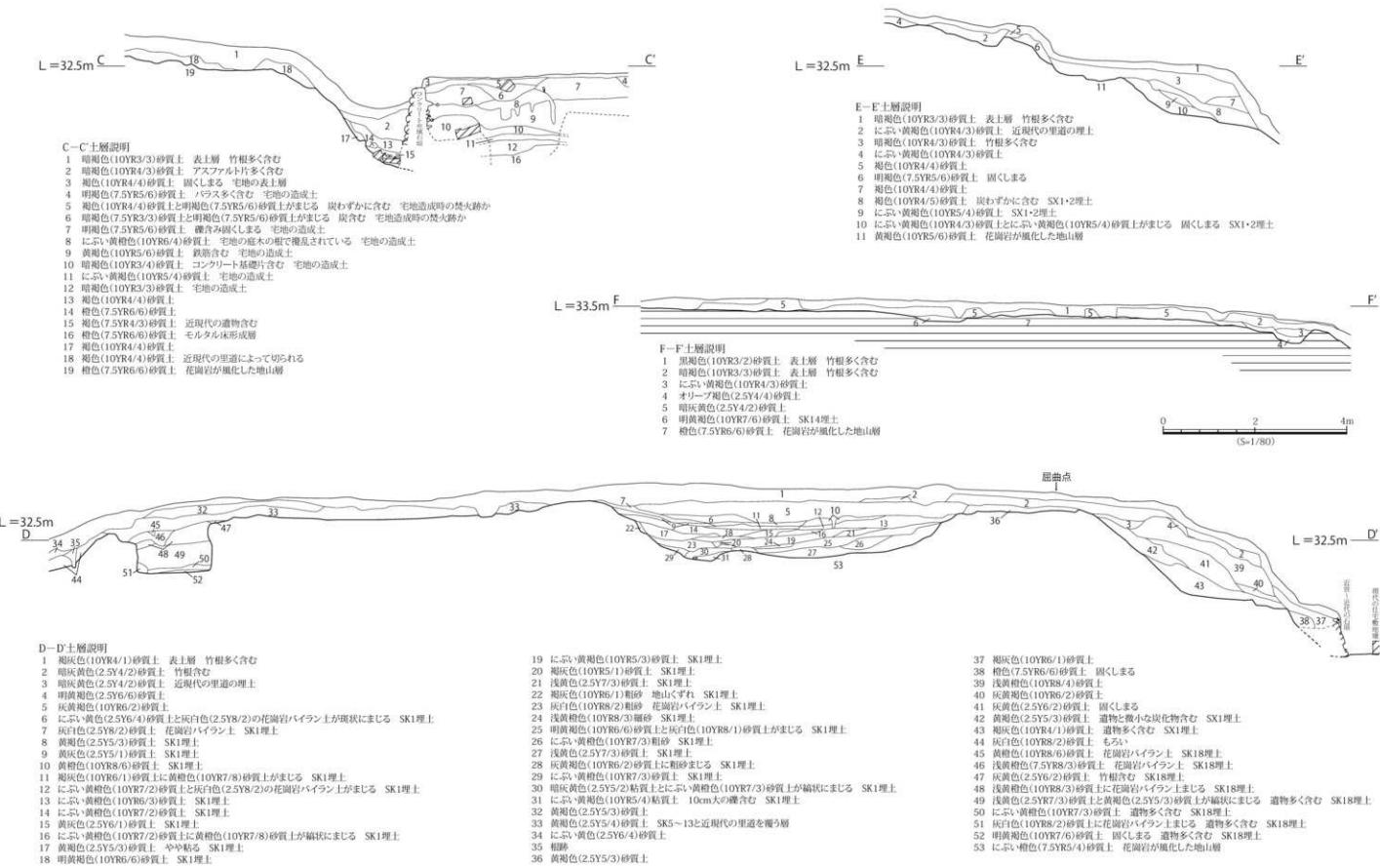
第3図 周辺地形現況図 (S=1/2,500)



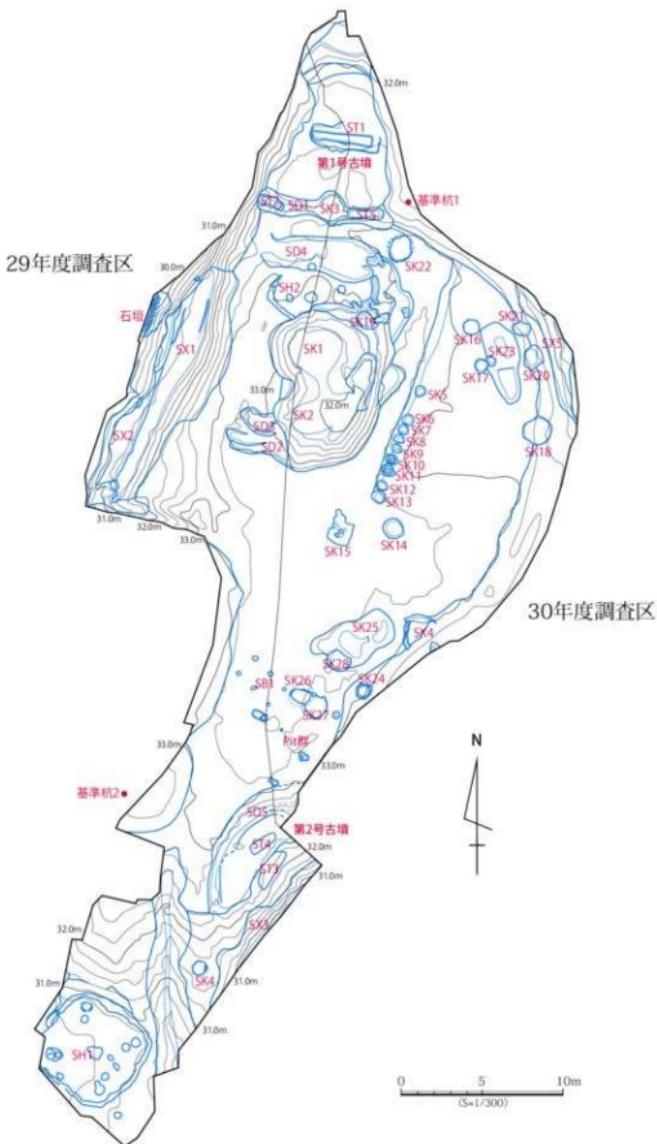
第4図 調査前地形測量図・調査区割り図 ( $S=1/300$ )



第5図 基本断面（1）(S=1/80)



第6図 基本層序(2)(S=1/80)



第7図 調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1/300)

による堆積した痕跡と考えられる。

第6図C-C'を見ると、3~12層が宅地の造成土であるがその直下の16層にはモルタル床面が形成されていた。本遺跡の北側は団地であるが、昭和40年代までは県の種鶴場が設置されており、それに関連した何らかの施設であると考えられる。この上に宅地を造成する際に、コンクリートを充填した石垣を築いて盛土をしている。その際に第1号古墳も含む調査区の北端を削平し、その後、2・13~15・17層が石垣前面に堆積したと想定される。調査前の地形でも、調査区から北側の宅地にかけては一段下がっていたが、土層観察から、宅地造成前には、2.2m以上の比高があり、本遺跡は、阿武山から派生する尾根に連なるものの、独立丘陵状の地形であったことがわかる。

### 3 集落跡

#### (1) 遺構

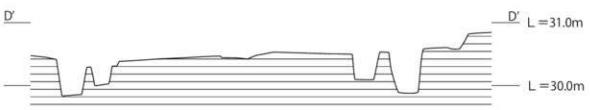
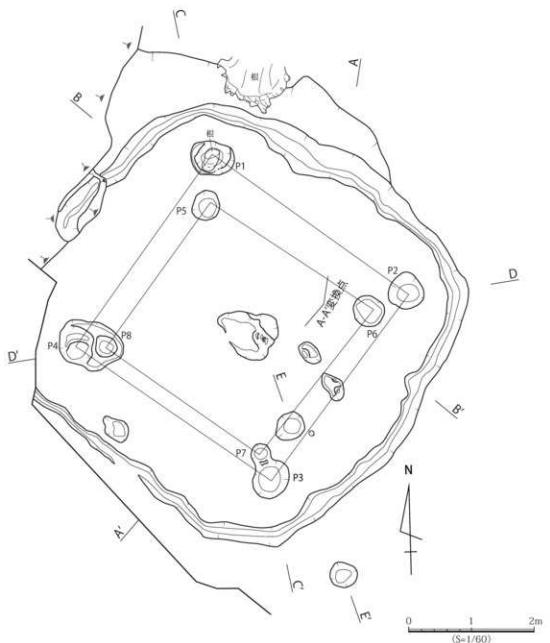
##### ○ SH1 (第8・9図)

SH1は調査区の南端、現標高30.5m付近に位置する竪穴住居跡である。壁は北西側の一部が流失するがそれ以外は残存し、平面形状は隅丸方形である。床面の規模は北東壁で約4.63m、南東壁で約5.3m、最高所は標高30.65mとなる。床面積はおよそ24m<sup>2</sup>である。残存する壁高は最高0.48mで、壁溝は北西壁の北側約2.04mが残存しており、それに続き、北東壁から南東壁を経て、南西壁の調査範囲外に至るまでの箇所で確認できた。残存する幅は3~20cm、深さは2~8cm程度である。

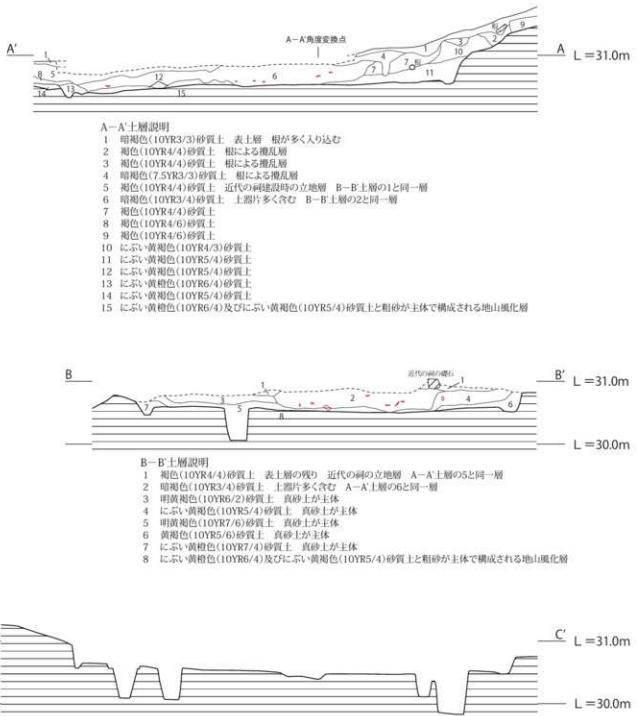
主柱穴は壁面との位置関係と規模からP1~P4の4本と考えられる。P1~P4の内側に隣接してP5~P8を検出した。P7・P8についてはそれぞれP3・P4と掘方の一部を共有する形になっている。拡張前の主柱穴である可能性もあるが、層序での時期差が認められないこと、壁溝等の他の施設での拡張痕跡が確認できることから、主柱の補助柱穴であると考えられる。このような住居跡は、近隣の毘沙門台東遺跡の第42号住居跡にもみられる<sup>1)</sup>。P1は底面にまで根が入り込んでいたが、底面形状は長径34cm、短径21cmの長円形と想定され、底面標高は30.1mである。P2は底面形状が長径33.6cm、短径26.8cmの長円形で、底面標高は29.9mである。P3は底面形状が長径40.6cm、短径33.8cmの長円形で、底面標高は29.8mである。P4は底面形状が長径36cm、短径24.8cmの長円形で、底面標高は29.8mである。柱間距離は、P1-P2間で3.82m、P2-P3間で3.67m、P3-P4間で3.69m、P1-P4間で3.72mとなる。

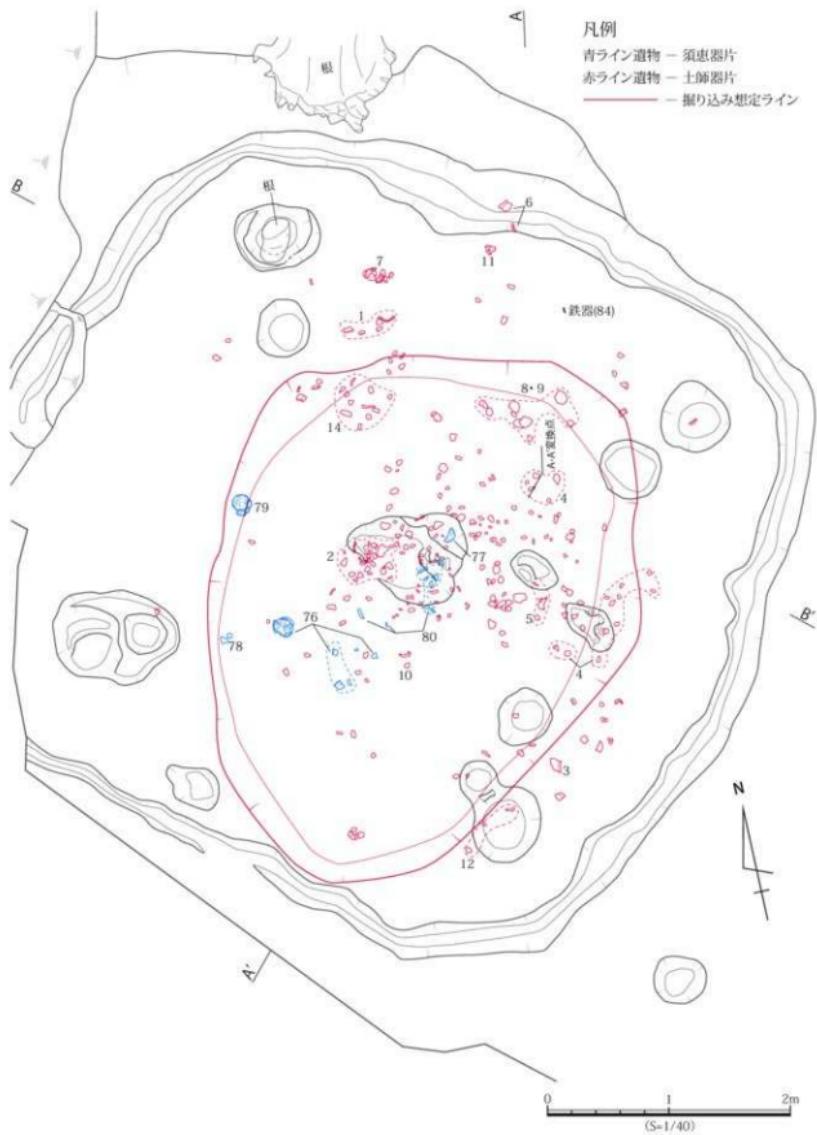
P5は底面形状が径28cmの円形と想定され、底面標高は30mである。P6は底面形状が長径37.4cm、短径29.8cmの長円形で、底面標高は30.1mである。P7は底面形状が長径20cm、短径16cmの長円形で、底面標高は30.1mである。P8は底面形状が長径21cm、短径18cmの長円形で、底面標高は30mである。柱間距離は、P5-P6間で3.06m、P6-P7間で2.86m、P7-P8間で2.99m、P5-P8間で2.77mとなる。

床面のほぼ中央、主柱穴に囲まれた位置に西側の一部が途切れるが、東西約97cm、南北約



第8図 SH1 実測図 (S=1/60)





第9図 SH1 遺物出土状況実測図 (S=1/40)

72cm のいびつな長円形の掘り込みを確認した。掘り込みの底面形状は長辺約 50cm、短辺約 39cm のいびつな四角形で底面標高は 30.45m である。この掘り込みは床面での位置から、炉跡と想定される。

SH1 の埋土や床面からは土器を中心に大量の遺物が出土したが、特に A-A' の 6 層と B-B' の 2 層にあたる暗褐色砂質土層に集中していた。この層は SH1 が廃絶して、時間が経過し、黄褐色や黄橙色系の砂質土層が埋まった後に形成されている層である。暗褐色砂質土層から出土した遺物には黄褐色や黄橙色系の砂質土層の出土遺物と時期が異なる遺物が含まれているため、この層については後述する。確実に SH1 の遺構面から出土している遺物としては、用途不明の鉄器（84）がある。黄褐色や黄橙色系の砂質土層からは、出土位置を図示した土師器（1・3・6・7・11・12）と図示していない（13）が出土している。これらの形態から、若島一則氏による編年（以下「若島編年」とする）のⅢ-1 期<sup>2)</sup>に属すると考えられる。

#### ・暗褐色砂質土層範囲について

SH1 の埋土中の暗褐色砂質土層は、明確な掘方は確認できなかったが、概ね長辺 4.6m、短辺 3.5m の長円形の範囲で存在し、最大の厚さが 0.34m である。土層から、SH1 が廃絶し、埋没した後に中央付近の窪みを利用し、若干の掘削を行ったものと考えられる。掘削の際に、SH1 の床面を削った箇所もあったために、炉跡と想定される掘り込みの掘方の一部が途切れているとも想定できる。

遺物は土師器（2・4・5・8～10・14）、出土位置を図示した須恵器（76～80）と図示していない（81）が出土している。その形態から、土師器は若島編年のⅡ-2-3 期～Ⅲ-1 期、須恵器は田辺昭三氏による編年の MT15 型式～TK10 型式古相<sup>3)</sup>、中村浩氏による編年のⅡ型式 1～2 段階<sup>4)</sup>に属すると考えられる。土師器については、SH1 のものが攪乱されたと想定され、掘り込みは須恵器の時期に属すると考えられる。残存状況からはその用途については想定しえなかった。

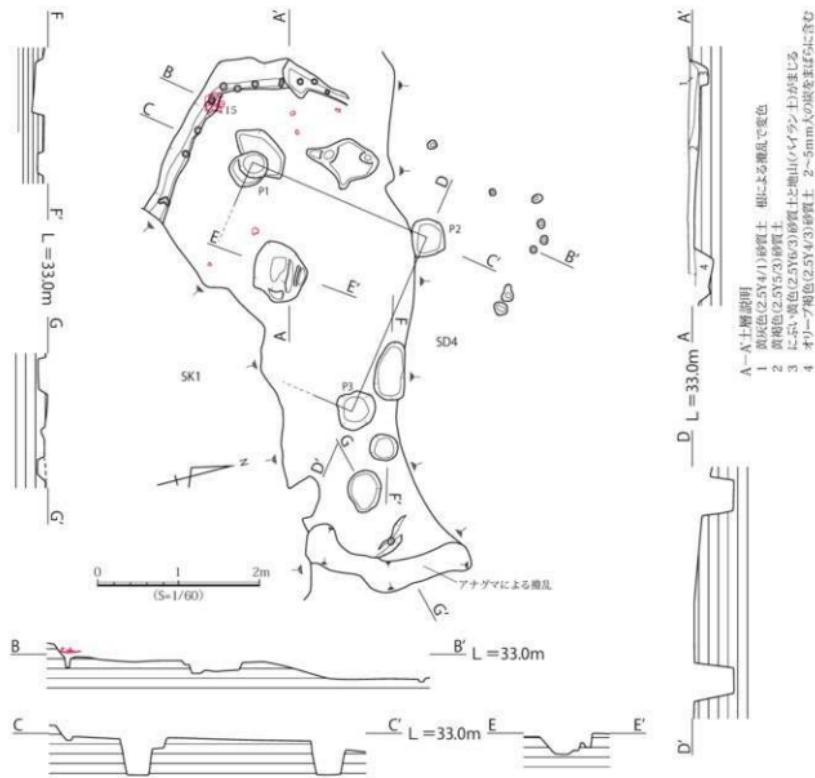
#### ○ SH2（第 10 図）

SH2 は C2 区、SH1 からは 44m 北に離れて、現標高 33m 付近に位置する竪穴住居跡である。北側は SD4 に、南側は SK1 によって削平されている。壁は南西壁と北西壁の一部のみが残存し、そこから想定される平面形状は隅丸方形である。残存する床面の規模は南西壁で約 2.1m、北西壁で約 1.9m である。また、東側の SD4 と SK1 に削平されている間には、アナグマが掘った南北方向の溝が存在するが、その溝に合流する形で北西から南東方向に向かって長さ 58cm、深さ 1～5cm の短い溝が存在する。後世の削平により明確な壁にはならないが、後述する主柱との位置関係から、この溝が北東壁から南東壁にかかる壁溝の一部と考えられる。その場合、残存する床面の最高所は標高 33.01m となり、床面規模は北西から南東方向が約 4.7m、北東から南西方向が約 4m で、およそ 19 m<sup>2</sup> と想定される。残存する壁高は最高 18cm で、壁溝は残存する壁に沿って確認できた。残存する幅は 5～22cm、深さは 4～9cm 程度である。壁溝内では、間隔を空けて配置された底面形状が概ね径 3～4cm の円形で、深さ 5～16cm 程度の小ピットを検出した。位置と規模から壁面の土留板の支柱穴と想定される。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1 ~ P3 と SK1 により削平された箇所に本来あったものの 4 本と考えられる。P1 は、底面形状が長径 26cm、短径 23cm の長円形で、底面標高は 32.5m である。P2 は底面形状が長径 35.8cm、短径 31.6cm の長円形で、底面標高は 32.5m である。P3 は底面形状が長径 32.2cm、短径 29.6cm の長円形で、底面標高は 32.5m である。柱間距離は、P1 - P2 間で 2.38m、P2 - P3 間で 2.35m となる。

床面の主柱穴に囲まれたほぼ中央の位置に長辺 77.5cm、短辺 66cm の長円形の掘り込みを確認した。掘り込み内は数段になっているが、底面の形状は長辺 31.4cm、短辺 17.7cm の長円形で底面標高は 32.67m である。この掘り込みは床面での位置や土層でも炭がまじることから、炉跡と想定される。

SH2 遺構面からは、土師器（15）が出土している。その形態から、高橋護氏による吉備地方南

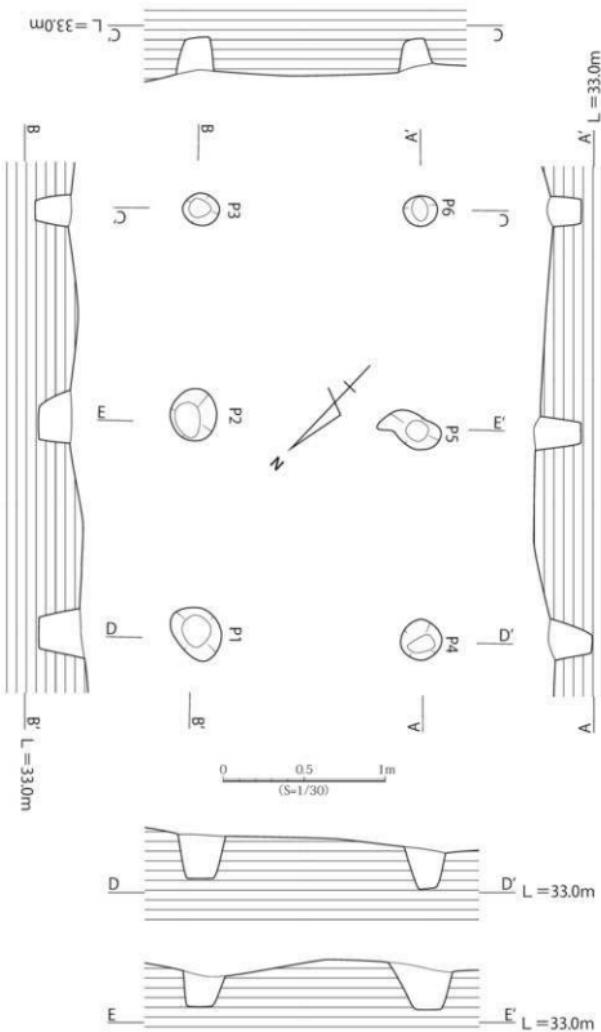


第 10 図 SH2 実測図 (S=1/60)

部平野の編年の 10d 期<sup>5)</sup>に属すると考えられる。

### ○ SB1 (第 11 図)

SB1 は E2 区付近、SH2 の南約 24m に位置する掘立柱建物跡である。柱穴は 1 間 × 2 間の柱穴配置になる 6 基を確認した。柱穴の底面直徑は約 11 ~ 22cm、底面標高は 33.02 ~ 33.1m とほぼ水平である。柱間距離は P1 - P2 間、P2 - P3 間、P4 - P5 間で 1.3m、P5 - P6 間で 1.35m、P1 - P4 間及び P2 - P5 間で 1.4m、P3 - P6 間で 1.35m である。この間隔で配置した場合、周辺に他のビットがないこと、SB1 周辺にはビットを完全に削平するような地形変更が認められないことから、1 間 × 2 間で P1 から P3 のラインを長軸すなわち平行とする柱穴の配置が想定できる。その場合、棟方向は N43.7° W となり、床面積はお



第 11 図 SB1 実測図 (S=1/30)

よそ 3.6 m<sup>2</sup>となる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土しておらず、その性格については明確にし得なかった。

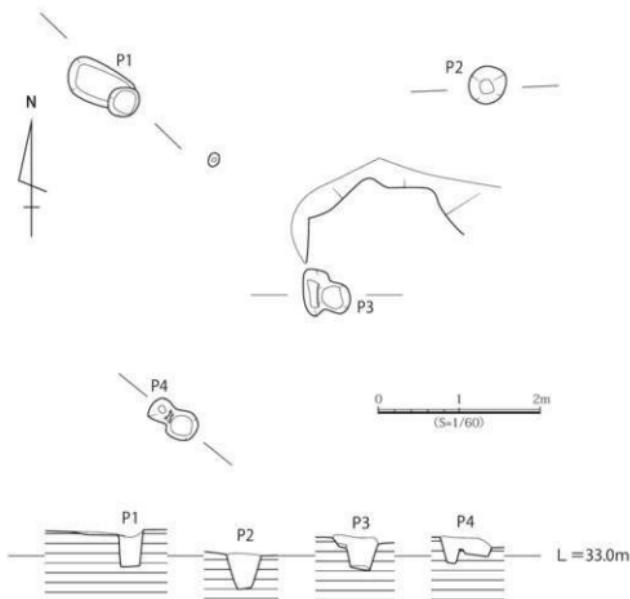
#### ○ F2 区ピット群（第 12 図）

P1 は SB1 の南約 75cm, P2 は P1 の東約 4.5m, P3 は P1 の南東約 3.3m, P4 は P3 の南西約 2.3m に位置する。底面の規模は P1 が直径約 36.4cm, P2 が直径約 45.9cm, P3 が直径約 35.4cm, P4 が直径約 43.4cm の円形で、底面標高は P1 が 32.87m, P2 が 32.58m, P3 が 32.87m, P4 が 33m である。

P1 ~ P4 は柱穴として妥当な規模・深さをもつが、組み合わせや遺構の性格を特定することはできなかった。

#### ○ SX1・2（第 13 図）

SX1 は調査区の北側、SH2 の南西に約 2.3m 離れて位置するテラス状遺構である。北側と西側は急傾斜になっており、流失している可能性がある。等高線に平行するように掘り込んで平坦面を形成している。壁は東側に緩やかに弧を描いて 15.4m の範囲で南北に掘り込まれている。壁高は最



第 12 図 F2 区ピット群実測図 (S=1/60)

高で 1.56m あり、SH2 のある平坦面からはかなりの落差がある。平坦面は壁に沿って、奥行 0.68 ~ 1.68m の範囲で残存し、平坦面最高所は標高 31.51m である。北側壁面の一部に沿って 2.46m の範囲で壁溝を確認し、残存する規模は、幅 4 ~ 20cm、深さ約 5cm である。

また、壁溝と西側の流失部分の間には、幅 2.3m、奥行約 35cm、高さ約 18cm の段があり、さらにその西側には、幅 3.74m、奥行約 45cm、高さ約 10cm の段がある。また、平坦面の南端から南西に向けて、幅 47.8cm、奥行 33.75cm、高さ約 14cm の段と、幅 72.2cm、奥行 67.8cm、高さ約 15cm の段を検出した。

平坦面の北端に隣接して、ピットを検出した。ピットの半分は流失しているが、本来の底面形状は長径 30.9cm の長円形と想定され、残存する短径部分の規模は 13cm で、底面標高は 30.89m である。

SX1 遺構面からは土器（16 ~ 18）、石器（120・121）、埋土からは土器（19）が出土している。また、壁溝の西側に隣接して、粘土塊が出土した。遺構面出土土器の形態から若島編年Ⅱ - 3 期からⅢ - 1 期に属すると考えられる。

ここで本遺構の性格を考えてみたい。出土遺物やその形状からは何らかの作業場としての性格が考えられるが、北側と南端に見られる段差や SH2 等がある集落中心部との比高差を考えると通路としての役割も併せ持つものと想定される。

SX2 は SX1 の南半部に隣接して位置するテラス状遺構で、北側と西側は急傾斜になっており、流失している可能性がある。等高線に平行して南北に長い平坦面を形成しており、壁は 6.9m の範囲で掘り込んで、壁高は最高で 15cm である。平坦面は壁に沿って、奥行 0.59 ~ 1.33m の範囲で残存し、平坦面最高所は標高 31.28m である。平坦面の北端には、幅 61cm、奥行 13cm、高さ約 8cm の段がある。

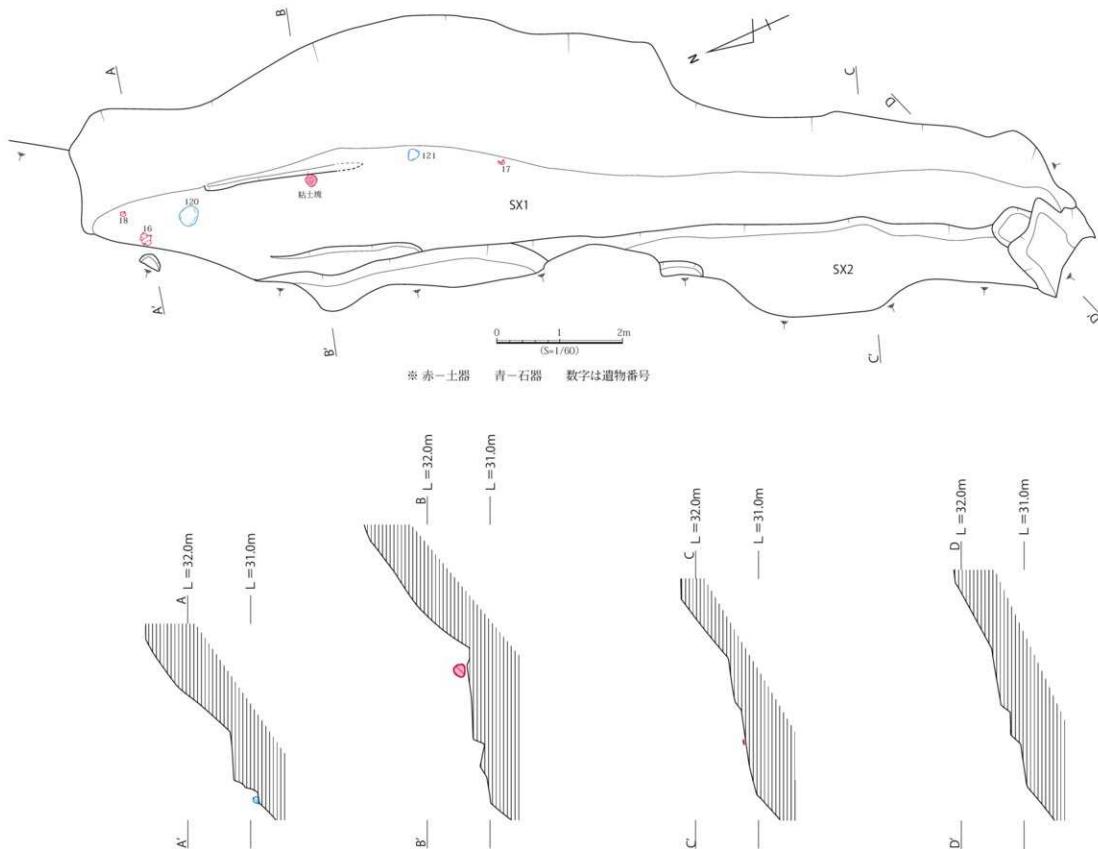
SX2 埋土からは土器（20 ~ 22）が出土している。出土土器の形態は若島編年Ⅱ - 1 期・Ⅱ - 2 - ①期・Ⅲ - 1 期に属すると考えられる。埋土中の出土であり時期差も大きく、遺構の時期を直接決定づけるものではないが、下限はⅢ - 1 期と想定される。

ここで本遺構の性格を考えると出土遺物や形状から何らかの作業場である可能性が想定される。SX1 との先後関係は確認できなかったが、遺物の時期や検出状況から、時期差が無く、一体のものであるとも考えられる。

### ○ SX3 (第 14 図)

SX3 は調査区の南側、SH1 の北東に約 4.7m 離れて位置するテラス状遺構である。北東から南東側は調査範囲外になっており、確認し得なかった。確認範囲では、等高線に平行するように掘り込んで平坦面を形成している。確認できた壁は北東から南西に 11m の範囲で掘り込まれている。壁高は最高で 97cm である。平坦面は壁に沿って、幅 6.56m、最大奥行 0.24m の範囲で確認し、平坦面最高所は標高 30.76m である。

本遺構からは遺物が出土していないが、遺構の斜面上方には第 2 号古墳があり、古墳の形状と位置関係、土層観察から、SX3 が先行するものであるため、本遺跡の集落遺構と想定することに

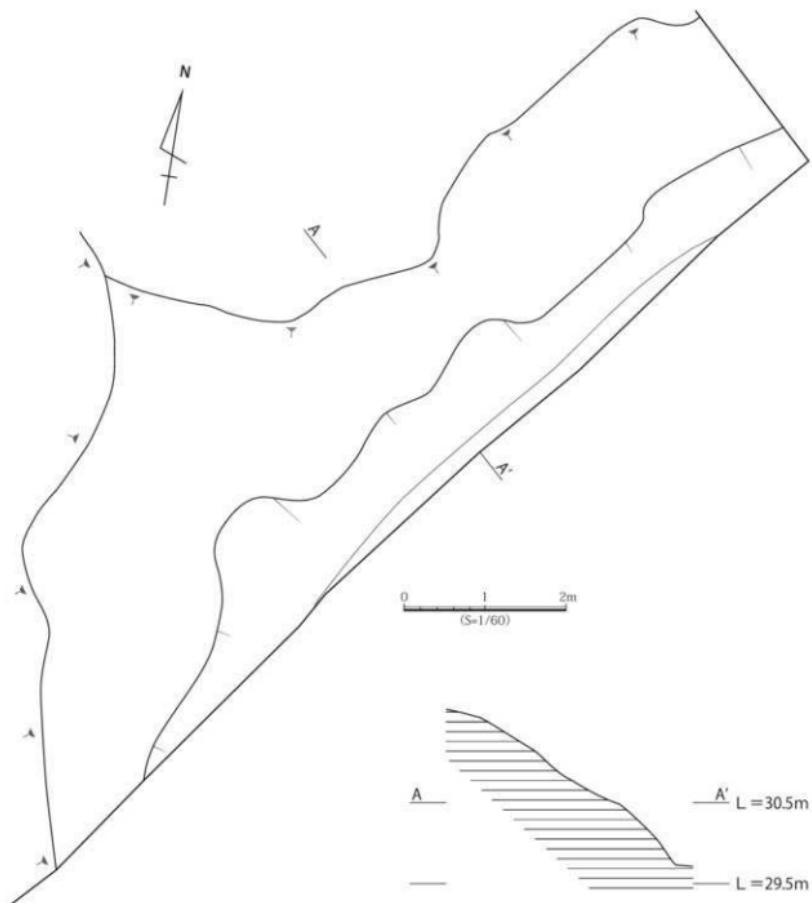


第13図 SX1・2実測図 (S=1/60)

矛盾はない。

○ SX4 (第 15 図)

SX4 は調査区の東南端、SB1 の北東約 9.6m の地点に位置する。壁面は半円形に遺存しており、南側は流失していると考えられる。平坦面規模は直径 2m の半円状で、最高所の標高は 32.98m、壁高は最大 16.1cm である。西壁の一部に壁溝が残存しており、幅 19 ~ 31cm、残存する深さは

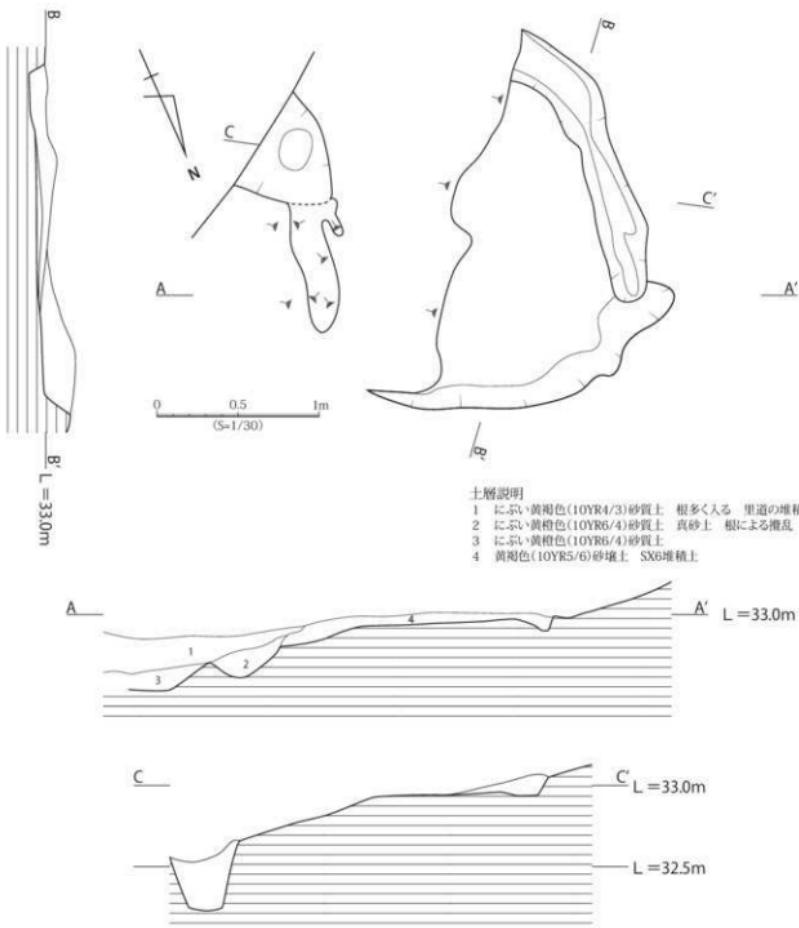


第 14 図 SX3 実測図 (S=1/60)

最大 13cm である。

また、SX4 の南東部、調査区東端にはピットが位置する。底面形状は長径約 26 cm、短径約 19cm の長円形で、底面標高 32.24m である。

ピットと溝の位置関係から、本遺構はテラス状遺構ではなく住居跡であるという可能性も考えられるが、調査範囲では確認することができなかった。なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

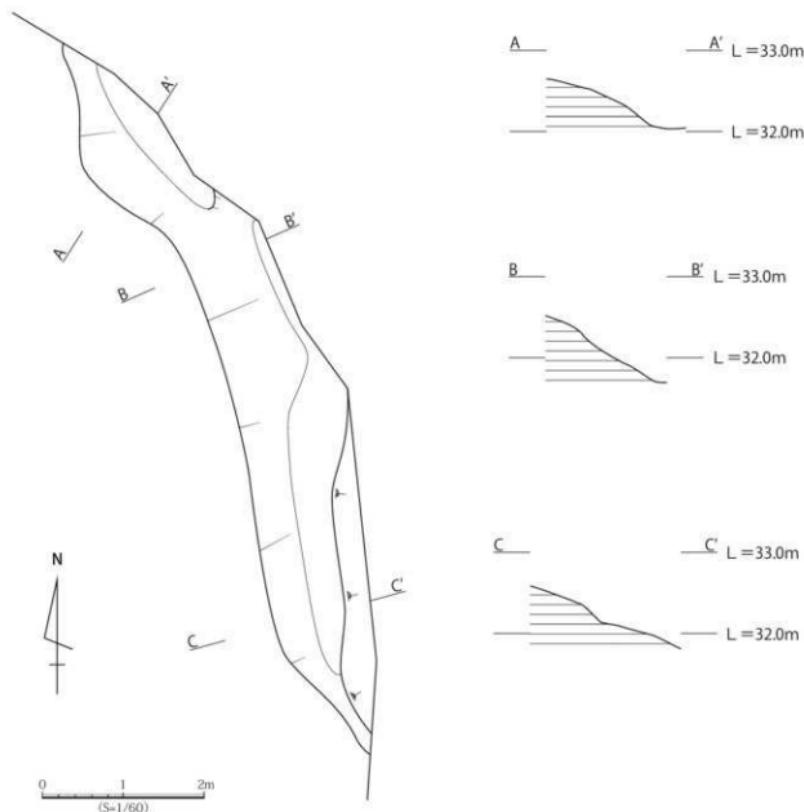


第 15 図 SX4 実測図 (S=1/30)

○ SX5 (第16図)

SX5は調査区の北東端、標高32.2mの等高線にほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。東側は調査範囲外のため未調査であるが、現地形ではすぐに崖面となる。平坦面は北側と南側の2か所に確認でき、平坦面同士の直近での比高は0.25mである。北側の平坦面の規模は、南北1.13m、東西最大0.22m、床面標高は32.05mで、残存する掘り込みの深さは最大0.45mである。南側の平坦面の規模は南北2.85m、東西は最大0.35m、床面標高は約31.7～32.1mで、残存する掘り込みの深さは最大0.7mである。集落の東端に位置することから、通路的な性格も想定できる。

SX5の埋土からは、弥生土器(23・24)が出土している。遺構の年代を直接決定付けるもので



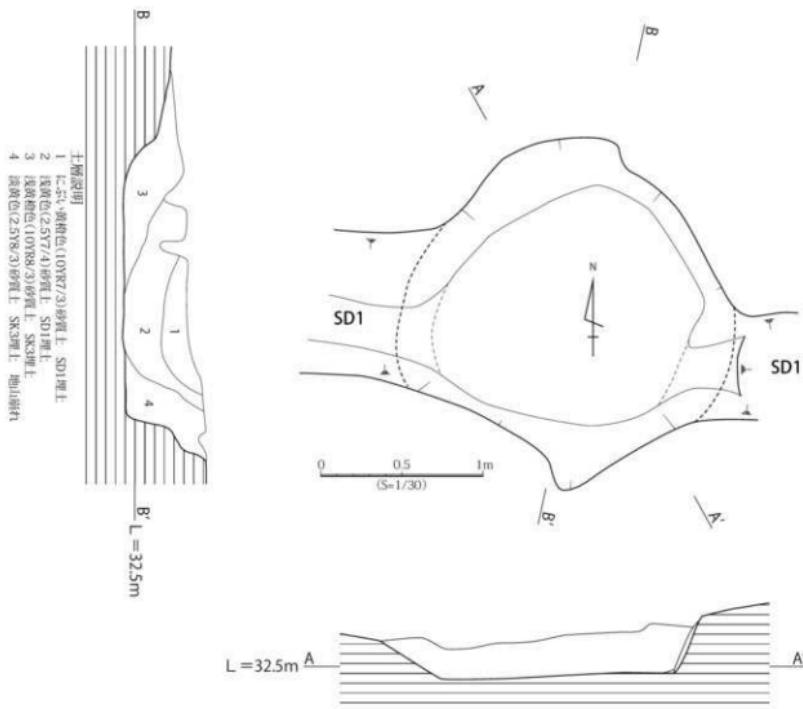
第16図 SX5 実測図 (S=1/60)

はないが、本遺構の廃棄時の下限は、土器の形態から若島編年Ⅰ期に属すると考えられる。

### ○ SK3（第17図）

SK3はSH2の北東約4.8mに位置する土坑である。平面形状はいびつな円形で、掘り方規模は長径2.18m、短径1.8m、底面規模は長径1.55m、短径1.41m、残存する深さは最高で50.6cm、底面標高は32.45mである。東側と西側は後述する第1号古墳の周溝であるSD1によって切られている。残存する規模・形状や周辺の遺構配置も踏まえると、本土坑は貯蔵用と考えられる。

本遺構から遺物は出土していないが、SD1によって切られていることや第5図A-A'においてSD1の埋土である41・42層（第17図1・2層）よりもSK3の埋土である54・55層（第17図3・4層）が先行することから第1号古墳よりも古い遺構であり、本遺跡の遺構の検出状況からも集落が存続している時期の遺構であると考えられる。SH2の周間に位置していることから、この住居跡に伴うものとも想定できる。



第17図 SK3 実測図 (S=1/30)

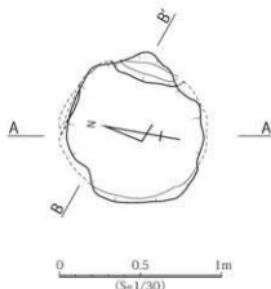
### ○ SK4 (第 18 図)

SK4 は SH1 の北東 4.7m に位置する土坑である。平面形状はほぼ円形で、掘り方規模は径約 80cm、底面規模は長径 91cm、短径 84cm、深さは最高 68cm、底面標高は 31.01m である。断面形状は フラスコ状を呈しており、いわゆる袋状土坑である。また、壁面北側と東側の一部に沿って壁溝を確認した。壁溝の規模は、幅 2 ~ 6.5cm、深さは最大 2.5cm である。

これらの規模・形状から、本土坑は貯蔵用と考えられる。

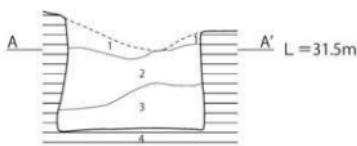
一方、SK4 埋土の土層を見ると、周辺の地山が風化した土であるにぶい黄橙色砂質土 (A-A' 3 層) で下から 3 分の 1 程度が埋まった後に、炭化物を含む黒褐色砂質土層 (A-A' 2 層) が形成されている。このことから、土坑内に土が流入して、貯蔵の用途を失った後に、黒褐色砂質土を投入する何らかの行為を行ったものと考えられるが、堆積状況や遺物からは想定し得ない。

SK4 埋土からは、土器 (25) が出土している。その形態から若島編年 III-1 期に属すると考えられ、本遺構の廃棄時の下限は III-1 期と想定される。



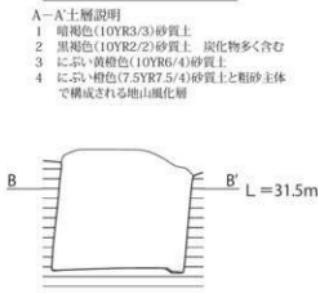
### ○ SK16 (第 19 図)

SK16 は SH2 の東約 6.3m に位置する。平面形状は円形で、掘り方規模は径約 0.95m、底面規模は径約 1.02m、断面形状は袋状で、深さは約 41cm、底面標高 32.36m である。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。



### ○ SK17 (第 20 図)

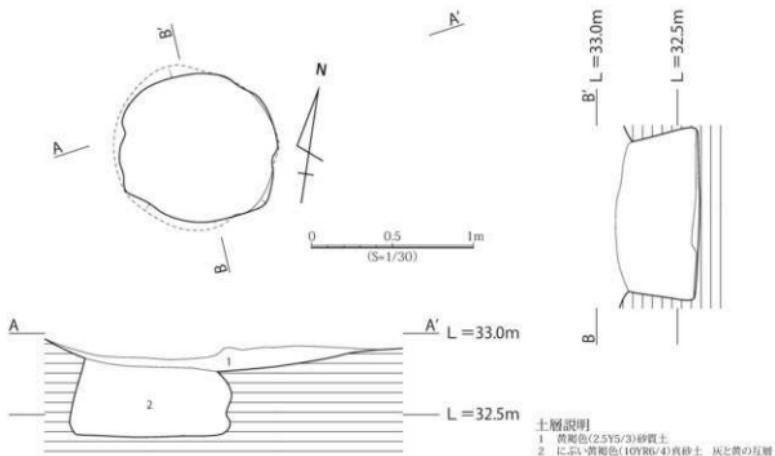
SK17 は SK16 の南東約 2.4m に位置する。平面形状は円形で、掘り方規模は径約 80cm、底面規模は径約 67cm、深さは約 26cm、底面標高 32.6m である。SK17 の北東壁は SK23 による崩れがある。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。



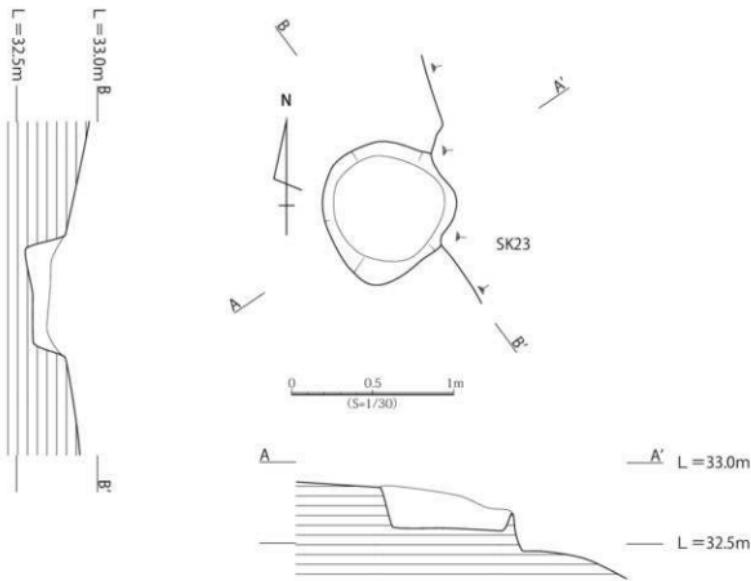
### ○ SK18 (第 21 図)

SK18 は SK16 の南西約 7.5m に位置する。平面形状は円形で、掘り方規模は径約 1.7m、底面

第 18 図 SK4 実測図 (S=1/30)



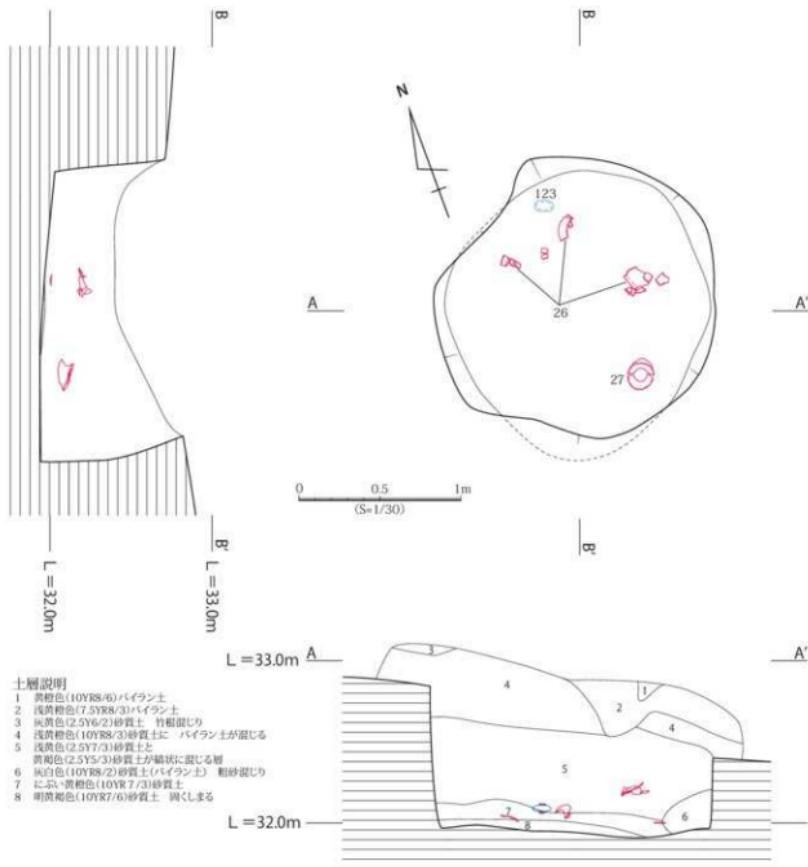
第19図 SK16 実測図 ( $S=1/30$ )



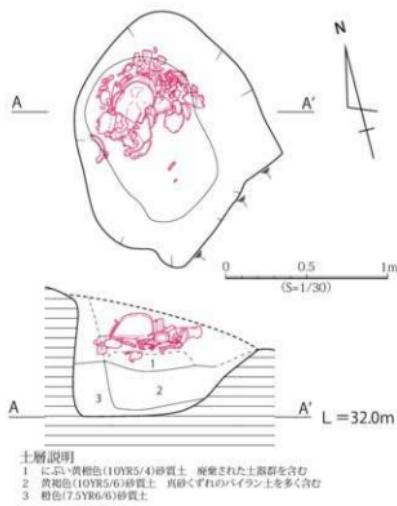
第20図 SK17 実測図 ( $S=1/30$ )

規模は長径 1.78m、短径 1.61m である。南側と北側一部の断面形状は下に向かって開くことから本来は袋状の土坑であったと想定される。深さは最大約 87cm、底面標高 31.95m である。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

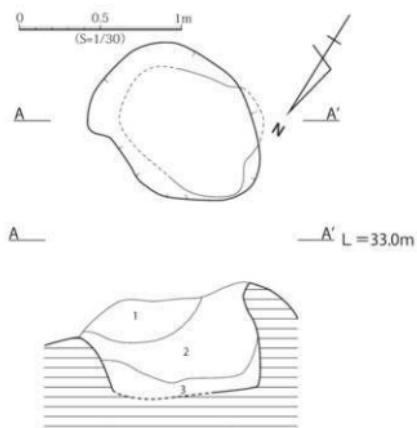
SK18 からは土師器 (26・27) と敲石 (123) が、埋土からは土師器 (28) が出土している。出土位置が底面に近いことから、SK18 使用時の遺物とみられる。その形態から若島編年 III-2 期に属すると考えられる。



第 21 図 SK18 実測図 (S=1/30)



第22図 SK20 実測図 (S=1/30)



第23図 SK21 実測図 (S=1/30)

### ○ SK20 (第22図)

SK20はSK18の北約4.5mに位置する。平面形状は長円形で、掘り方規模は長径1.58m、短径1.15m、底面規模は長径約1.02m、短径0.62m、深さは最大約74cm、底面標高32.05mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

SK20からは弥生土器(29~40)が出土している。出土位置が埋土上位のため、廃棄時の遺物とみられる。その形態から若島編年II-1期に属すると考えられる。

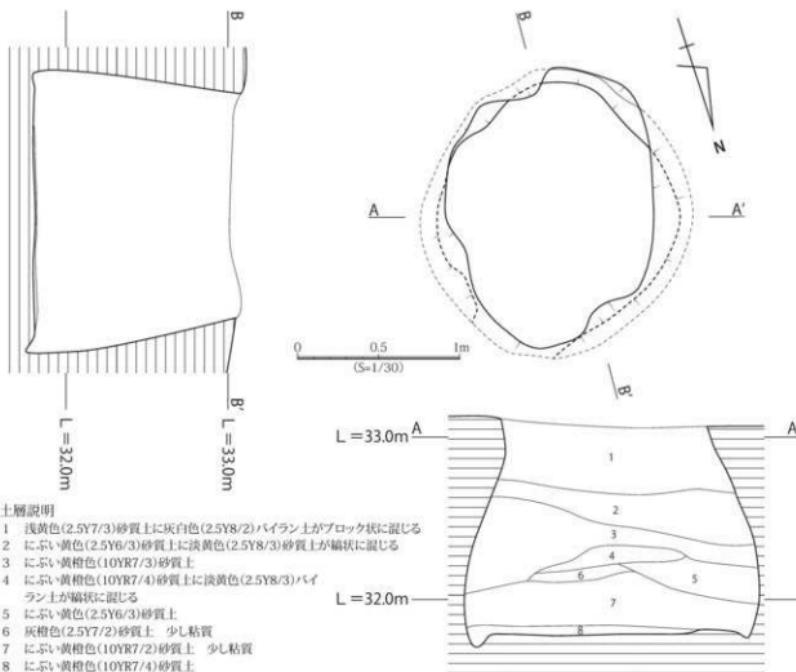
### ○ SK21 (第23図)

SK21はSK20の北約1.5mに位置する。平面形状は長円形で、掘り方規模は長径0.94m、短径0.66m、底面規模は長径1.11m、短径0.85m、深さは最大65cm、底面標高31.95mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

### ○ SK22 (第24図)

SK22はSH2の北東約2.1mに位置する。平面形状はいびつな長円形で、掘り方規模は長径1.73m、短径1.27m、底面規模は長径1.78m、短径1.67m、断面形状は袋状で、深さは約1.27m、底面標高31.82mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。また底面には、幅約10cm、深さ5~8cmの溝が、壁面に沿ってほぼ全周している。この溝は、貯蔵物の湿気防止を目的とした溝であると考えられる。

SK22の埋土からは、弥生土器(42)、土師器(41)が出土している。それぞれ、若島編年II-3期、III-1期のものと想定され、遺構の年代を直接決定付けるもの



第24図 SK22実測図 ( $S=1/30$ )

ではないが、本遺構の廃棄時の下限はⅢ-1期に属すると考えられる。SH2の周囲に位置していることから、この住居跡に伴うものとも想定できる。

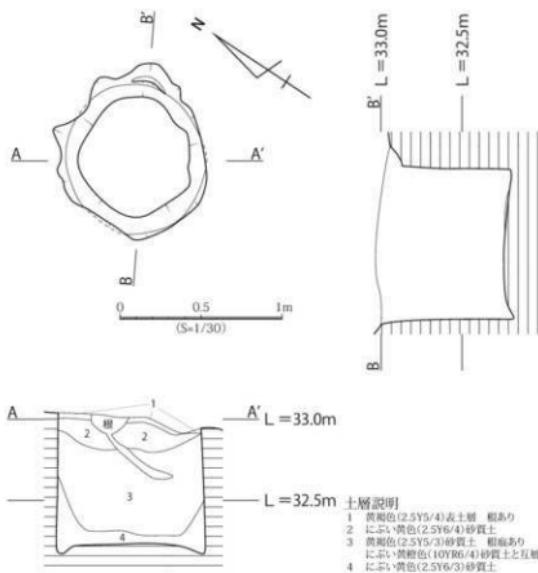
#### ○ SK24（第25図）

SK24はSK15の南約10mに位置する。平面形状はいびつな円形で、掘り方規模は径約1m、底面規模は径0.9m、深さは最大81cm、底面標高32.24mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。また底面には、幅約5～13cm、深さ1～5cmの溝が、壁面に沿ってほぼ全周している。この溝は、貯蔵物の湿気防止を目的とした溝であると考えられる。

SK24の埋土からは、弥生土器(42)が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、本遺構の廃棄時の下限は、土器の形態から若島編年Ⅲ-1期に属すると考えられる。

#### ○ SK26（第26図）

SK26はSK24の西約3.8mに位置する。平面形状は長円形で、掘り方規模は長径1.27m、短径



第25図 SK24 実測図 (S=1/30)

#### ○ SK27 (第26図)

SK27はSK26の東に切り合って位置する。平面形状は円形で、掘り方規模は径約1.35m、底面規模は径約1.3m、深さは約84cm、底面標高32.29mである。底面の東側は浅い溝になっており、さらに中央で深さ約10cmのピット状となる。その位置と形状から、昇降施設の痕跡である可能性が想定できる。A-A'間の土層断面の観察及び出土土器の時期から、SK27→SK26の順に営まれたと考えられる。

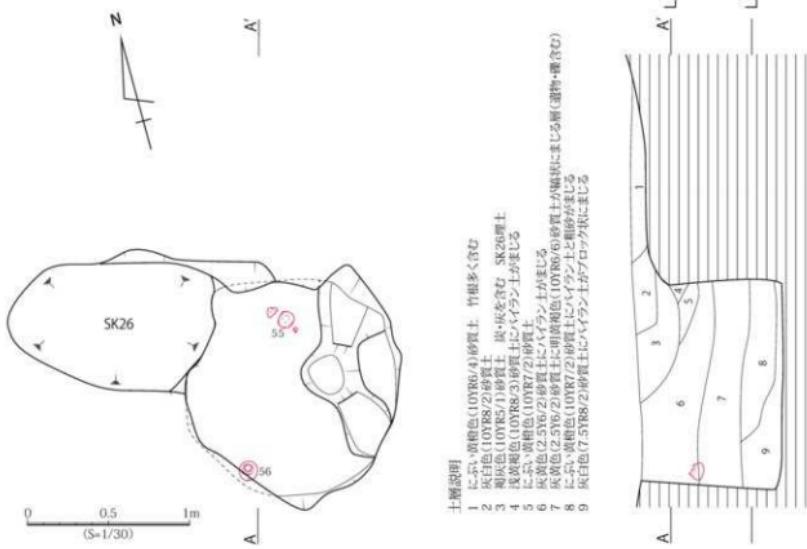
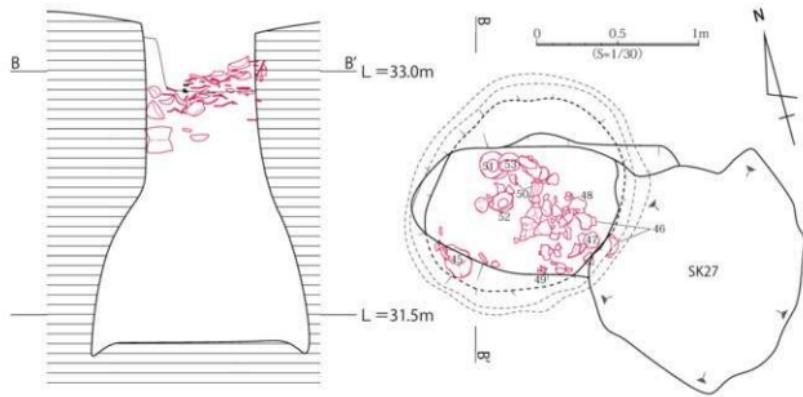
SK27埋土中位からは弥生土器(55・56)が、埋土からは(57)が出土している。(55)は類例が少なく、(56)は残存部だけでは時期の判断が難しいが、(57)の形態から、概ね若島編年II-1期に属すると考えられる。

#### ○ SK28 (第27図)

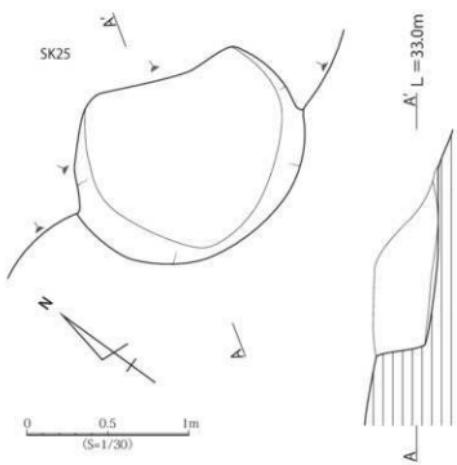
SK28はSK24の北西約2.4mに位置する。SK28は全体にSK25によって削平され、北壁は残存していない。残存部から想定される平面形状は長円形で、掘り方規模は長径1.5m、短径は残存部で1.24m、底面規模は長径1.25m、短径は残存部で1.07m、深さは最大約38cm、底面標高32.87mである。土坑の規模・形状や、周囲にある同様の土坑の状況から貯蔵穴と考えられる。なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

0.87m、底面規模は長径1.55m、短径1.33m、断面形状は袋状で、深さは約1.96m、底面標高31.29mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。また底面には、幅12~16cm、深さ3~9cmの溝が、壁面に沿ってほぼ全周している。この溝は、貯蔵物の湿気防止を目的とした溝であると考えられる。

SK26からは土師器(45~54)、楔形鉄製品(85)が出土している。いずれも出土位置が埋土上位のため、廃棄時の遺物とみられる。その形態から、廃棄の下限は若島編年III-1期と考えられる。



第26図 SK26・27実測図 (S=1/30)



第27図 SK28 実測図 (S=1/30)

## (2) 出土遺物

集落跡の出土遺物としては、土器(弥生土器・土師器)・須恵器・鉄器・石器がある。その中で特徴的な遺物について述べるが、個々の遺物の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

### ○土器 (第44~50図)

本遺跡から出土した土器について、時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

#### ・弥生時代中期終末

壺形土器(69)は、胴部最大径を上半に持つと想定され、器形に対し底部径は小さい。直立する頸部に凹線、胴部上半には波状文をめぐらしている。

これらの特徴を有するものは弥生時代中期終末のものと考えられる。(若島編年における中期終末、妹尾周三氏による安芸IV-2様式<sup>⑥</sup>)

#### ・弥生時代後期

壺形土器(23)・鉢形土器(24)は口縁部の接合が「く」の字状に外反する屈曲点よりも下部で行われ、口縁端部は大きく肥厚し、それぞれ4条・2条の凹線を施している。これらの特徴を有するものは弥生時代後期初頭のものと考えられる。(若島編年におけるI期)

高环(73~75)のうち、(73)の環部は下半から口縁部が屈曲して立ち上がり、端部は肥厚している。(74~75)の脚部は端部を肥厚させて收め、筒部には櫛描文をめぐらせ、下位には中期にはあった透かし穴の痕跡である内部まで貫通しない沈線文や櫛描文を施している。(高畠知功氏による備中V-1様式<sup>⑦</sup>)これらの特徴を有するものは、備中を中心とした地域の土器で、弥生時代後期初頭のものと考えられる。

壺形土器(56)は、体部が玉ネギ形に屈曲しており、断面「ハ」の字状の低い台を持つ長頸壺と想定される。類例が少なく、時期を想定しにくいが、伊藤実氏による備後北部の第IV様式<sup>⑧</sup>における無頸台付壺に胴部から台部にかけてのプロポーションが似ている。その場合、中期末葉の時期が想定されるが、同遺構であるSK27から出土した土器の下限が若島編年におけるII-1期のものであるため、中期末から後期前葉までの時期幅に収まるものと捉えたい。

壺形土器(29~37・43~57・59~61)・鉢型土器(40~71)の口縁部の接合は屈曲点近くで行われ、内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が確認できる。全体に口

縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化せず、(29・31・34・37・57・61)については端部付近を強くつまんで肥厚しているように見せている。(29・31・33・34・37・57・61・71)の肩部には口縁部屈曲点から若干下がった位置に刺突文をめぐらしている。(38・39)を含め、底部の残存する土器の内面のヘラ削りはいずれの土器も底部に至る。これらの特徴を有するものは弥生時代後期前葉のものと考えられる。(若島編年におけるII-1期)

甕形土器(19・21・63・65)の口縁部の接合は屈曲点近くで行われ、内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が確認できる。また(21・63)の内面屈曲点直上は接合部分を調整した結果、わずかに平坦気味になっている。口縁端部はつまんでわずかに肥厚させるか、それを志向しており、端部は平らに収めている。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる。(若島編年におけるII-2-①期)

甕形土器(14・64)の口縁部は端部にかけて器厚を減じ、端部は平らに収める。また(64)の想定される胴部最大径は器高の3分の2より低い位置になると考えられる。これらの特徴を有するものは後期後葉のものと考えられる(若島編年におけるII-2-③期)。

甕形土器(16・66・67)、鉢形土器(72)の口縁部は中位から外に湾曲し、(67・72)の端部は丸味を持つ。(16)の胴部は倒卵形で、(66・67・72)の胴部は緩やかにカーブして丸みを帯びる。これらの特徴を有するものは後期末葉のものと考えられる。(若島編年におけるII-3期)

#### ・古墳時代前期

甕形土器(1~6・13・20・45~48・60・62)、壺形土器(41・50・51・52)は、口縁端部に向かって徐々に薄くなり、(50・62)以外の端部は尖り気味に収めている。また口縁部接合点まで内面のヘラケズリが続き、鋭い稜を持つ。(25)を含め、残存するものの胴部は上位が丸みを帯び、全体に倒卵形である。壺形土器(7・8)の器厚は、(8)については胴部中位でわずかに厚いものの、ほぼ一定である。(8)の体部は丸みを帯び、(7)は倒卵形を呈し、底部は丸底である。鉢形土器(9・53)・碗形土器(10・54)は底部から口縁部にかけて徐々に器厚を減じ、端部は尖り気味に収め、残存するものは丸底、もしくは丸底に近い。これらの特徴を有するものは古墳時代初頭のものと考えられる(若島編年におけるIII-1期)。

甕形土器(15)は、「く」の字状に外反する口縁部の端部に内傾しつつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁で端部は丸く収めている。底部は丸底であり、胴部は球形を呈する。これらの特徴を有するものは、高橋護氏による吉備地方南部平野の編年の中D期にあたり、古墳時代初頭のものと考えられる。

甕形土器(17)は二重口縁を持ち、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外反し、その端部は拡張部の基部より、横方向へわずかに突出する。拡張部の端部は薄く摘んでいるがやや丸みを帯びる。これらの特徴を有するものは、山陰系土器の大木権現山式土器<sup>9)</sup>にあたり古墳時代初頭のものと考えられる。

甕形土器(26・68)・壺形土器(27)は、III-1期のものに特徴が似ているが、器厚が薄く一定で、胴部は長円形で丸胴化が進んでいる。これらの特徴を有するものは古墳時代前期のものと考えられる。

えられる（若島編年におけるIII-2期）。

また、甕形土器（28）は（17）と比較すると、口縁端部に向けての厚みを持ち、端部は丸く收めている。これらの特徴を有するものは、山陰系土器の小谷式土器<sup>10)</sup>にあたり古墳時代前期のものと考えられる。

以上のように、出土した土器の時期を見ると弥生時代中期終末から古墳時代前期のものまでが、継続的に出土している。しかし、古墳時代前期以降に本遺跡で継続的に使用されたと考えられる土器は出土しておらず、時期を空けて、古墳時代後期の須恵器が出土している。

#### ○須恵器（第50図）

本遺跡から出土した須恵器について、時期や特徴的なものについて概観してみたい。

##### ・坏蓋（76・77）

口径15～16cmと大型である。いずれも沈線で表現された稜を有し、口縁端部には内傾する段を持つ。（76）に比較すると（77）は器高が低く扁平である。これらの特徴から（76）は、田辺昭三氏による陶邑編年のMT15型式、中村浩氏による陶邑編年のII型式1段階、（77）は田辺編年のTK10型式古相、中村編年のII型式2段階にあたり、それぞれ6世紀前葉と中葉のものと考えられる。

##### ・坏身（78～80・82）

受部径は（78～80）が15cm台、（82）が14.8cmとなり大型である。残存するものの口縁端部には内傾する段を持つ。外面の回転ヘラ削りは中心から2分の1程度である。これらの特徴から、田辺編年のMT15型式、中村編年のII型式1段階にあたり、6世紀前葉のものと考えられる。

##### ・器種不明品（81）

口頭部は無文で、体部は平行叩きの後でカキ目調整を施している。端部は外へ肥厚して断面が方形に近い玉縁状になる。これらの特徴から田辺編年のTK10型式古相、中村編年のII型式2段階にあたり、6世紀中葉のものと考えられる。

##### ・坏（83）

高台はわずかに開き、断面「コ」の字状である。復元体部径は約17cmであり、口径はそれよりやや大きいものと考えられる。これらの特徴から、向田裕始氏による広島県の土器編年<sup>11)</sup>における8世紀中葉頃のものと考えられる。

#### ○鉄器（第50図）

SH1出土の（84）は、全長3.65cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gの鉄製品である。中央部分に閏と考えられる段差が認められるため、小形の刀子のようなものと考えられる。

SK26出土の（85）は全長3.4cm、上部の幅が0.95cm、厚さが0.5cm、下部の幅が0.6cm、厚さが0.15cmで上部から下部にかけて細く薄くなっている。重さは6.6gである。形状から楔のようなものと考えられる。

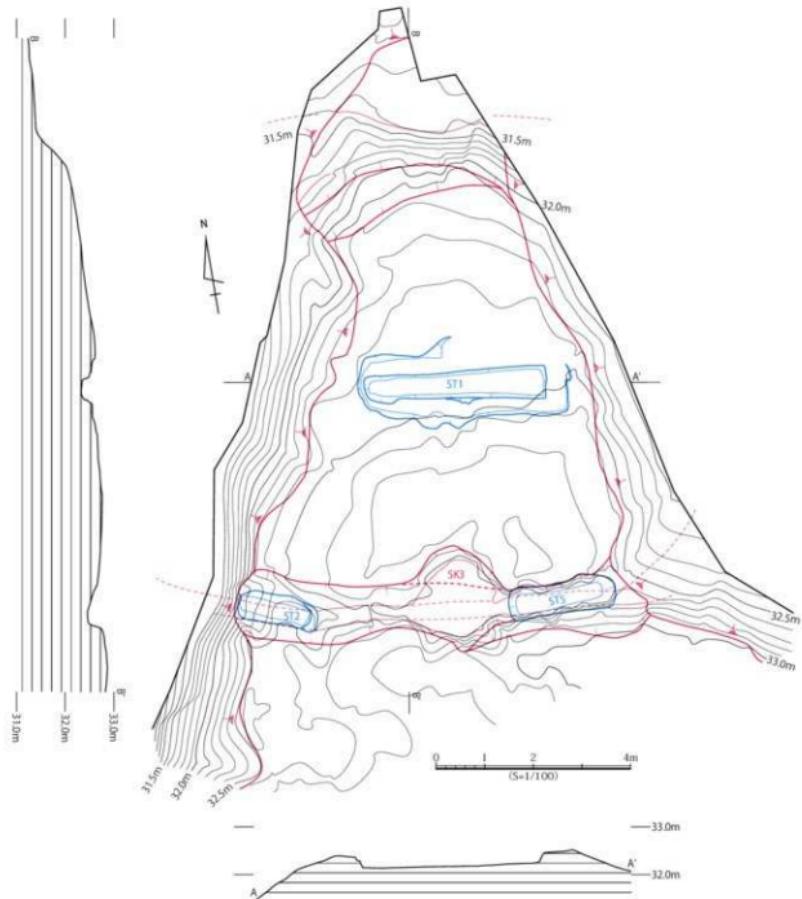
○石器（第 52 図）

集落に伴う石器としては、台石（120・121）・磨石（122）・敲石（123）が出土している。台石（120・121）は、SX1 における出土状態での上面中央に平坦面があり、磨耗して平滑になった使用痕が確認できる。詳細は後掲する観察表を参照されたい。

## 4 緑井大上第1号古墳

### (1) 立地と調査前の状況（第4図）

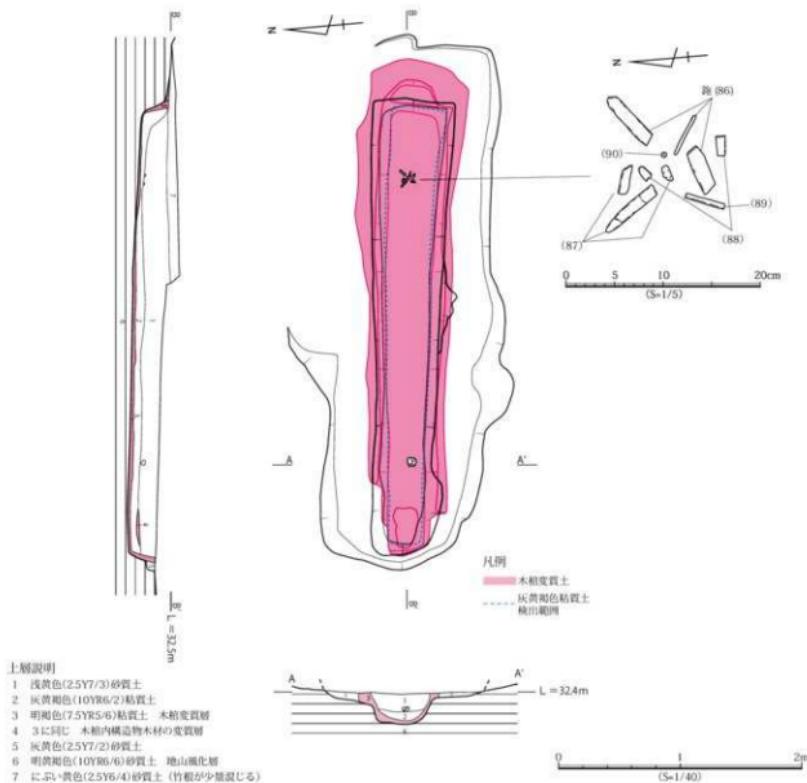
第1号古墳は、独立丘陵である丘陵の北端（調査区B・C－2区）、標高約32.5mに位置している。丘陵の北東・北西部は後世の土取りなどの影響により大きく削平された状態であった。調査前は竹が生い茂る山林になっており、地表面上では墳丘や周溝の跡が確認できるほどの凹凸は認められず、丘陵頂部の平坦面から調査区北側へ向かって下る緩斜面が広がっていた。



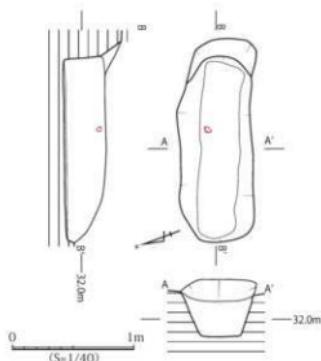
## (2) 墳丘・周溝（第28図）

墳丘の形状は南北9.8m、東西は削平されているため不明であるが、南側の周溝SD1の形状により方墳と考えらえる。北側には周溝は認められず、地山を削平し墳丘裾（標高31.4m）を形成している。墳丘上には近世以降の里道（第5図A-A'3層）が南北方向に走り、地山面までほぼ竹根が侵食しており、古墳の盛土と認められる状態の良い土層は認められず、大半が削平、流出したものと考えられる。

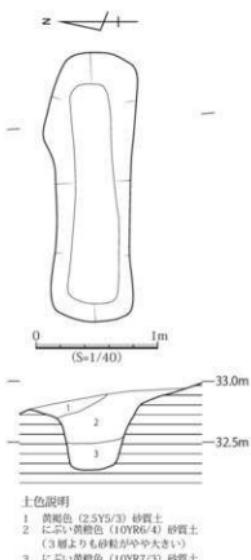
南側の周溝SD1は、丘陵北端を区切るように東西方向に延びる検出幅0.8～1.2m、深さ0.3～0.4m、溝底の幅0.4m、断面形態が台形を呈する溝で、土坑（SK3）を削平して掘られていた。周溝の埋土は2層（第5図A-A'41・42層）あり、レンズ状に堆積しており、自然堆積したと考えられる。周溝の底の標高は32.4m、北側の墳丘裾の標高は31.4mで、1mの差が認められる。



第29図 ST1 実測図 (S=1/40・1/5)



第30図 ST2 実測図 (S=1/40)



第31図 ST5 実測図 (S=1/40)

碎された複数の鉄製品の破片を集め、棺内へ副葬したと想定される。また、西側では灰黄褐色の粘質土上に幅20cm、長さ30cmの明褐色粘質土（第29図4層）があり、木棺の蓋部分か仕切り板の痕跡と考えられる。

墳裾の高さの差が明確なことから、古墳の北側から東側にかけて墳丘が大きく見えるようになっており、丘陵の北側から東側の方向から見られることを強く意識して造られていると考えられる。

また、周溝（SD1）内では周溝の軸に合わせるように、埋葬施設（ST2・ST5）が2基検出された。

遺物は、周溝内埋葬と考えられるST2の近くや埋土で土師器（58）など、破片が数点出土しているが、（58）はその形態から若島編年III-1期のもので集落跡の時期のものと想定されるため、本古墳に伴うものとは考えにくい。

### (3) 埋葬施設（第29・30・31図）

墳頂の中央で埋葬主体部ST1を地表面から50～60cm下で検出した。ST1は二重墓壙になっており、主軸方位がN80°Wで、ほぼ東西方向に向いている。墓壙上段は、北東部分が後世に削平され、部分的に竹根によって崩れている箇所が認められるが、長さ4.38m、幅1.3m、深さ4～6cmの規模になる。墓壙下段は、長さ3.74m、東側小口幅0.68m、西側小口幅0.5m、深さが22cmになる。

下段の墓壙内には、木棺が変質した明褐色の粘質土が、3～8cmの厚さで、断面「U」の字状に残存しており、上端部は墓壙上段面の上まで残存していた。この粘質土の断面形状から、木棺は割竹形木棺であったと考えられる。

棺内には、全面に6～8cmの厚さの灰黄褐色の粘質土が堆積しており、この層の上面、棺の東側から鉄製品群（鉗・不明鉄製品：2018年度調査）と西側から6cm大の花崗岩の自然石（2017年度調査）が出土した。棺内から出土した鉄製品は、最も原形を留めている鉗でも3つに分割されており、他のものは原形が不明なものが多いことから、棺外で破

被葬者の頭位は下段墓壙の幅が広い東側にあったと考えられ、遺体は東側の鉄製品群の西側から、自然石の検出された東側までの間、ほぼ棺の中央に納められたと推測される。

周溝内からは2基(ST2・ST5)の埋葬施設を検出した。いずれも周溝の肩から底にかけての途中から角度を変え、垂直に近い角度で深く墓壙を掘り込んでいる。

ST2は周溝の西端に位置しており、主軸方向がN70°Wで、やや東南東に向いている。長さは1.67m、幅0.6m、深さ0.53mで、平面形態は長方形である。東側の小口だけ段を有しており、その段から下はほぼ垂直に掘り込まれている。西側は後世の削平を受けているため残存状態が良くなない。床面は幅30cmで、平坦(標高31.85m)になっている。

ST5は周溝の東端に位置しており、主軸方向がN88°Eで、ほぼ東西方向に向いている。長さは2.2m、幅0.6～0.74mである。床面はほぼ平坦で、長さ1.8m、幅は西小口側が42cm、東小口側が32cmで、西側がやや広く、被葬者の頭位は西側になっていたと考えられる。周溝の底から墓壙の床面までは約10cmしかなく、土層断面(第31図)から見た墓壙の埋没状況から、ST5は周溝がある程度埋没した後に墓壙が掘られたと考えられる。墓壙内からは遺物は出土しなかった。

#### (4) 出土遺物(第51図)

第1号古墳出土遺物のうち、確実に古墳に伴うと考えられるST1出土の鉄器について述べる。

##### ○鎧

(86)は全長15.8cm、厚さ0.3cm、重さ19.6gで、刃部の先端と茎部が欠損している。幅は1.6cmで一定しており、刃部先端に向けてやや細くなる。刃部先端はやや反り、裏透きはなく、断面が三角形を呈している。出土時は3つに分かれて出土した。

##### ○不明鉄製品

(87)は接合しないが、形状や幅と厚さから、3片が同一個体と考えられる。図面上の上片は全長8.65cm、幅1.0cm、厚さ0.15cm、重さ6.9gである。中片は全長2.2cm、幅0.9cm、厚さ0.1cm、重さ0.7gである。下片は全長2.9cm、幅1.0cm、厚さ0.15cm、重さ1.6gである。

(88)は全長4.0cm、幅1.0cm、厚さ0.15cm、重さ2.4gで、表面に樹皮のような有機物が付着している。出土時は2つに分かれて出土した。

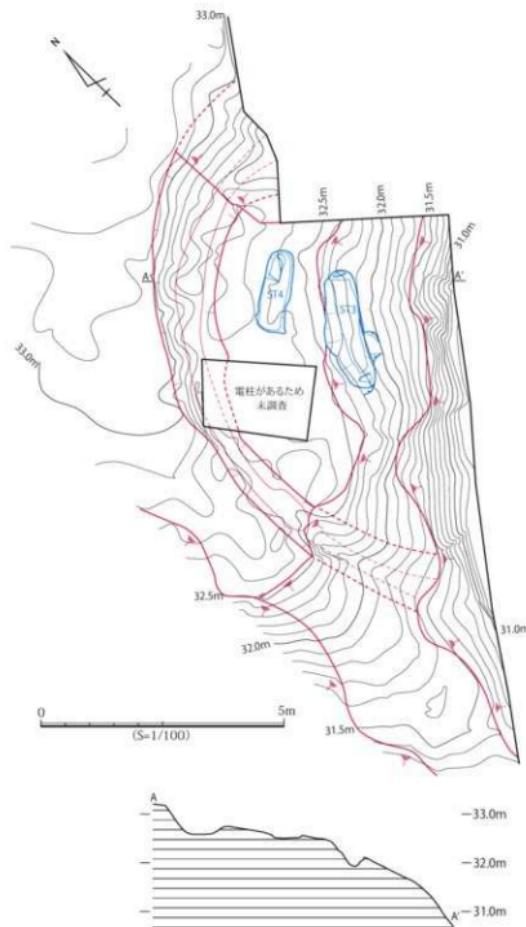
(89)は全長3.8cm、ほぼ中央に關があり、關より上側は幅0.7cm、厚さ0.2cm、關より下側の茎部は幅0.45cm、厚さ0.4cmで、断面が方形になっている。重さは2.1gである。鎧や鐵鎌の茎部と考えられる。

(90)は全長2.2cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gである。上部の断面は方形で、下部は不正形な円形となっており、鎧や鐵鎌の茎部と考えられる。

## 5 緑井大上第2号古墳

### (1) 立地と調査前の状況（第4図）

第2号古墳は、調査区の南側（F・G-1・2区）、独立丘陵の南端（標高32.5m）地点、北側から続く平坦面から南側へ急に下る傾斜面との変換点上に位置しており、傾斜面上の平坦面にはコンクリート製の電柱と木製の電柱跡が残存していた。



第32図 第2号古墳実測図 (S=1/100)

### (2) 墓丘と周溝（第32図）

墳丘の形状は墳丘の大半が削平されており、周溝（SD5）の形状からそのまま復元すると径8.5mの円墳となる。しかしながら、本墳の中心埋葬主体部と考えられるST3の位置が、周溝から復元した円墳の中心から大きく北側に逸れているため、ST3を中心にして考えると南側が3m短い、楕円形の墳丘が想定される。

周溝は墳丘の北西側を廻り、北側の残りの良い箇所で幅1.7m、南の削平された箇所では幅0.6mで、深さは最大0.73mである。周溝は北側から徐々に埋まっており、埋土からは遺物は出土しなかった。

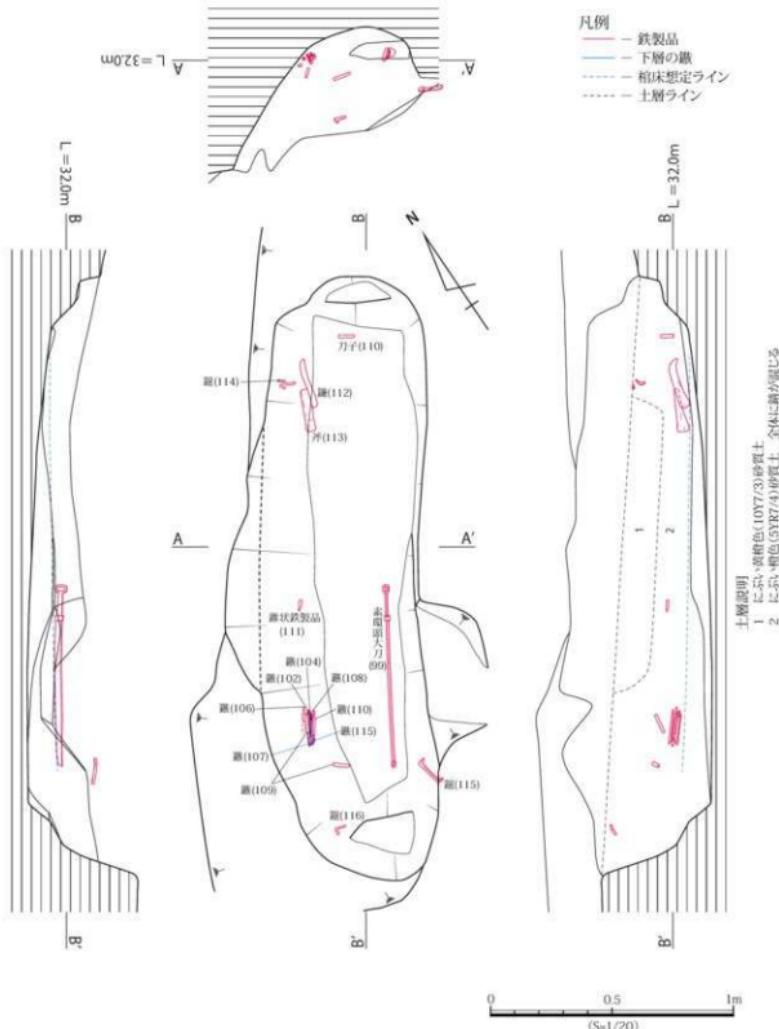
墳丘の盛土の大半は削平・流失していたが、周溝の縁部分に僅かに残存しており、その土質から周溝を削平した際の地山の土を用いて盛土を築いたと考えられる。

### (3) 埋葬施設（第33・34図）

墳丘上に2基（ST3・4）の埋葬主体部をいずれも地表面か

ら 50 ~ 60cm 下の地山面上で検出した。ST3 は、削平された斜面際で部分的に削平されながらも残存していた。

ST3 は主軸方向が N34° E で、ほぼ東北方向を向いている。長さは 2.46m、幅 0.64 ~ 0.7m で



第33図 ST3 実測図 ( $S=1/20$ )

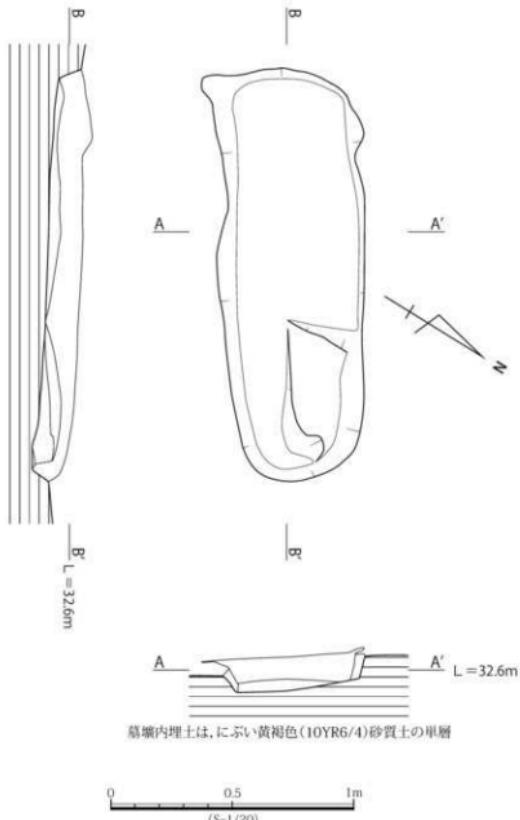
ある。墓壙の深さは、上部が削平されているが残存部分で 61cm である。北側・南側の両小口には段（標高 32m 付近）が認められる。床面は平らではなく、断面が「U」の字状になっており、中央部分が側辺よりも低くなっている。床面の形状と鎌が用いられている点から、木棺の形状は割竹形木棺と考えられる。

床面は長さ 1.96m、幅は北小口側が 37cm、南小口側が 22cm で、北側が広く、被葬者の頭位は北側になっていたと考えられる。

ST3 からは、鎌 3 点、刀子、鉄鎌、鉄斧、鉄鎌 8 本、素環頭大刀、ガラス小玉 8 点が出土した。鎌（114・115・116）は、墓壙の上方（標高 32.3～32.5m）から出土しており、両側辺の小口側にそれぞれ鎌を打ち、棺の身と蓋を固定していたとみられる。

刀子は北の小口側、被葬者の頭部の北側に主軸と直交する向きで出土した。鉄斧と鉄鎌は、西側辺の北小口側にほぼ主軸と平行するように、刃先を北側に向けて並べて置かれていた。ガラス小玉 1 点が鉄鎌に付着して出土している。鉄鎌は西側辺の南小口側に、刃部を南側に向かって置かれた状態で 8 本固まつた状態で出土した。一部竹根の侵食により欠損したものも認められる。鉄鎌群の反対側の東側辺の南側には、切先を南、環頭を北側に向けて素環頭大刀が出土した。切先付近からは鞘尻金具（101）が遊離した状態、柄付近では鞘口金具（100）が一部、大刀に付着した状態で出土した。

ST4 は主軸方向が、N56° E で東北東方向に向いている。検出面で墓壙の長さが 1.7m、幅が東側が 0.5m、西側が 0.55m とやや西側が広い。床面において



第 34 図 ST4 実測図 (S=1/20)

ても西側の幅が広いことから、被葬者の頭位は西側に向けられていたと考えられる。墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### (4) 出土遺物（第51・52図）

第2号古墳から出土した遺物は、すべてST3から出土したものである。

##### ○鉄器

###### ・素環頭大刀

(99) は柄頭に鉄製の楕円形の円環が付いた全長76.3cm、重さ552.7gの直刀である。柄頭の円環、柄部分になる円環基部、刀身部の3つの部位で構成されている。刀身部は長さ59.5cm、切先幅2.2cm、身元幅2.65cm、背幅は0.7cmで、茎は長さ9.5cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmである。茎の幅が刀身幅に対し僅かに細く、関の段差は目立たない。円環は厚さ0.9cmの断面が楕円形の鉄棒を幅5.0cm、長さ3.6cmの横長の楕円形に折り曲げている。円環基部は長さ7.7cm、幅1.7cmの鉄板2枚で円環を挟み込み、鍛接し固定している。柄と刀身部分も鍛接により接合されており、接合部分の長さは3.0cmで、接合部分が厚くならないようにするため、それぞれ薄く仕上げられている。接合部分には、外装の柄を固定するための目釘孔の他に、刀身と柄基部を強く固定するために孔が空けられ、鉄棒を充填し固定している。池淵氏の分類によるとIB式に分類される<sup>12)</sup>。

(100) は、素環頭大刀の鞘金具である。一部刀身に付着した状態で出土したが、多くは遊離した状態で出土した。図面上の上部が大刀に付く鑓とされる部位で、下部が鞘金具の筒金である。いずれも厚さ0.1cmの鉄製の鉄板を丸めたもので、鑓の上に筒金が覆っている。重さは12.5gである。鑓は長さ3.8cm、幅が3.2cm(残存長)、厚さ2.4cmである。筒金は長さ3.4cm、幅1.6cm(残存長)、厚さ2.4cmで、内面には、上部に縱方向、下部に横方向の木質が残存している。

(101) は、素環頭大刀の鞘尻金具である。大刀の切先部分の近くで出土した。厚さ0.1cmの鉄板を断面が楕円形になるように筒状に曲げ、幅0.3cm、長さ0.6cmの目釘を打ち、木製の鞘に固定された金具である。長さが2.9cm、幅2.6cm(残存長)、厚さ2.0cm、重さ5.9gである。

###### ・鉄鎌

(102) は鎌身が両刃で間に小さな逆棘が付く長頸鎌、(103～109) は鎌身が片刃の刀子形で、間に逆棘が付く長頸鎌である。頸部と茎部の境である関部は台形状になっており、茎部との段差が明瞭である。茎部には矢柄と考えられる縱方向の木質と矢柄と鎌身を固定するために横方向に巻かれた樹皮が残存しているものもある。

###### ・刀子

(110) は全長10.95cm、重さ15.5gである。刃部の長さは6.7cm、厚さが0.25cmである。関部は両関で、幅は1.8cmである。茎は長さ4.4cm、幅0.9～1.3cm、厚さ0.2cmで、関部付近に横方向の木質が付着している。

###### ・錐状鉄製品

(111) は、全長4.3cm、幅0.5～0.8cm、厚さ0.2cm、重さ1.9gである。断面が三角形で、片刃である。

#### ・鉄鎌

(112) は全長 20.6cm, 刃部は直線的で切先をやや内側に曲げた形状をしている。幅 3.0cm で、基部を 1.4cm 上方に折り曲げている。重さは 101.2g である。折り返し部分から 4.1cm の幅で、木柄の装着痕が残っており、柄の装着角度は 100° である。

#### ・鉄斧

(113) は全長 18.9cm, 刃部幅 6.4cm, 袋部幅 4.8cm, 高さ 3.5cm, 重さ 526.3 g である。刃部から袋部まで直線的になる無肩の形を呈している。柄の装着部分を袋状に丸めているが、1cm 以上隙間が空いており、袋部の閉じ合わせが緩い状態になっている。袋部の内面は広く鏽に覆われており、有機物の痕跡は確認できなかった。また、刃部の先端が厚く、刃が付けられた角度の変化も見られない。

#### ・鎌

(114) は全長 10.7cm, 重さ 21.0 g である。渡りは長さ 9.8cm, 幅 0.9cm, 厚さ 0.4cm で、断面が長方形を呈している。右側の爪は長さ 3.6cm, 屈曲角度 115° である。左側の爪は長さ 3.9cm, 屈曲角度 105° である。渡りの外面の右爪側は外反し、渡りの内面の左爪側は内湾している。渡りの内面、爪の先端部分に木質が残存している。

(115) は全長 12.1cm, 重さ 25.2 g である。渡りは長さ 11.6cm, 幅 0.9cm, 厚さ 0.5cm で、断面が長方形を呈している。右側の爪は長さ 3.4cm, 屈曲角度 85° である。左側の爪は長さ 3.6cm, 屈曲角度 95° である。渡りの外面の両爪側が外反し、内面の爪側、屈曲部に近い箇所は内湾している。爪部分の全面に木質が残存している。

(116) は同一個体と考えられる鎌である。渡りの長さ 3.7cm, 幅 0.8cm, 厚さ 0.3cm で、断面は長方形である。渡り部分に反りではなく、平坦になっている。爪の長さは 3.3cm（残存長）で、全面に木質が付着している。屈曲部が欠損しているため爪の屈曲角度は不明である。

#### ○玉類

(91～98) はガラス小玉である。(91～97) は、ST3 でも被葬者上半身の位置と想定される北側埋土中から出土した。(98) は鉄鎌 (112) の鏽に付着していた。詳細については、第 1 表を参照されたい。

第 1 表 玉類観察表

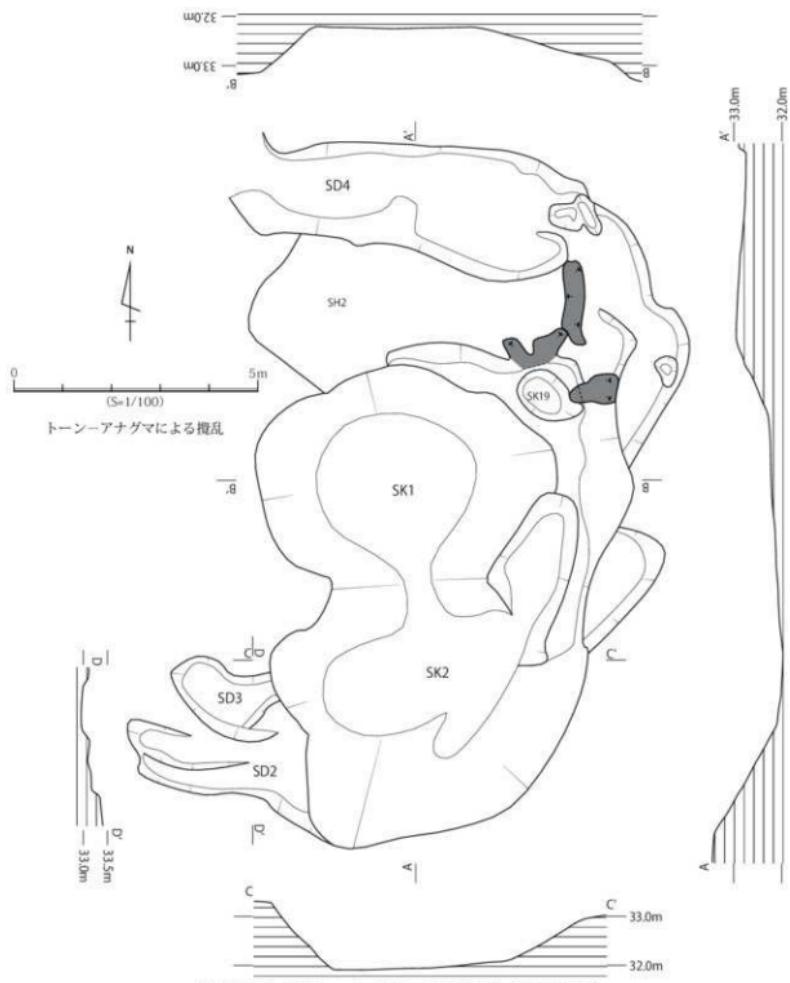
| 遺物番号 | 種別    | 出土位置 | 計測数値(cm) |      |     | 重量(g)  | 色調 | 備考             |
|------|-------|------|----------|------|-----|--------|----|----------------|
|      |       |      | 幅        | 長さ   | 孔径  |        |    |                |
| 91   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.2  | 0.1 | 0.1    | 紺色 |                |
| 92   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.2  | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 93   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.2  | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 94   | ガラス小玉 | ST3  | 0.25     | 0.15 | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 95   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.15 | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 96   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.15 | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 97   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.15 | 0.1 | 0.1 以下 | 紺色 |                |
| 98   | ガラス小玉 | ST3  | 0.3      | 0.15 | 0.1 | 0.1    | 紺色 | 鉄鎌 (112) の鏽に付着 |

## 6 時期不明遺構

### (1) 遺構

#### ○溝状遺構 SD (第35図)

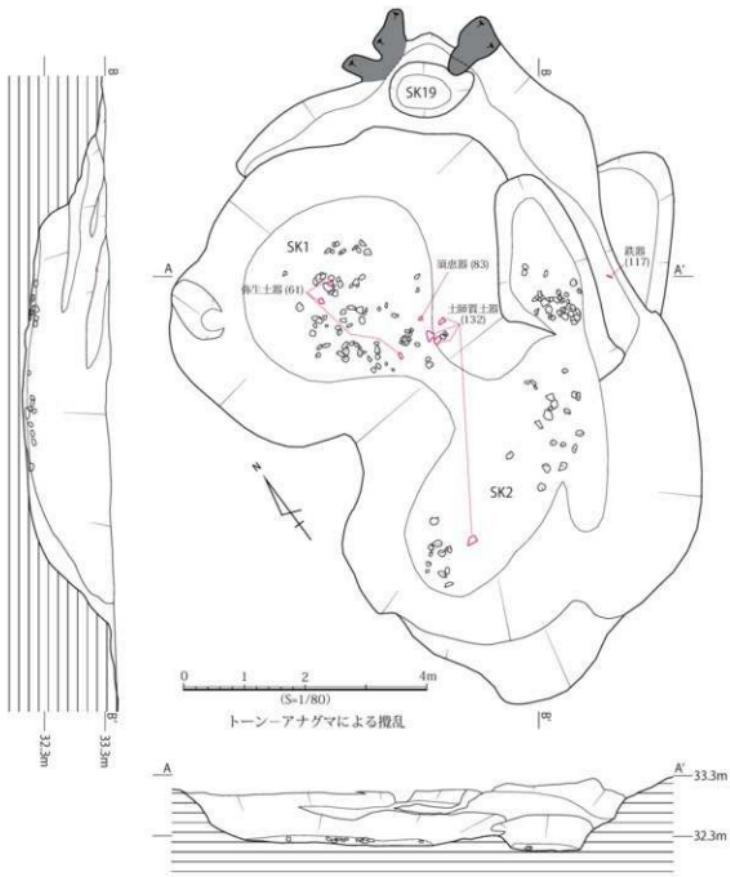
SD2はD1～2区にかけて検出された溝状の遺構で、西から東へ向けてやや弧を描くように延び



る。長さ 3.8m、幅 1.1m、深さ 0.2m である。SK2 により削平を受けているため確証は得ないが、SK1 の北側に位置する SD4 とほぼ並行しているため、一連の遺構であった可能性もある。そのように考えると、SD2 と SD4 は方形に囲まれた溝となり、墳丘墓または古墳の周溝であったとも考えられるが確証はない。遺物は出土していない。

SD3 は SD2 の北側に位置する溝状の遺構で、西から東へ向けて延びる。長さ 2.2m、幅 1.3m、深さ 0.2m である。SK2 内の舌状の溝と一連のものであった可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SD4 は C2 区に位置し、西から東へ向けて延び、南西方向に屈曲する溝状の遺構である。屈曲す



第 36 図 SK1・2 実測図 (S=1/80)

るところまでの長さは約10m、幅1.9～2.7m、深さ8～10cmである。屈曲部から南側の部分は木根やアナグマの巣による擾乱により残存状況が悪い。竪穴住居SH2を削平しており、土坑SK1に削平されていることから、遺構の時期は竪穴住居SH2→溝SD4→土坑SK1の順になる。SD2の項でも述べたが、位置関係からSD2と共に方形に囲まれた溝になる可能性も考えられる。

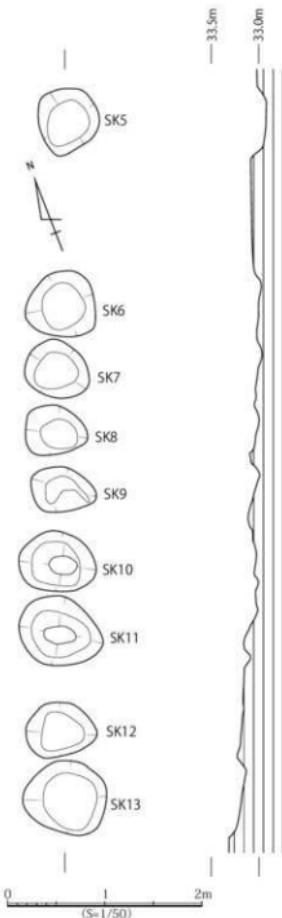
#### ○ SK1・2（第35・36図）

SK1・SK2はC・D2区にあり、SK1は竪穴住居SH2、溝状遺構SD4、SK2は溝状遺構SD2・3を切るように位置している。SK1とSK2は接していることから平面形がやや瓢箪形を呈した大きな掘り込みになっている。SK1が長径7.7m、短径4.0m、深さ0.9m、SK2が長径6.5m、短径5.2m、深さ1.2mで梢円形を呈している。SK1の底面は円形で整っているが、SK2は東西方向に細長くなっている。検出面と底面の形状が異なる。共に床面には弥生土器(61)、須恵器(83)、土師質土器(132)、に混じって10～20cm大の花崗岩の礫が散乱した状態であった。床面の礫が出土した層には粘質土が堆積しており、その上から地山由来の粗砂や砂質土が交互に流入している状況（第5図A-A'・第6図D-D'）から、短期間にうちに土坑の東側から、掘り返された土が入れられ、埋められたと考えられる。土層断面（第5図A-A'）の観察によりSK1の埋没途中からSK2の埋没が始まることが確認できることから、SK1とSK2は同時期に機能していたと考えられる。

埋土からは鉄器(117)が出土している。床面から出土した土師質土器甕(132)から近世後半以降の時期が想定される。

#### ○ SK5～13（第37図）

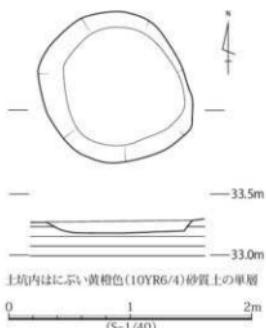
SK5～SK13はD2区で北東から南西方向にかけて直線的に連続して並ぶ土坑群（第2表）である。いずれも長軸が60～90cm大の不整形な梢円形を呈しており、土坑の底が部分的に2～3cmほど残っているものが大半であった。土坑が直線的に並んでいる点、土坑群の西側に北東方向から土坑群と並行するように段が設けられている点、調査区外の東側斜面において、この土坑群と



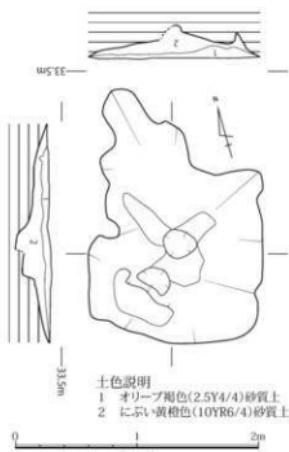
第37図 SK5～13実測図 (S=1/50)

第2表 SK5～13観察表

| 土坑名  | 計測値(cm)<br>長径 | 短径 | 埋土                  |
|------|---------------|----|---------------------|
| SK5  | 70            | 65 | にぶい黄橙色(10YR 7/4)砂質土 |
| SK6  | 70            | 65 | にぶい黄橙色(10YR 7/4)砂質土 |
| SK7  | 70            | 55 | にぶい黄橙色(10YR 6/4)砂質土 |
| SK8  | 65            | 50 | にぶい黄橙色(10YR 6/4)砂質土 |
| SK9  | 70            | 45 | にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土 |
| SK10 | 80            | 60 | にぶい黄橙色(10YR 6/4)砂質土 |
| SK11 | 90            | 70 | にぶい黄橙色(10YR 6/4)砂質土 |
| SK12 | 70            | 55 | 褐色(10YR 4/4)砂質土     |
| SK13 | 85            | 70 | にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土 |



第38図 SK14実測図(S=1/40)



第39図 SK15実測図(S=1/40)

等高線に沿うように並行して石仏や五輪塔石材が見られ、丘陵の南側には近世から現代まで墓が並んでおり、この丘陵上が墓所として利用されていることからも、これらの土坑群は東側へ下る緩斜面を平坦に整形した後に造られた墓であると考えられる。

SK13からは、染付磁器(136)が出土しており、その特徴から九州近世陶磁学会の編年<sup>13)</sup>における1820年代から1860年代までのものと想定されるため、近世後期を中心に営まれた墓群であると考えられる。

#### ○ SK14(第38図)

SK14はD・E2区に位置する。掘り方規模は径1.18m、底面規模は径0.92mで平面形状がほぼ円形を呈する土坑である。深さは5cmで、埋土はにぶい黄橙色(10YR6/4)の砂質土であった。遺物は出土していない。

#### ○ SK15(第39図)

SK15はE2区に位置する。長軸1.8m、短軸1.25mで、やや方形を呈した土坑である。木根による攪乱の影響により、検出面および底面の平面形態も不整形な状態である。深さは30cmで、遺物は出土していない。

#### ○ SK19(第40図)

SK19はC2区に位置する。平面形状は歪な長円形で、掘り方規模は長径1.3m、短径0.94m、底面規模は長径0.69m、短径0.49m、深さは約36cm、底面標高32.44mである。A-A'間の土層断面の観察及び出土土器の時期から、SH2→SK19の順に営まれたと考えられるが、SK1との先後関係は明らかにできなかった。以上から、SH2→SK1・SK19の順に営まれたことが想定できる。

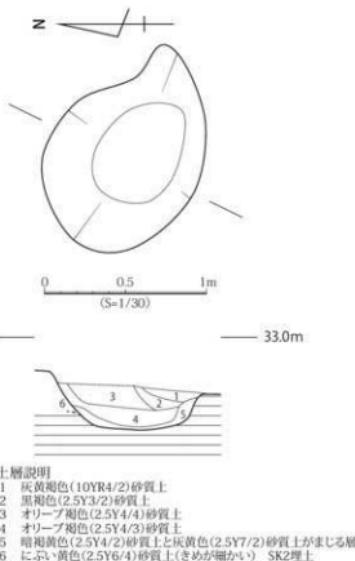
SK19からは白磁碗(135)が出土しており、その形態から太宰府条坊跡の陶磁器分類による白磁碗IV類<sup>14)</sup>と考えられる。小片のため混入の可能性もあり、上限がその時期で、それ以降の遺構と想定できる。

### ○ SK23 (第 41 図)

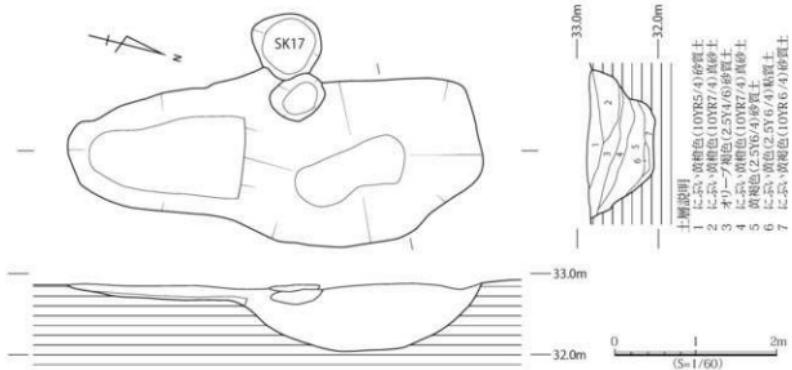
SK23 は、C3 区に位置している。掘り方規模は幅 2.0m、長さ 5.1m で平面が長楕円を呈する土坑である。北側が 0.8m、南側が約 0.15m と浅く、2 段構成となっている。土坑内からは弥生土器 (43) や砥石 (124) などの遺物が出土しているが、周囲の土坑の遺物が混入した可能性も考えられる。周囲の集落跡の時期が想定される土坑と形状が大きく異なるため、同時期の遺構と考えることが難しい。

### ○ SK25 (第 42 図)

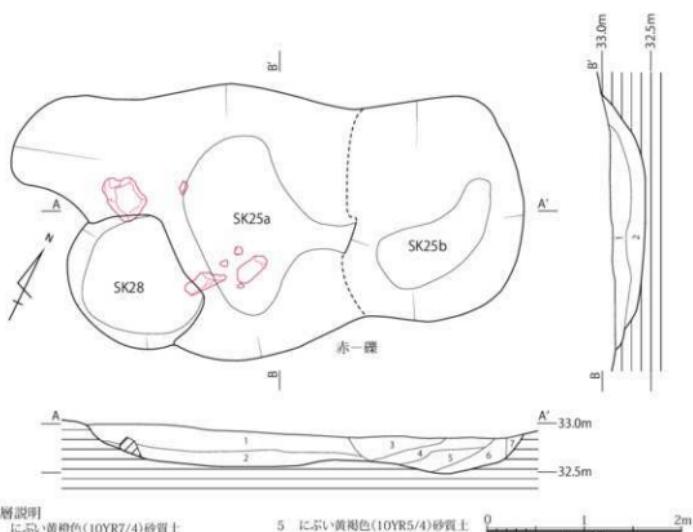
SK25 は、E2 区に位置している。明瞭な掘り方は確認できなかったが、土層観察から、SK25a と SK25b が切り合っていることが確認できた。切り合い関係から SK25a が先行する。また SK25a の南西側には、径 1.5m の平坦な土坑の底部が残存しており、SK25 が古い土坑である SK28 を削平して掘られていることが確認できた。SK25a の掘り方規模は幅 2.8m、残存長 3.5m で平面が長楕円を呈する土坑である。検出面からの深さは 0.29m である。土坑内からは、20cm 大～50cm 大の花崗岩の角礫が出土した。SK25b の掘り方規模は幅 1.7m、長さ 2.8m で、想定される平面が楕円を呈する土坑である。検出面からの深さは 0.28m である。



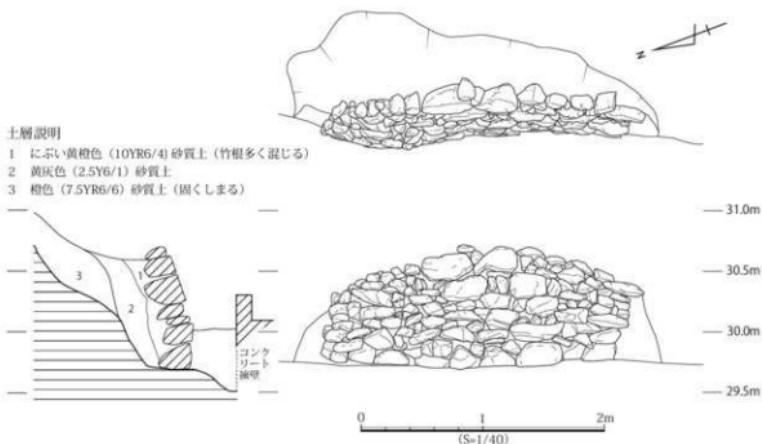
第 40 図 SK19 実測図 (S=1/30)



第 41 図 SK23 実測図 (S=1/60)



第42図 SK25 実測図 (S=1/50)



第43図 石垣実測図 (S=1/40)

周辺には集落跡の土坑が存在するが、SK23 と同様にそれらの土坑と形状が大きく異なるため、SK25a・b ともに同時期の遺構と考えることが難しい。

#### ○石垣（第 43 図）

石垣は丘陵の裾、隣接地（調査時は集合住宅でそれ以前は水田）に面する C1 区に位置している。基底石部分で、幅 2.4m、高さ 0.98m、傾斜角度 78° である。幅 30 ~ 40cm 大の花崗岩を平坦に整えた地山面上に並べており、胴木は使われていない。石垣中央から南側には、基底石と同程度かやや小ぶりの石材が使われているが、北側部分は 20cm 大の石材が多く使われている。この影響か、土圧に負け石垣北側部分は南側と比べ 20cm ほど手前にせり出している状態であった。石材はその大小に関わらず長辺や小口を規則性なく石垣面に向かっており、目地の判別が難しい、いわゆる「野面乱積み」の石垣である。裏込めには黄灰色の砂質土が約 20cm 堆積しており、石垣が築かれた時期を直接示す遺物は出土しなかった。

#### （2） 遺物

##### ○土師質土器・黒色土器・須恵質土器（第 53 図）

土師質土器（125 ~ 131）・黒色土器（133）・須恵質土器（134）は、遺構に伴うものではなく、調査区南側 G1・2 区の斜面埋土から出土している。

##### ・土師質土器

壺（125・128）は底部と体部の境に屈曲点もしくは段を持ち、底部から体部にかけてわずかに外湾し、稜を体部下位に持って、口縁部は直線的にのびる。

壺（127）は底部から体部が内湾し、口縁部は直線的にのび、回転ナデによる稜が顕著である。

壺（129）は底部から体部にかけてわずかに内湾するが、口縁部は直線的にのびる。

皿（130・131）は底部端から直立する短い口縁部を持つ。

塊（126）は底部から体部にかけてわずかに外湾し、稜を体部下位に持って、そこから直線的にのびる。底部端には、外方にふんばる形の短い高台を持つ。

底部は皿（130）のみ、糸切りで、他はヘラ切りである。

これらの土師質土器を藤野次史氏・永田千織氏による安芸地方における土師質土器皿・壺類の分類と編年<sup>15)</sup>に基づいて見てみたい。壺はすべて壺 I 類で、（125）は器高が不明のため a 類、（127・128）は a2 類、（129）は b2 類となる。皿（130・131）は、皿 I b 類である。時期は、器形や特徴から第 II 期までの範囲に収まると考えられる。塊（126）については、類例が少ないため判断しにくいが、塊が組成要素となるのは第 I 期頃までとされているので、第 I 期以前と捉えたい。こうした想定に基づけば、土師質土器は 11 世紀中葉から 13 世紀頃までの範囲のものと考えられる。

##### ・黒色土器

塊（133）は内面のみを黒色化している A 類である。口縁部は残存しないが、外方にふんばる形の短い高台を持つ。これらの特徴から、安田龍太郎氏による近畿地方の土器編年<sup>16)</sup>における 10 世紀中頃以降 11 世紀代までのものと考えられる。

#### ・須恵質土器

甕（134）は、口縁端部の内面に短く鋭い立ち上がりを持つことが特徴である。こうした特徴を持つ須恵質土器の類例が確認できなかったために時期については想定し得ないが、G1・2 区斜面埋土から出土している土器の時期に含まれるものと捉えたい。

#### ○磁器（第 53 図）

碗（135）は玉縁状の口縁端部を持つ白磁である。山本信夫氏による大宰府条坊跡の陶磁器分類における白磁椀IV類と想定され、11世紀後半から12世紀前半までのものと考えられる。

（136）は小片であるが、残存部の形状から小丸碗と考えられる染付磁器である。その特徴から九州近世陶磁学会の編年における波佐見V-4期のものと想定され、1820年代から1860年代までのものと考えられる。

（137）は白磁の小片である。口縁端部で屈折させており、形態からは、大宰府条坊跡の陶磁器分類における白磁皿IV-1類やIX-1d類にも見えるが、釉薬や胎土の特徴から近世から近代のものと想定される。

#### ○鉄器（第 52 図）

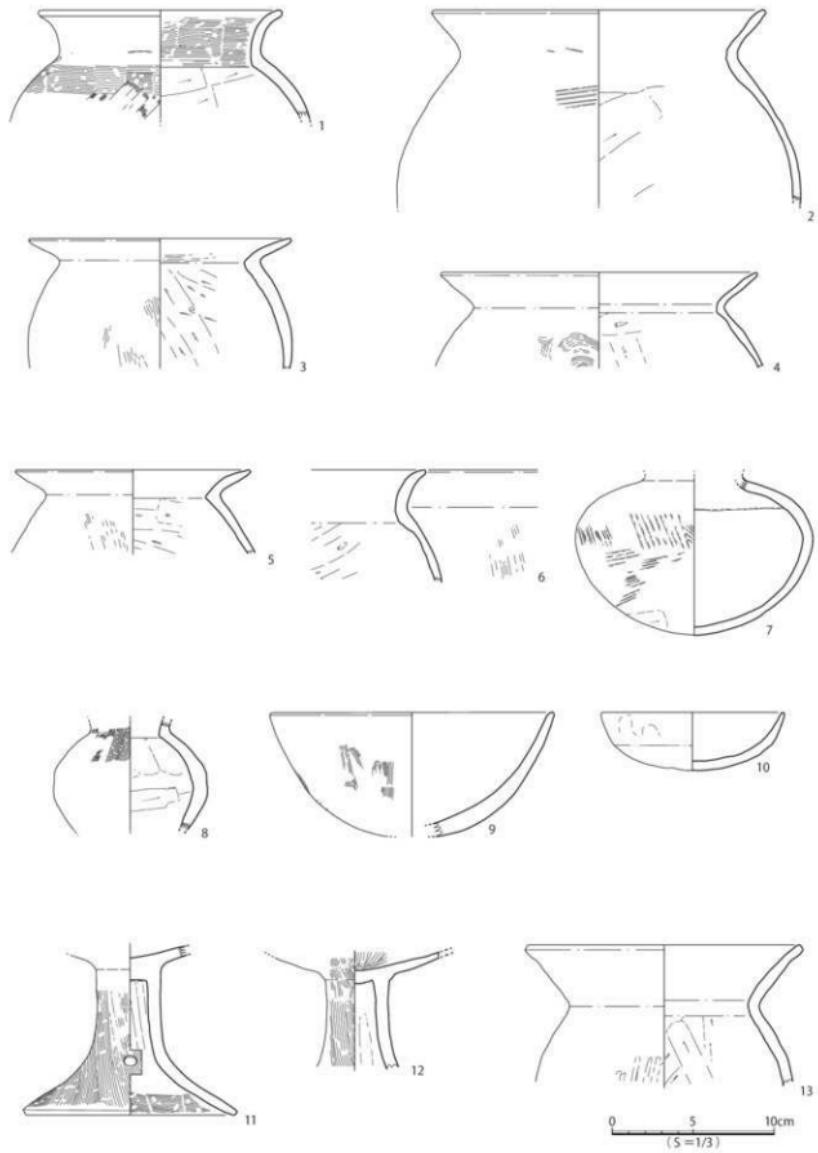
（117）は SK1 の東側から出土した。全長 11.95cm、幅 1.1 ~ 1.3cm、厚さ 0.4cm、重さ 25.3 g の棒状の鉄製品で、用途は不明である。（118）は SK1 埋土の中層から出土した。全長 7.55cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm、重さ 17.3 g の棒状の鉄製品である。一部欠損しているが（117）と同様の形状で、用途は不明である。

（119）は近年まで使用されていた C2 区の里道埋土より出土した鉄釘である。全長 3.5cm、幅 1.1cm、厚さ 0.4cm、頭部の幅が 2.4cm で、重さが 9.1 g である。頭部は折り曲げにより成形されている。

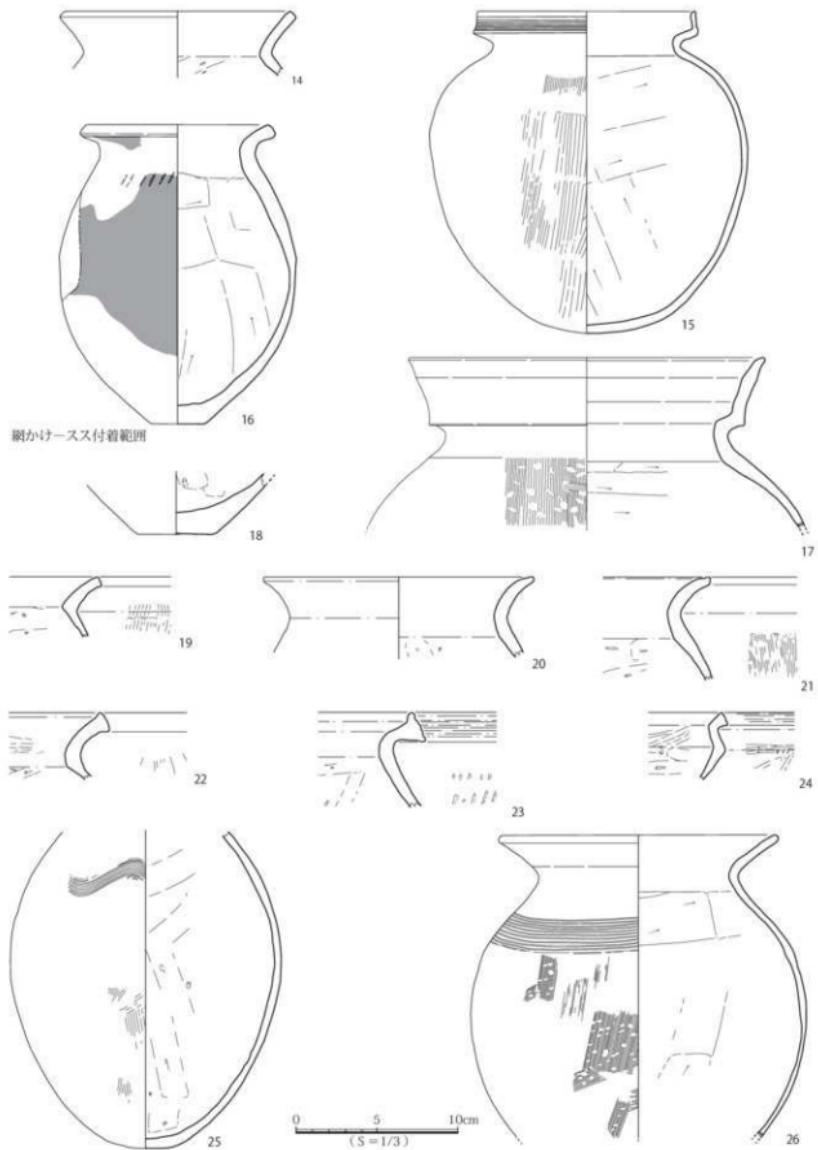
#### 注

- 1) 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990 年
- 2) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I』財団法人広島市文化財団 2002 年  
以下、在地系土器編年は若島氏の編年による。
- 3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 年  
以下、田辺編年はこれによる。
- 4) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1991 年  
以下、中村編年はこれによる。

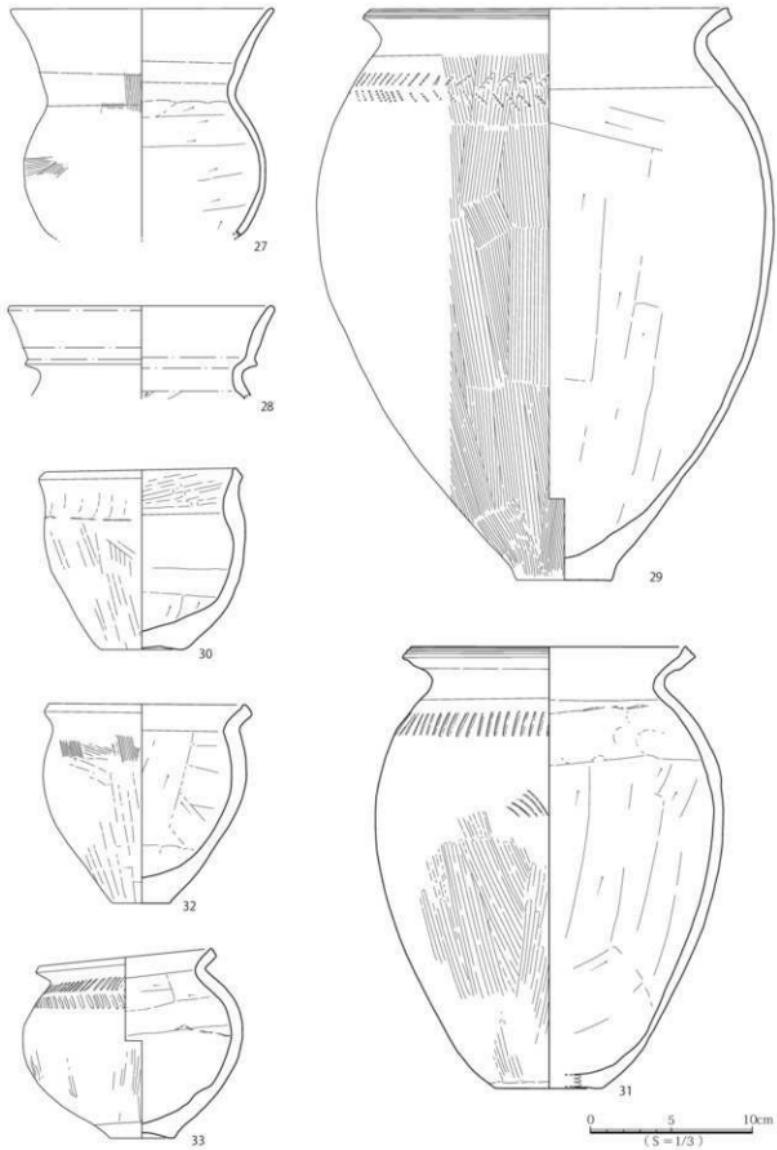
- 5) 高橋護「2 土師器の編年—3 中国・四国」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣 1991 年  
以下、高橋編年はこれによる。
- 6) 妹尾周三「4 安芸地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992 年
- 7) 伊藤実「3 備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992 年
- 8) 高畠知功「2 備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992 年
- 9) 高下洋一「大木椎現山式土器」『日本土器事典』雄山閣 1996 年
- 10) 入倉徳裕「小谷式土器」『日本土器事典』雄山閣 1996 年
- 11) 向田裕始「広島県（瀬戸内中部Ⅰ）の 8 世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣 1996 年
- 12) 池淵俊一「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀劍類を中心として—」『古代文化研究 第 1 号』島根県古代文化センター 1993 年
- 13) 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』九州近世陶磁学会 2000 年  
以下、九州陶磁の編年はこれによる。
- 14) 山本信夫『太宰府市の文化財 第 49 集 大宰府条坊跡 X V — 陶磁器分類編 —』太宰府市教育委員会 2000 年  
以下、大宰府条坊跡の陶磁器分類はこれによる。
- 15) 永田千織・藤野次史「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（下）」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 第 6 号』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 2015 年
- 16) 安田龍太郎「近畿地方の 10 世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣 1996 年



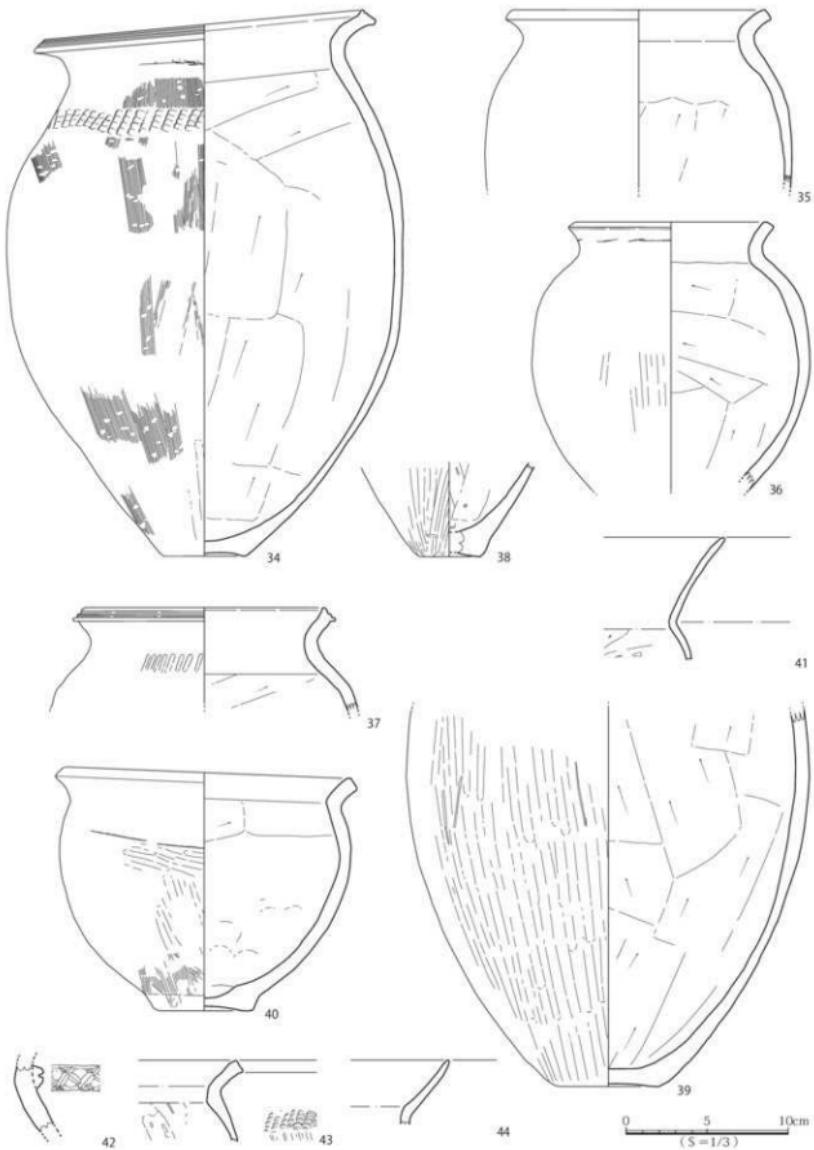
第44図 弥生土器・土師器実測図(1) (S=1/3)



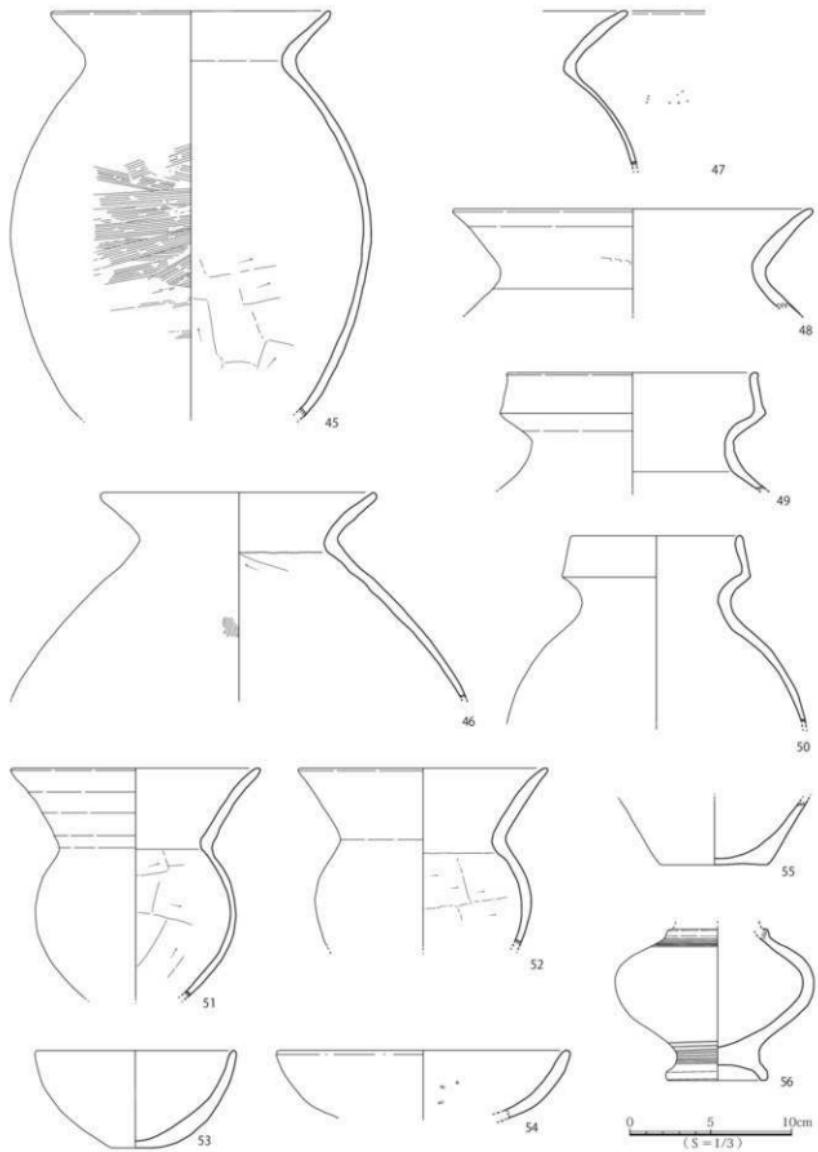
第45図 弥生土器・土師器実測図(2) ( $S=1/3$ )



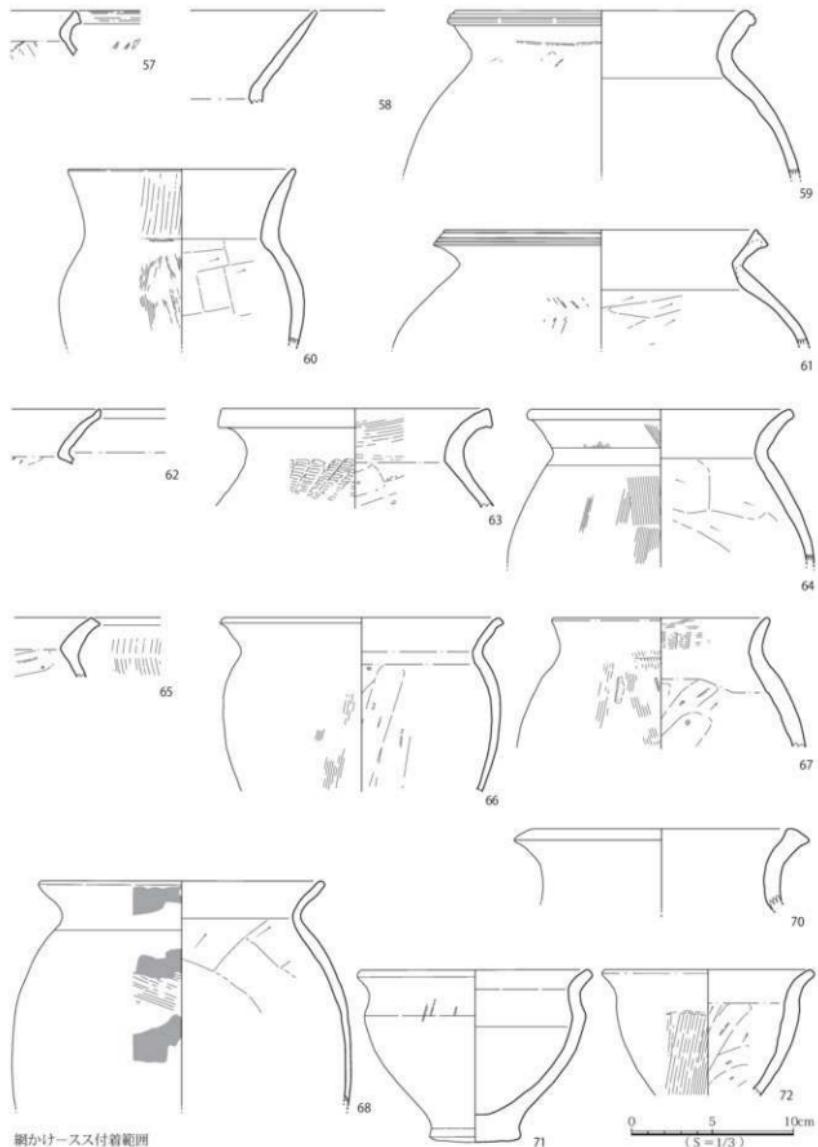
第46図 弥生土器・土師器実測図(3) (S=1/3)



第47図 弥生土器・土師器実測図(4) (S=1/3)

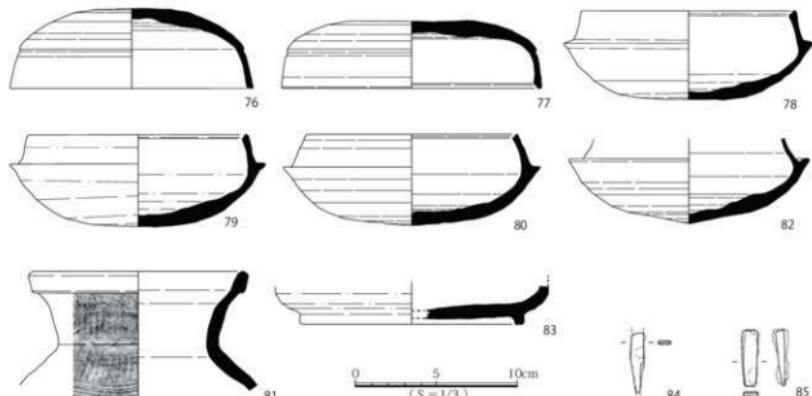
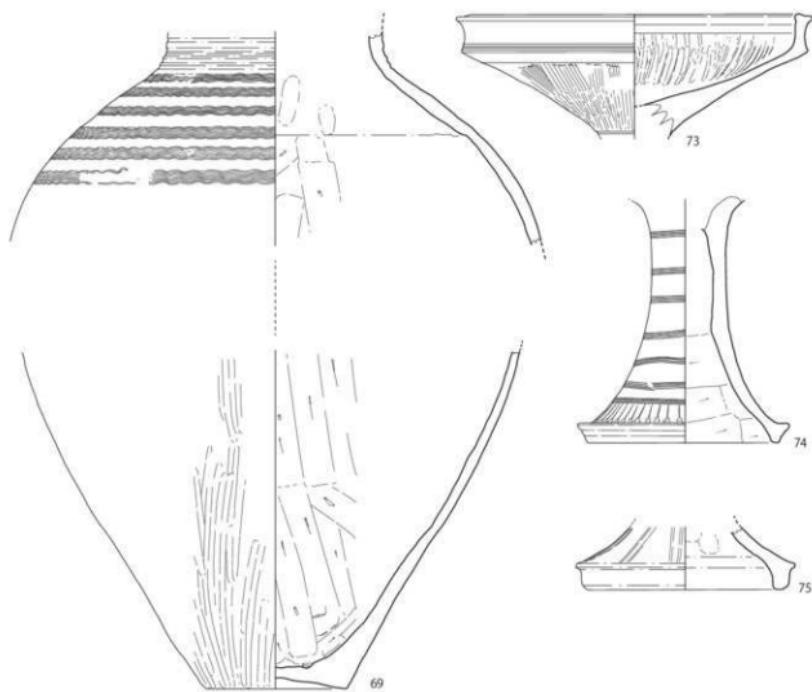


第48図 弥生土器・土師器実測図(5) ( $S=1/3$ )

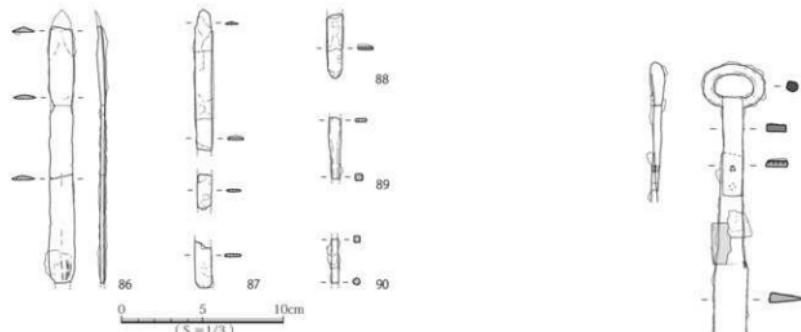


網かけース付着範囲

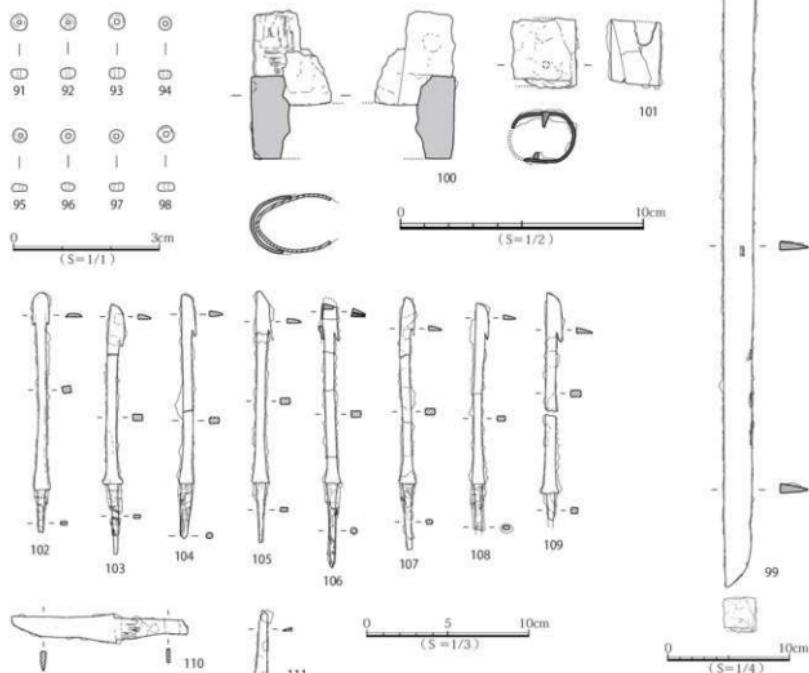
第49図 弥生土器・土師器実測図(6)(S=1/3)



第50図 弥生土器・須恵器・鉄器実測図 ( $S=1/3$ )



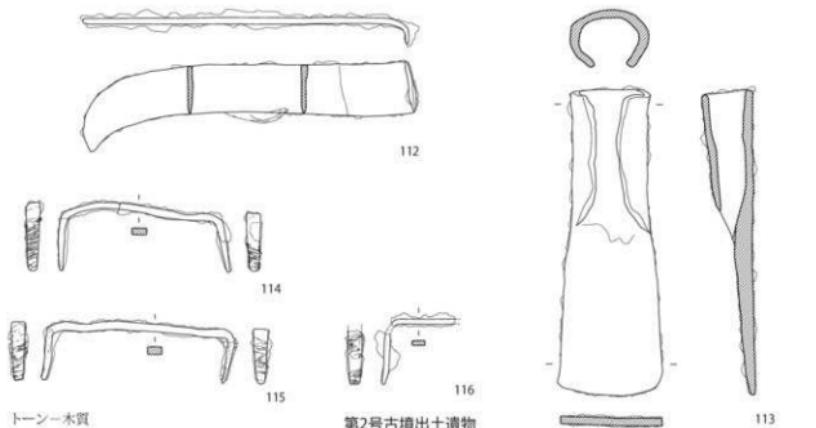
第1号古墳出土遺物



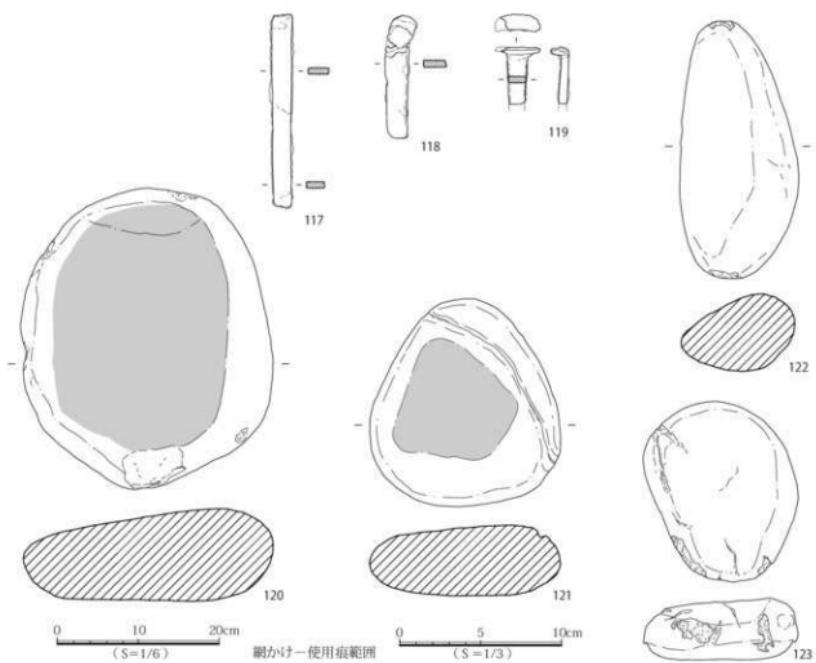
トーンー木質

第2号古墳出土遺物

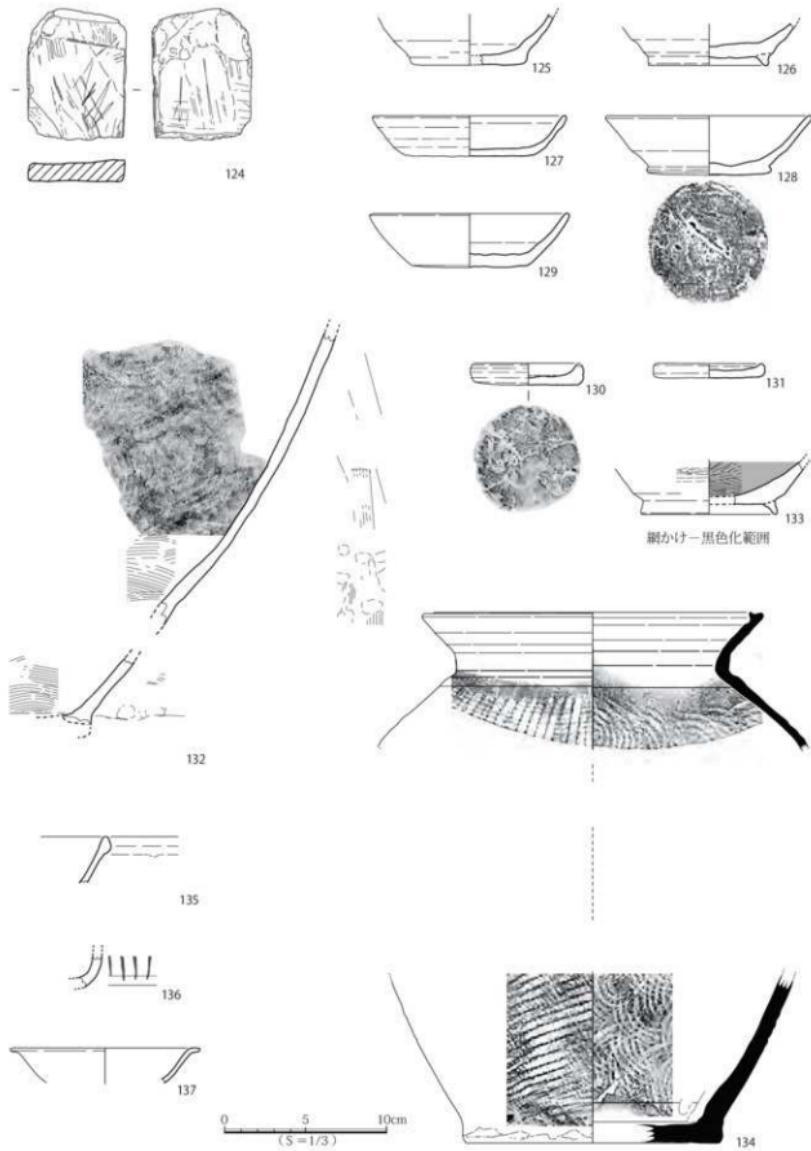
第 51 図 第 1・2 号古墳出土遺物実測図  
 $(S=1/3 : 86 \sim 90 \cdot 102 \sim 111, S=1/1 : 91 \sim 98, S=1/4 : 99, S=1/2 : 100 \cdot 101)$



第2号古墳出土遺物



第52図 第2号古墳出土遺物・鉄器・石器実測図 (S=1/3, 120のみ S=1/6)



第53図 石器・土師質土器・黒色土器・須恵質土器・磁器実測図 ( $S=1/3$ )

第3表 土器・土師器観察表

(〔 〕:復元値)

| 番号 | 器種   | 出土位置   | 寸法(cm)                           | 器形  | 調整・成形  | 備考  |
|----|------|--------|----------------------------------|---|--|---|
| 1  | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径 15.0<br>頸部径 12.4<br>器高 [6.7]  | 口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らにおさめる。  | 口縁部：内面上部・外面ヨコナデ<br>外面：胴部ハケ目<br>内面：口縁部ハケ目、胴部ヘラ削り            | 胎土：密、1~2mm 大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色                |
| 2  | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径 20.6<br>頸部径 17.1<br>器高 [12.0] | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや丸く收める。胴部上位は内湾しつつ口縁部に至る。                                 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部タタキのちナデ<br>内面：胴部ヘラ削り                   | 胎土：やや粗、1~2 mm 大の砂粒・クサリ繙を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：明褐色         |
| 3  | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径 [16.0]<br>胴部径 [16.3]          | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味に收める。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。                          | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ、一部ヘラ磨き<br>内面：口縁部ハケ目後ナデ、頸部ナデ、胴部ヘラ削り       | 胎土：1~2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい橙色<br>外面口縁端部の一部にスス付着。 |
| 4  | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径 [19.4]                        | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部に至る直前で強くつまみ器厚が薄くなり、端部は尖り気味に收める。胴部上位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。     | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ、頸部下にハケ状工具による波状文をめぐらす<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り  | 胎土：1~2mm 大の砂粒わずかに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄橙色                 |
| 5  | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径 [14.3]                        | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部に至る直前で強くつまみ器厚が薄くなり、端部は尖り気味に收める。胴部上位から頸部にかけてわずかに内湾しつつ立ち上がる。 | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り                       | 胎土：1~2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色                     |
| 6  | 甕形土器 | SH1 埋土 |                                  | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけては外湾して尖り気味に收める。胴部上位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。                  | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り                       | 胎土：1~2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい橙色<br>胴部中位にわずかにスス付着。  |
| 7  | 壺形土器 | SH1 埋土 | 頸部径 6.4<br>胴部径 14.6<br>器高 [9.7]  | 底部は丸底で、胴部は球形を呈する  | 外面：胴部タタキの後ナデ、底部静止ヘラ削り<br>内面：胴部ナデ                           | 胎土：やや粗、1mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄橙色             |
| 8  | 壺形土器 | SH1 埋土 | 頸部径 5.6<br>胴部径 9.5<br>器高 [6.8]   | 胴部は球形で、頸部で「く」の字状に屈曲し、外上方へと開く。   | 外面：頸部細いハケ目、胴部下半細いハケ目及びナデ<br>内面：頸部ヘラ状工具によるオサエ及びヘラ削り、胴部ユビオサエ | 胎土：密、1mm 大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色                 |

| 番号 | 器種   | 出土位置   | 寸法(cm)                       | 器形  | 調整・成形  | 備考   |
|----|------|--------|------------------------------|---|--|--|
| 9  | 鉢形土器 | SH1 埋土 | 口径<br>器高                     | 17.5<br>[7.6] 底部は丸底で、口縁にかけて内湾しつ上方へ延びる。口縁端部は丸くおさめる。  | 外面：ユビオサエの後にハケ目、その後部分的に擦り消しミガキ 内面：口縁部ヨコナデ             | 胎土：密、1mm 大の砂粒を疎らに含む 焼成：良好 色調：明黄褐色                              |
| 10 | 碗形土器 | SH1 埋土 | 口径<br>器高                     | [11.2]<br>3.6 底部から口縁部にかけて内湾しつ立ち上がる。口縁端部は尖り氣味に収める。底部は丸底。   | 外面：口縁部ナデ、体部から底部ナデ 内面：ナデ                              | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色                                  |
| 11 | 高杯   | SH1 埋土 | 口径<br>底径<br>器高               | 12.8<br>9.7<br>9.7 脚部はラッパ状に開き、端部はやや丸くおさめる。中央よりやや下側に径 8mm の円形の透かし孔が 2箇所ある。                         | 外面：ハケ目<br>内面：脚部ヘラ状工具によるオサエ、端部ハケ目                     | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む 焼成：良好 色調：浅黄色                                  |
| 12 | 高杯   | SH1 埋土 |                              | 残存する杯部の底部はわずかに内湾する。脚部は断面「ハ」の字状に開く。  | 外面：ハケ目<br>内面：杯部ていねいなヘラ磨き、脚部ナデ                        | 胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色                                    |
| 13 | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径                           | [16.8] 口縁部は「く」の字状に外反し、端部に至る直前で強くつまみ器厚が薄くなり、端部はわずかに平らに収める。胴部上位から頸部にかけて内湾しつ立ち上がる。                   | 外面：口縁部から胴部上位ナデ、胴部中位ヘラ磨き後部分的にナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り    | 胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面一明黄褐色 内面一橙色<br>外面頸部の一部にスス付着。          |
| 14 | 甕形土器 | SH1 埋土 | 口径                           | [13.3] 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。  | 外面：ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り                             | 胎土：1～3mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：明赤褐色                                |
| 15 | 甕形土器 | SH2    | 口径<br>胴部径<br>器高              | 13.5<br>19.5<br>19.8 口縁部は「く」の字状に外反し、その端部に内傾しつ立ち上がる。拡張部がつく複合口縁。端部は丸く収める。外面に 7 条の擬凹線文。底部は丸底で、胴部は球形。 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部上位ヘラミガキ、一部ハケ目<br>内面：胴部ヘラ削り       | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む 焼成：良好 色調：橙色<br>胴部下半にスス付着                      |
| 16 | 甕形土器 | SX1    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>底径<br>器高 | 12.0<br>9.6<br>14.6<br>3.3<br>18.4 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに収める。胴部は倒卵形を呈し、底部は平坦である。                 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>内面：胴部ヘラ削り<br>外面：胴部調整不明、肩部にヘラ状工具による刺突文 | 胎土：やや密、1mm 大の砂粒・クサリ礫を疎らに含む 焼成：良好 色調：褐色<br>焼成時の器表面の剥離あり。全体にスス付着 |
| 17 | 甕形土器 | SX1    | 口径<br>頸部径<br>器高              | 22.0<br>17.4<br>[10.4] 頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し、その端部に外上方に外湾しつ立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部はやや丸くおさめる。            | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部ハケ目<br>内面：胴部ヘラ削り                 | 胎土：密、1～2mm 大の砂粒を僅かに含む 焼成：良好 色調：にい黄褐色                           |

| 番号 | 器種   | 出土位置   | 寸法(cm)               | 器形   | 調整・成形  | 備考  |
|----|------|--------|----------------------|--|--|---|
| 18 | 甕形土器 | SX1    | 底径 [4.8]             | 底部から胴部にかけては直線気味に外上方に立ち上がる。底部は平底。                         | 外面：磨耗著しく不明<br>内面：ヘラ削り  | 胎土：1～3mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：外面一赤褐色<br>内面一明赤褐色<br>外面の一部にスス付着。 |
| 19 | 甕形土器 | SX1 埋土 |                      | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに收める。                                | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色                               |
| 20 | 甕形土器 | SX2 埋土 | 口径 [16.6]            | 口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は丸く收める。                                 | 外面：口縁部ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り  | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色                               |
| 21 | 甕形土器 | SX2 埋土 |                      | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけては外湾して平らに收める。胴部上位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。 | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                                 |
| 22 | 甕形土器 | SX2 埋土 |                      | 口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は肥厚しつつ平らに收める。                           | 外面：口縁部ナデ、胴部上部ハケ目後、部分的にナデ<br>内面：口縁部上半ナデ、口縁部下半ハケ目後ナデ、胴部上部ヘラ削り  | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色<br>外面口縁部の一部にスス付着。               |
| 23 | 甕形土器 | SX5 埋土 |                      | 口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に大きく肥厚して平らに收める。                      | 外面：口縁部ナデ後、端部に 4 条の凹線をめぐらす、胴部ナデ後、上位にハケ状工具による刺突文をめぐらし、刺突文の間を横方向に強くナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り              | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄橙色                             |
| 24 | 鉢形土器 | SX5 埋土 |                      | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚して平らに收める。体部は「く」の字状に内反して立ち上がる      | 外面：口縁部ナデ後、端部に 2 条の凹線をめぐらす、体部上位ナデ、屈曲部にヘラ状工具による刺突文をめぐらした後、体部中位ヘラ磨き<br>内面：口縁部ナデ、体部上位ナデ一部ヘラ磨き、体部中位ヘラ削り | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一にぶい黄橙色<br>内面一にぶい橙色              |
| 25 | 甕形土器 | SK4 埋土 | 胴部径 [16.7]<br>底径 3.4 | 胴部は倒卵形を呈する。底部は丸底に近い平底。                                   | 外面：胴部上位ナデ後、櫛歯状工具による波状文をめぐらす、胴部下位ハケ目後ナデ、底部ナデ<br>内面：ヘラ削り   | 胎土：1～2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一橙色<br>内面一明赤褐色                   |

| 番号 | 器種   | 出土位置    | 寸法(cm)                       | 器形                                  | 調整・成形   | 備考  |   |
|----|------|---------|------------------------------|-------------------------------------|---|---|---|
| 26 | 壺形土器 | SK18    | 口径<br>頸部径<br>胸部径<br>器高       | 17.2<br>12.3<br>20.6<br>[18.6]      | 頭部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、端部は丸く收める。胸部は丸みをおびる。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部ハケ目、肩部に11条の櫛描文<br>内面：胸部ヘラ削り                           | 胎土：やや密、1~2mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい橙色 |
| 27 | 壺形土器 | SK18    | 口径<br>頸部径<br>胸部径<br>器高       | 16.2<br>11.6<br>14.9<br>[14.1]      | 底部から頸部にかけて「く」の字状に大きく外反し、端部は丸く收める。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部ハケ目後ナデ<br>内面：胸部ヘラ削り                                   | 胎土：密、微小な砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色          |
| 28 | 壺形土器 | SK18 埋土 | 口径                           | [16.0]                              | 頭部から口縁部にかけて「く」の字状に短く外湾し、その端部に外上方にわずかに外湾気味に立ち上がりの扯張部がついて複合口縁。端部は丸く收める。                               | 外面：ナデ<br>内面：口縁部から頸部ナデ、胸部ヘラ削り  | 胎土：1mm大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：淡黄色           |
| 29 | 壺形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胸部径<br>底径<br>器高 | 22.7<br>20.0<br>28.1<br>5.8<br>35.2 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめ、2条の凹線(擬凹線文)が施されてる。胸部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がり、胸部最大径は中位よりやや上側に位置する。底部はやや齊み底である。  | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部ハケ目、頸部下位二枚貝による刺突文<br>内面：胸部ヘラ削り                        | 胎土：やや密、微小な砂粒・クサリ礫を疎らに含む<br>焼成：良<br>色調：淡黄色   |
| 30 | 壺形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胸部径<br>器高       | 12.5<br>12.0<br>12.4<br>11.1        | 口縁部は「く」の字状に短く緩やかに上方に外反し、端部は平らに收める。胸部は口縁とほぼ同じ幅で底部に向かって内湾する。底部はやや齊み底である。                              | 外面：ヘラミガキ、口縁下に板状工具による押圧痕残る<br>内面：口縁部ヘラミガキ、胸部ヨコナデ、底部ナデ上げ                    | 胎土：密、1mm大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色        |
| 31 | 壺形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胸部径<br>底径<br>器高 | 18.0<br>14.3<br>21.4<br>6.6<br>27.2 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめ、2条の凹線(擬凹線文)が施されている。胸部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がり、胸部最大径は中位よりやや上側に位置する。底部はやや齊み底である。 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部ヘラミガキ、最大径より上部にタタキ後ナデ及び二枚貝による刺突文<br>内面：胸部ヘラ削り          | 胎土：やや密、1~2mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色   |
| 32 | 壺形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>底径<br>器高        | 12.8<br>11.5<br>3.5<br>12.3         | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。胸部は玉ネギ形を呈し、底部は平坦である。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部上位ハケ目、胸部ヘラミガキ<br>内面：胸部ヘラ削り                            | 胎土：やや密、1~2mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色    |
| 33 | 壺形土器 | SK20    | 口径<br>最大径<br>底径<br>器高        | 11.1<br>13.5<br>4.0<br>11.7         | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。胸部は玉葱形を呈し、底部は齊み底である。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胸部タタキ後ナデ、底部付近ヨコナデ、頸部下にヘラ状工具による刺突文<br>内面：頸部付近ヘラ削り、頸部下半ナデ | 胎土：密、1mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色        |

| 番号 | 器種   | 出土位置    | 寸法(cm)                       | 器形                                  | 調整・成形   | 備考  |  |
|----|------|---------|------------------------------|-------------------------------------|---|---|--|
| 34 | 甕形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高<br>底径 | 21.0<br>17.0<br>24.4<br>33.6<br>5.0 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめ、3条の凹線(擬凹線文)が施されている。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がり、胴部最大径は中位よりやや上側に位置する。底部はやや窪み底である。 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：頸部板状工具による押圧痕、胴部ハケ目、頸部近くに二枚貝による刺突文<br>内面：胴部ヘラ削り            | 胎土：密、1~2mm大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                         |
| 35 | 甕形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>器高              | 16.3<br>14.2<br>[10.9]              | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部ナデ<br>内面：胴部ヘラ削り   | 胎土：密、1mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色                          |
| 36 | 甕形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高       | 12.6<br>11.2<br>17.1<br>[16.5]      | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。胴部は倒卵形を呈する。  | 口縁部：内外面ヨコナデ、外面に板状工具による押圧痕残る<br>外面：胴部ヘラミガキ<br>内面：胴部ヘラ削り                      | 胎土：密、微小な砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：黄橙色<br>胴部最大径付近にスス付着            |
| 37 | 甕形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>器高              | 16.2<br>14.0<br>[6.4]               | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：頸部下にヘラ状工具による刺突文<br>内面：胴部ヘラ削り                              | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色                            |
| 38 | 甕形土器 | SK20    | 底径                           | 3.7                                 | 底部から胴部にかけては直線気味に外上方に立ち上がる。底部は窪み底。   | 外面：ヘラ磨き、底部ナデ<br>内面：ヘラ削り   | 胎土：1~2mm大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一明赤褐色<br>内面一橙色<br>外面胴部の一部にスス付着 |
| 39 | 甕形土器 | SK20    | 底径<br>器高                     | 6.0<br>[23.2]                       | 底部はやや窪み底で、底部から胴部にかけて緩やかに内湾し延びる。   | 外面：胴部ヘラミガキ<br>内面：胴部ヘラ削り   | 胎土：やや密、1~2mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色                     |
| 40 | 鉢形土器 | SK20    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>底径<br>器高 | 18.5<br>16.7<br>18.0<br>5.7<br>15.0 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに收める。底部から胴部にかけては内湾し立ち上がる。底部はわずかに窪み底。  | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部ヘラミガキ、胴部下位ハケ目、板状工具による押圧痕残る<br>内面：口縁屈曲部下ヘラ削り、底部から胴部ユビオサエ | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：明褐色                            |
| 41 | 壺形土器 | SK22 埋土 |                              |                                     | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り氣味に收める。   | 外面：ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り  | 胎土：1~2mm大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色                             |
| 42 | 壺形土器 | SK22 埋土 |                              |                                     | 頸部は「く」の字状に外湾し、粘土帶を貼り付ける。  | 内外面：ナデ<br>粘土帶にはヘラ状工具による刺突で格子文をめぐらす  | 胎土：1~2mm大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                               |

| 番号 | 器種   | 出土位置    | 寸法(cm)                 | 器形                                    | 調整・成形  | 備考   |  |
|----|------|---------|------------------------|---------------------------------------|--|--|--|
| 43 | 甕形土器 | SK23 埋土 |                        | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに收める。             | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後、上位にハケ状工具による波状文をめぐらす<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：明赤褐色                  |  |
| 44 | 不明   | SK24 埋土 |                        | 口縁部は「く」の字状に外反したのちわずかに内湾し、端部は尖り気味に收める。 | 内外面：ナデ   | 胎土：0.5 ~ 1mm 大の砂粒含む<br>焼成：軟調<br>色調：浅黄橙色            |  |
| 45 | 甕形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高 | 17.2<br>13.0<br>22.2<br>[25.0]        | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。胴部は倒卵形を呈し、最大径が中央付近になる。          | 口縁部：外面ヨコナデ<br>外面：胴部ハケ目<br>内面：胴部ヘラ削り                | 胎土：やや粗、2 ~ 3mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色   |
| 46 | 甕形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>器高        | 17.0<br>12.2<br>[12.7]                | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く收める。                                 | 器表面の残りが悪く調整不明<br>部分的に口縁にヨコナデ、胴部外面にハケ目、内面にヘラ削りの痕跡あり | 胎土：やや粗、1 ~ 2mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：ぶい黄橙色 |
| 47 | 甕形土器 | SK26    | 器高                     | [9.5]                                 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く收める。                                 | 器表面の残りが悪く調整不明<br>外面頸部下に櫛歯状工具または二枚貝による刺突文の痕跡あり      | 胎土：やや粗、1mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色        |
| 48 | 甕形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>器高        | 22.2<br>16.4<br>[6.5]                 | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く收める。                                 | 口縁部：外面ヨコナデ   | 胎土：やや密、1mm 大の砂粒疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：明褐色        |
| 49 | 壺形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高 | 15.5<br>12.4<br>16.4<br>[7.2]         | 頭部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、その端部に内上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は丸く收める。 | 口縁部：外面ヨコナデ<br>外面：調整不明<br>内面：胴部ヘラ削り                 | 胎土：やや粗、微小な砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：淡黄色           |
| 50 | 壺形土器 | SK26    | 口径<br>胴部径<br>器高        | 10.6<br>[18.4]<br>[11.6]              | 頭部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、その端部に内上方に立ち上がる拡張部がつく複合口縁。端部は丸く收める。 | 口縁部：外面ヨコナデ<br>外面：胴部調整不明                            | 胎土：やや粗、1mm 大の砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：ぶい黄橙色      |
| 51 | 壺形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高 | 15.6<br>9.4<br>12.4<br>[14.6]         | 底部から頸部にかけて「く」の字状に外反し、口縁部は「く」の字状に大きく外反し、端部は丸く收める。         | 口縁部：外面丁寧なヨコナデ<br>外面：胴部調整不明<br>内面：胴部ヘラ削り            | 胎土：やや粗、1mm 大の砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：ぶい黄橙色      |
| 52 | 壺形土器 | SK26    | 口径<br>頸部径<br>胴部径<br>器高 | 15.4<br>10.2<br>13.3<br>[11.0]        | 底部から頸部にかけて胴部は内湾し、口縁部は「く」の字状に大きく外反し、端部は丸く收める。             | 口縁部：外面ヨコナデ<br>外面：胴部調整不明<br>内面：胴部ヘラ削り               | 胎土：やや粗、1 ~ 2mm 大の砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色   |

| 番号 | 器種   | 出土位置   | 寸法(cm)                                     | 器形   | 調整・成形   | 備考   |
|----|------|--------|--|--|---|--|
| 53 | 鉢形土器 | SK26   | 口径 12.4<br>器高 6.0                          | 底部は丸底で、口縁にかけて内湾しつつ上方へ延びる。口縁端部は丸くおさめる。                                | 内外面：ミガキ、器表面が剥落し、土が固着  | 胎土：密、微小さな砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄橙色          |
| 54 | 碗形土器 | SK26   | 口径 [17.9]                                  | 体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は丸く收める。                                    | 外面：ナデ<br>内面：口縁部ナデ、体部ヘラ削り後ていねいなナデ                                      | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：軟調<br>色調：橙色                  |
| 55 | 不明   | SK27   | 底径 6.5<br>器高 [4.0]                         | 底部は平底で、胴部は外上方へ延びる。   | 内外面共に調整不明   | 胎土：やや粗、2 ~ 5 mm 大の砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色    |
| 56 | 壺形土器 | SK27   | 頸部径 6.2<br>胴部径 12.2<br>底径 6.3<br>器高 [9.3]  | 頸部から肩部までは緩やかに下り、体部は扁平な玉ネギ形を呈する。頸部には突帯が廻る。台部は断面「ハ」の字状を呈する。            | 外面：ヨコナデ、頸部の突帯下側に 6 条の条痕文、胴部と台部の境に 8 条の条痕文が施される                        | 胎土：密、1 ~ 2mm 大の砂粒を多く含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色         |
| 57 | 甕形土器 | SK27   |  | 口縁部は「く」の字状に外溝し、端部は上下に肥厚して平らに收める。                                     | 外面：ナデ後、口縁端部に 2 条の凹線を、頸部直下にヘラ状工具による刺突文をめぐらす<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り         | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色                |
| 58 | 不明   | ST2    |  | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は尖り気味に收める。  | 内外面：ナデ  | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色                |
| 59 | 甕形土器 | SD1 西片 | 口径 19.0<br>頸部径 16.0<br>器高 [10.0]           | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らにおさめ、2 条の沈線(擬凹線文)が施されている。胴部中位から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。 | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：頸部板状工具による押圧痕、胴部調整不明<br>内面：胴部ヘラ削り                    | 胎土：やや粗、2 ~ 3 mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄橙色 |
| 60 | 甕形土器 | SD4    | 口径 14.0<br>頸部径 12.0<br>胴部径 15.1<br>器高 10.8 | 口縁部は外上方に緩やかに外反する。胴部は丸みを帯びる。  | 口縁部：内面・外面上部ヨコナデ<br>外面：口縁部ヘラミガキのちナデ、頸部外面に板状工具による押圧痕、胴部ハケ目<br>内面：胴部ヘラ削り | 胎土：やや密、1 ~ 2 mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色     |
| 61 | 甕形土器 | SK1    | 口径 20.6<br>頸部径 17.4<br>器高 [7.0]            | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は肥厚させ平らにおさめ、3 条の凹線(擬凹線文)が施されている。                    | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部調整不明、部分的に刺突文の跡が残る<br>内面：胴部ヘラ削り                    | 胎土：やや粗、1mm 大の砂粒・クサリ跡を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色     |

| 番号 | 器種   | 出土位置   | 寸法(cm)                                       | 器形  | 調整・成形   | 備考   |
|----|------|--------|--|---|---|--|
| 62 | 甕形土器 | SK1 埋土 |  | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部に至る直前で強くつまみ器厚がやや薄くなり、端部は上方に肥厚しつつ平らに收める。                | 外面：口縁部ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：1mm 大の砂粒若干含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄褐色                                |
| 63 | 甕形土器 | SK2 埋土 | 口径 [16.4]                                    | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚しつつ平らに收める。                                       | 外面：口縁部ナデ、胴部ナデ後ハケ状工具による押引文をめぐらす<br>内面：口縁部ハケ目後ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：1~3mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一にぶい赤褐色<br>内面一黒褐色<br>外面口縁端部の一部にスス付着 |
| 64 | 甕形土器 | C1 区   | 口径 16.4<br>頸部径 13.2<br>器高 9.5                | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。   | 外面：口縁部ヨコナデ<br>後部分的にハケ目、<br>胴部ハケ目<br>内面：口縁部ヨコナデ、<br>胴部ヘラ削り   | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：明褐色                                  |
| 65 | 甕形土器 | C1 区   |  | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに肥厚しつつ平らに收める。                                      | 外面：口縁端部ナデ、<br>口縁部下位及び胴部<br>ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り  | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                                      |
| 66 | 甕形土器 | G2 区   | 口径 [16.9]<br>胸部径 [17.1]                      | 口縁部は「く」の字状に外反し、端部に至る直前でつまみ器厚がやや薄くなり、端部はわずかに平らに收める。胸部から頸部にかけて内湾しつつ立ち上がる。 | 外面：口縁部から胴部上位ナデ、胴部中位<br>ハケ目後ナデ<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り  | 胎土：1mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：外面一橙色<br>内面一褐灰色<br>外面口縁上位及び胴部の一部にスス付着 |
| 67 | 甕形土器 | G2 区   | 口径 [13.1]                                    | 口縁部は「く」の字状に外溝し、端部は尖り氣味に收める。胸部から頸部にかけて内溝しつつ立ち上がる。                        | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ、部<br>分的にハケ状工具の<br>痕跡が刺突文のよう<br>に残る<br>内面：口縁部上位ハケ<br>目後ナデ、口縁部下<br>位ナデ、胴部ヘラ削<br>り | 胎土：1~2mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                                    |
| 68 | 甕形土器 | G2 区   | 口径 17.6<br>頸部径 14.6<br>胸部径 20.9<br>器高 [13.9] | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は丸く收める。胸部は倒卵形か。                                      | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部ハケ目後ナデ<br>内面：胴部ヘラ削り   | 胎土：やや密、1mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：にぶい黄橙色                          |

| 番号 | 器種   | 出土位置      | 寸法(cm)  | 器形   | 調整・成形   | 備考  |
|----|------|-----------|---|--|---|---|
| 69 | 壺形土器 | C1 区・D1 区 | 底径<br>8.6   | 残存する胴部上位から頸部にかけては内湾しつつ内上方に立ち上がり、頸部は緩やかに外湾した後、上方にのびる。底部から胴部下位にかけては外上方に直線的に立ち上がり、胴部下位はわずかに内湾する。底部は窪み底。 | 外面：頸部ナデ後、残存部で5条の凹線をめぐらす、胴部上位ナデ後ハケ状工具により6条の波状文をめぐらす、胴部下位ヘラ磨き後部分的にナデ、底部ナデ<br>内面：頸部から胴部上位ナデ、一部にヘラ状工具によるナデ時の圧痕残る、胴部中位から底部ヘラ削り | 胎土：1～2mm大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面にぶい黄色<br>内面一褐色<br>底部外面に焼成時の黒斑残る |
| 70 | 壺形土器 | D1 区      | 口径<br>18.2<br>器高<br>[5.0]                               | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平坦に收める。  | 口縁部：内外面ヨコナデ   | 胎土：やや粗、1～2mm大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：明黄褐色                      |
| 71 | 鉢形土器 | C3 区      | 口径<br>14.5<br>底径<br>5.6<br>器高<br>10.6                   | 口縁部は「く」の字状に短く外反し、端部は平らに收める。胴部は玉ネギ形を呈し、底部は平坦である。  | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：胴部二枚貝または櫛歯状工具による刺突文をヨコナデによりナデ消す、下部はスス付着し調整不明<br>内面：胴部ナデ   | 胎土：密、微小な砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：浅黄色                             |
| 72 | 鉢形土器 | C3 区      | 口径<br>[12.6]<br>胴部径<br>[11.2]                           | 口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は丸みを帯びるがわずかに平らに收める。胴部は内湾しつつ外上方に立ち上がる。   | 外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目<br>内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り   | 胎土：0.5～1mm大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                              |
| 73 | 高环   | C3 区      | 口径<br>22.0<br>器高<br>[7.5]                               | 口縁部が上方に屈曲し、端部が横方向に抵抗されている。   | 口縁部：内外面ヨコナデ<br>外面：口縁部2条の凹線文施す、体部ハケ目の中ヘラミガキ、基部に1条の沈線施す<br>内面：体部ヘラミガキ   | 胎土：密<br>焼成：良好<br>色調：橙色・にぶい黄色                                    |
| 74 | 高环   | C3 区      | 底径<br>11.7<br>最大径<br>13.1<br>基部径<br>4.5<br>器高<br>[15.1] | 脚部はラッパ状に開き、端部は横方向に抵抗されている。   | 外面：ナデのち4条の櫛描文を7段(施文方向は左回り)施す、裾にヘラ状工具による沈線文と刺突文の組み合わせ文様施す<br>内面：荒いヘラ削り   | 胎土：やや密、1～2mm大の砂粒・クサリ礫を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                   |

| 番号 | 器種 | 出土位置 | 寸法(cm)    | 器形  | 調整・成形   | 備考                                  |
|----|----|------|-----------|---|---|-------------------------------------|
| 75 | 高環 | C3 区 | 底径 [12.0] | 脚部は断面「ハ」の字状を呈し、端部に至る直前で強く内湾しつつ下方に屈曲し、屈曲部は横方向へ突出している。屈曲部からは肥厚して下方へ延び、端部に至る直前で丸みを帯びるもの平らに收める。 | 脚部外面：屈曲部上位ナデ後、櫛描文を放射状に等間隔に施す、屈曲部下位ナデ<br>脚部内面：上位ナデ、ナデ時の指頭圧痕一部残る、下位ナデ | 胎土：1~2mm 大の砂粒含む<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色 |

第4表 須恵器観察表

([ ] : 復元値)

| 番号 | 器種 | 出土位置   | 寸法(cm)                         | 器形  | 調整・成形  | 備考   |
|----|----|--------|--------------------------------|---|--|--|
| 76 | 环蓋 | SH1 埋土 | 口径 15.0<br>器高 4.9              | 天井部は平坦気味で、緩やかなカーブを描きながら口縁部に至る。口縁端部はやや丸く收め、浅い段を有する。  | 天井部：回転ヘラ削り<br>肩付近：回転ヘラ削りの後クロナデ<br>口縁部・内面：回転口クロナデ   | 胎土：密、1mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰白色             |
| 77 | 环蓋 | SH1 埋土 | 口径 16.0<br>器高 4.1              | 天井部は平坦気味で、緩やかなカーブを描きながら口縁部に至る。口縁端部はやや丸く收め、内側に段を有する。   | 天井部：回転ヘラ削り<br>肩付近：回転ヘラ削りの後回転クロナデ<br>口縁部・内面：回転口クロナデ | 胎土：密、1mm 大の砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰白色             |
| 78 | 环身 | SH1 埋土 | 口径 13.2<br>受部径 15.4<br>器高 5.45 | 立ち上がりはやや長く、内傾し、内上方へのびる。端部は段を有する。受部は外方にのび、端部は尖り気味に收める。底部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。                    | 底部：回転ヘラ削り<br>口縁部・内面：回転口クロナデ                        | 胎土：密、1~2mm 大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰白色<br>ロクロ左回転 |
| 79 | 环身 | SH1 埋土 | 口径 13.3<br>受部径 15.7<br>器高 5.7  | 立ち上がりは内上方に長くのび、端部はわずかに内側に肥厚しつつ平らに收める。受部は体部から横方向にわずかにつまみ出し、端部は尖り気味である。底部から体部にかけては内湾しつつ立ち上がる。 | 底部・外側体部下位：回転ヘラ削り<br>口縁部・内面・体部上位：回転クロナデ             | 胎土：1~3mm 大の砂粒若干含む<br>焼成：良好<br>色調：灰白色<br>ロクロ右回転     |

| 番号 | 器種 | 出土位置   | 寸法 (cm)                           | 器形   | 調整・成形   | 備考   |
|----|----|--------|-----------------------------------|--|---|--|
| 80 | 环身 | SH1 埋土 | 口径 13.0<br>受部径 15.8<br>器高 5.6     | 立ち上がりはやや長く、内傾し、内上方へのびる。端部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。                             | 底部：回転ヘラ削り<br>口縁部・内面：回転口<br>クロナデ   | 胎土：密、微小な砂粒を疎らに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰色<br>ロクロ右回転 |
| 81 | 不明 | SH1 埋土 | 口径 [12.9]                         | 口頭部は外湾し、外上方へのびる。端部に至る直前で強くつまり、端部は肥厚して玉縁状になる。                           | 口頭部上位・内面口頭部～体部上位：回転口<br>クロナデ<br>口頭部下位：叩き成形の後、回転ロクロナデ<br>体部上位：叩き成形の後、力キ目を施す、叩き成形による平行叩き痕残る | 胎土：1mm 大の砂粒若干含む<br>焼成：良好<br>色調：灰色            |
| 82 | 环身 | C1 区   | 口径 [11.8]<br>受部径 14.8<br>器高 [5.1] | 立ち上がりはやや長く、内傾し、内上方へのびる。端部は欠損。受部は外上方へのびる。端部は丸く収める。底部はやや丸く、ゆるやかにカーブする。   | 底部：回転ヘラ削り<br>口縁部・内面：回転口<br>クロナデ   | 胎土：密、微小な砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰色<br>ロクロ右回転 |
| 83 | 环  | SK1    | 底径 [13.7]                         | 底部から体部にかけて内湾しつつ外方に立ち上がる。底部は平坦で底部の端部にやや内傾して立ち上がる短い高台を貼り付ける。高台接地面は平坦である。 | 外面：回転ヘラ削り後、回転ロクロナデ<br>高台：回転ロクロナデ<br>底部：回転ヘラ切り後、高台貼り付け<br>内面：回転ロクロナデ後、一部ヨコナデ               | 胎土：精緻<br>焼成：良好<br>色調：灰色<br>ロクロ右回転            |

第5表 土師質土器・黒色土器・須恵質土器観察表

([ ])：復元値

| 番号           | 器種 | 出土位置 | 寸法 (cm) | 器形  | 調整・成形                            | 備考  |
|--------------|----|------|---------|---|----------------------------------|---|
| <b>土師質土器</b> |    |      |         |   |                                  |   |
| 125          | 环  | G1 区 | 底径 6.9  | 底部から体部に向けてわずかに外湾しつつ外上方に立ち上がり、体部中位からは直線的に立ち上がる。底部は平高台状になる。 | 外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り後一部ナデ<br>内面：回転ナデ | 胎土：精緻<br>焼成：良好<br>色調：浅黄橙色<br>巻き上げ成型の痕跡残る。ロクロ右回転 |

| 番号  | 器種 | 出土位置              | 寸法(cm)                                   | 器形  | 調整・成形   | 備考  |
|-----|----|-------------------|--|---|---|---|
| 126 | 壺  | G2 区              | 底径<br>7.3                                | 底部から体部にかけてわずかに外湾し、体部下位からは直線的に外上方に立ち上がる。底部は平坦で底部の端部に内傾して立ち上がる三角形の短い高台を貼り付ける。高台接地面は丸く收める。 | 外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後高台接合しナデ<br>内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後一部ナデ                                   | 胎土：1mm 大の砂粒わずかに含む<br>焼成：良好<br>色調：橙色                               |
| 127 | 壺  | G1・2 区            | 口径<br>[11.8]<br>底径<br>[8.0]<br>器高<br>2.4 | 底部から体部に向けて内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にむけて直線的にのびる。口縁端部は丸く收める。底部は平坦。                               | 外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り<br>内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後一部ナデ   | 胎土：0.5mm 大の砂粒わずかに含む<br>焼成：良好<br>色調：ぶい黄橙色<br>内面全体にスス付着。<br>ロクロ右回転  |
| 128 | 壺  | G1 区              | 口径<br>12.7<br>底径<br>7.6<br>器高<br>3.65    | 底部から体部にかけてわずかに外湾し、口縁部にむけて直線的に延びる。底部は平坦であるが、体部との境に段を持つ。                                  | 内面・外面：回転ナデ<br>底部：回転ヘラ切りの後にナデ、中央にヘラ状工具による沈線(長さ 2.8 cm) 施す                          | 胎土：密<br>焼成：良好<br>色調：淡黄色   |
| 129 | 壺  | G1 区              | 口径<br>12.3<br>底径<br>7.2<br>器高<br>3.3     | 底部から口縁部にかけてわずかに内湾し、口縁部にむけて直線的に延びる。底部は平坦。  | 内面・外面：回転ナデ<br>底部：回転ヘラ切りか？   | 胎土：密、微小な砂粒僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：淡黄色                                |
| 130 | 皿  | G1 区              | 口径<br>[6.4]<br>底径<br>6.4<br>器高<br>[1.4]  | 底部から体部に向けて直線的に上方に短く立ち上がり、口縁端部は丸く收める。底部は平坦。  | 外面：回転ナデ、底部回転糸切り<br>内面：回転ナデ  | 胎土：精緻<br>焼成：やや軟調<br>色調：橙色<br>ロクロ右回転                               |
| 131 | 皿  | G1 区              | 口径<br>6.4<br>底径<br>6.7<br>器高<br>0.9      | 底部から体部に向けて直線的に上方に短く立ち上がり、口縁端部は丸く收める。底部は平坦。  | 外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ<br>内面：体部回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ  | 胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一ぶい黄橙色<br>内面一部にスス付着。<br>ロクロ右回転 |
| 132 | 壺  | SK1・SK2・C1 区・D1 区 |  | 胴部下位から中位にかけてわずかに内湾しつ立ち上がる。底部から体部にかけ外上方に直線的に立ち上がる。                                       | 外面：胴部中位ハケ目後ヘラ状工具によるナデ、胴部下位ハケ目後ナデ、ナデ時の指頭圧痕残る<br>内面：胴部中位叩き成形、成形時の同心円文残る、胴部下位ハケ目及びナデ | 胎土：1mm 大の砂粒多く含む<br>焼成：良好<br>色調：外面一浅黄色～ぶい黄橙色<br>内面一黄灰色             |

| 番号    | 器種 | 出土位置 | 寸法(cm)  | 器形  | 調整・成形   | 備考  |
|-------|----|------|---|---|---|---|
| 黒色土器  |    |      |   |   |   |   |
| 133   | 塊  | G1 区 | 底径 [8.2]                                      | 底部から体部に向けて直線的に外上方に立ち上がる。底部は平坦で底部の端部に内傾して立ち上がる三角形の短い高台を貼り付ける。高台接地面は磨耗が著しく角が取れていますがわざとくに平らに収める。 | 外面：体部中位回転ヘラ磨き、体部下位回転ヘラ削り後回転ナデ、底部回転ヘラ切り後高台接合し回転ナデ<br>内面：回転ヘラ磨き           | 胎土：精緻<br>焼成：良好<br>色調：外面一橙色<br>内面一黒褐色<br>内面のみ炭素吸着による黒色化。ロクロ右回転 |
| 須恵質土器 |    |      |   |   |   |   |
| 134   | 甕  | G1 区 | 口径 21.0<br>立ち上がり径 19.6<br>頸部径 16.8<br>底径 15.6 | 頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、口縁端部内面に内上方に短い立ち上がりを有する。端部はやや丸く收める。底部は平底で、胴部にかけてやや外反し直線的に開く。             | 口縁部内外面：回転ナデ<br>胴部外面：格子目タタキ<br>胴部内面：青海波文<br>底部内面：胴部との境をヨコナデした後、底面を強いヨビナデ | 胎土：密、1~2mm 大の砂粒を僅かに含む<br>焼成：良好<br>色調：灰色                       |

第6表 陶磁器観察表

([ ])：復元値

| 番号  | 器種   | 出土位置    | 陶磁別 | 寸法(cm)    | 文様              | 特徴       | 推定産地・備考 |
|-----|------|---------|-----|-----------|-----------------|----------|---------|
| 135 | 碗？   | SK19    | 白磁  |           |                 | 玉縁状の口縁端部 | 中国      |
| 136 | 小丸碗？ | SK13 埋土 | 染付  |           | 不明（圓線の上位に縱線の連続） |          | 波佐見     |
| 137 | 皿    | SK2 埋土  | 白磁  | 口径 [11.7] |                 | 口縁端部外反する | 不明      |

第7表 石器観察表

| 番号  | 種別 | 出土位置 | 計測数値(cm, g) |      |      |      | 備考  |
|-----|----|------|-------------|------|------|------|---|
|     |    |      | 長さ          | 最大幅  | 断面厚  | 重量   |   |
| 120 | 台石 | SX1  | 37.0        | 30.7 | 11.3 | 1960 | 使用面1面                                     |
| 121 | 台石 | SX1  | 12.8        | 11.7 | 4.3  | 990  | 使用面1面                                     |
| 122 | 磨石 | SK4  | 15.8        | 7.3  | 4.6  | 755  | 磨面が上下に残る                                  |
| 123 | 敲石 | SK18 | 11.0        | 9.1  | 3.6  | 585  | 打撃痕下部2か所に残る                               |
| 124 | 砥石 | SK23 | 8.0         | 6.1  | 1.3  | 105  | 使用面長辺にあたる4面<br>被熱して赤変している箇所とススが付着している箇所あり |

# 緑井大上遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

広島県広島市安佐南区緑井八丁目に所在する緑井大上遺跡では、発掘調査において弥生時代後期を中心とする集落跡が確認された。

本分析調査では、弥生時代後期および古墳時代初頭に帰属するとされる土坑から採取された土壌、炭化材について、遺構の年代に関する資料を得るために、放射性炭素年代測定を、また当時の植生や植物利用について検討するために、花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。併せて土坑の用途について検討するために、土壤理化学分析を行った。

## 1. 試料

分析試料を表1に示す。

試料が採取された遺構は、弥生時代後期の土坑2基、古墳時代初頭頃の土坑3基である。

SK20は弥生時代後期前葉と想定される土坑であり、上層に廃棄されたと考えられる土器が多量に出土した。発掘調査所見によれば、貯蔵穴としての用途を終え、下層が埋まった後に土器を廃棄したものと考えられる。試料は、底部から採取された土壌試料1点である。

SK27は弥生時代後期前葉と想定される土坑であり、貯蔵穴と考えられる。試料は、炭化物層から炭化物1点、壺内埋土から土壌試料1点の計2点である。

SK4は古墳時代初頭頃と想定される土坑であり、発掘調査所見によれば、貯蔵穴としての用途を終え、下層が埋まった後に炭化物を含んだ土を廃棄したものと考えられる。試料は、上層埋土から採取された土壌試料1点である。

SK22は古墳時代初頭頃と想定される袋状土坑であり、その形状から貯蔵穴と想定される。試料は、中層に含まれる炭化物1点、下層土と上層（遺物含む層）からそれぞれ1点が採取された。

SK26は古墳時代初頭頃と想定される袋状土坑である。上層に炭化物を含んだ土が堆積しており、多量の土器が出土した。発掘調査所見によれば、貯蔵穴としての用途を終え下層が埋まった後に炭化物を含んだ土や土器を廃棄したものと考えられる。試料は、炭化物層の炭化物1点、底の溝内埋土と上層埋土（土器の下の層）からそれぞれ1点が採取された。

これらから、放射性炭素年代測定で3点、花粉分析で7点、植物珪酸体分析で7点、土壤理化学分析で7点を選択し、分析調査を実施する。

表1. 分析試料

| 年代           | 遺構                              | 調査所見                            | 層位・試料 | 分析項目            |   |    |
|--------------|---------------------------------|---------------------------------|-------|-----------------|---|----|
|              |                                 |                                 |       | $^{14}\text{C}$ | P | Po |
| 弥生時代<br>後期前葉 | SK20<br>貯蔵穴<br>(後に土器を廃棄)        | 底サンプル                           |       | ●               | ● | ●  |
|              | SK27<br>貯蔵穴<br>(壺が出土)           | 炭化物層<br>壺内埋土                    |       | ●               | ● | ●  |
| 古墳時代<br>初頭頃  | SK4<br>貯蔵穴<br>(後に土を廃棄)          | 上層埋土                            |       | ●               | ● | ●  |
|              | SK22<br>貯蔵穴<br>(袋状土坑)           | 上層（遺物包含層）<br>中層炭化物<br>下層土       |       | ●               | ● | ●  |
|              | SK26<br>貯蔵穴（袋状土坑、<br>後に土器や土を廃棄） | 炭化物<br>上層埋土（土器の下）<br>下層（底の溝内埋土） |       | ●               | ● | ●  |

14C: 放射性炭素年代測定 P: 花粉分析 Po: 植物珪酸体分析 土理: 土壤理化学分析

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩など酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸などアルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩など酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II), 国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6など), バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正用に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)を用いる。較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)を用いる。

### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、三好ほか(2011)などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

### (3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレ

バラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。

#### (4) 土壌理化分析

全炭素・全窒素の含量測定は乾式燃焼法、全リン酸の含量測定は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法で行う（土壤標準分析・測定法委員会、1986）。

以下に各項目の操作工程を示す。

##### 1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して、2mm 篩で全通させる。この篩通過試料を風乾細土試料とする。加熱減量法で乾燥（105°Cで 4 時間）し、水分量を求める。

また風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm 篩を全通させて粉碎土試料を作成する。

##### 2) 全炭素・全窒素の含量測定

粉碎土試料 0.1000 g～2.0000 g を石英ポートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素・全窒素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製 CN コーダーである。分析値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量・全窒素量（T-C・T-N 乾土 %）を求める。さらに、全炭素量を全窒素量で除し（割り）、炭素率（C/N）を求める。

##### 3) 全リン酸の含量測定

粉碎土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約 10ml を加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/g）を求める。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表 2、図 1 に示す。

分析試料のうち、SK22 の中層より分離した炭化物の樹種はアカガシ亜属（性状：ミカン割り樹皮なし炭化材、4 年輪中外側 2 年輪使用）、SK26 の炭化物層より分離した炭化物の樹種はスダジイ（性状：芯持丸木樹皮なし炭化材、6 年輪中外側 2～3 年輪使用）、SK27 の炭化物層より分離した炭化物の樹種はアカガシ亜属（性状：棒状加工材？、5 年輪中外側 2～3 年輪使用）である。これらは比較的保存状態が良く、定法での処理が可能であり、いずれも加速器質量分析装置に必要な炭素量が回収できている。

同位体補正を行った年代値は、SK22 が 1,860 ± 20BP、SK26 が 1,855 ± 20BP、SK27 が 1,850 ± 20BP と 3 点共に近似する。

曆年較正是、大気中の<sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去

表2. 放射性炭素年代測定結果

| 試料   | 性状 / 樹種       | 方法          | 補正年代<br>(曆年較正用)<br>BP    | $\delta^{14}\text{C}$<br>(‰) | 曆年較正年代    |              |            |        |      |       |      | 確率<br>%     | Code No.      |
|------|---------------|-------------|--------------------------|------------------------------|-----------|--------------|------------|--------|------|-------|------|-------------|---------------|
|      |               |             |                          |                              | 年代値       |              |            |        |      |       |      |             |               |
| SK27 | 炭化材<br>アカガシ亜属 | AAA<br>(1M) | 1850 ± 20<br>(1849 ± 20) | -26.79<br>± 0.23             | $\sigma$  | cal AD 129 - | cal AD 177 | 1821 - | 1773 | calBP | 45.9 | YU-<br>8429 | pal-<br>11468 |
|      |               |             |                          |                              | $2\sigma$ | cal AD 190 - | cal AD 213 | 1761 - | 1738 | calBP | 22.3 |             |               |
| SK22 | 炭化材<br>アカガシ亜属 | AAA<br>(1M) | 1860 ± 20<br>(1860 ± 20) | -27.50<br>± 0.33             | $\sigma$  | cal AD 87 -  | cal AD 106 | 1863 - | 1845 | calBP | 4.8  | YU-<br>8428 | pal-<br>11467 |
|      |               |             |                          |                              | $2\sigma$ | cal AD 121 - | cal AD 234 | 1830 - | 1716 | calBP | 90.6 |             |               |
| SK26 | 炭化材<br>スダジイ   | AAA<br>(1M) | 1855 ± 20<br>(1855 ± 20) | -27.08<br>± 0.40             | $\sigma$  | cal AD 91 -  | cal AD 99  | 1859 - | 1853 | calBP | 5.1  | YU-<br>8427 | pal-<br>11466 |
|      |               |             |                          |                              | $2\sigma$ | cal AD 124 - | cal AD 178 | 1826 - | 1773 | calBP | 44.4 |             |               |
|      |               |             |                          |                              | $\sigma$  | cal AD 189 - | cal AD 213 | 1761 - | 1738 | calBP | 18.7 |             |               |
|      |               |             |                          |                              | $2\sigma$ | cal AD 85 -  | cal AD 222 | 1865 - | 1729 | calBP | 95.4 |             |               |

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。

5) 曆年の計算には、Oxcal v4.32 を使用。

6) 曆年の計算には N1 術目まで示した年代値を使用。

7) 較正データーセットは Intcal13 を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 術目を丸めていない。

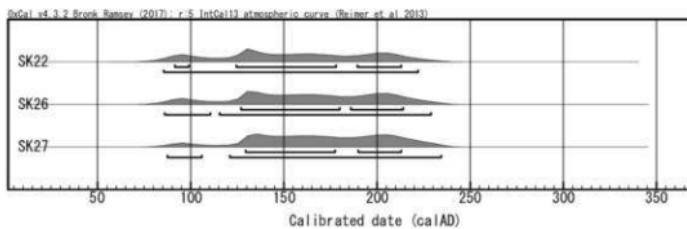


図1. 曆年較正結果

の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、その後訂正された半減期 ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することによって、曆年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。2  $\sigma$  の範囲は SK22 が calAD85 ~ 222, SK26 が calAD86 ~ 229, SK27 が calAD87 ~ 234 であり、ほぼ同じ年代値を示している。

## (2) 花粉分析

結果を表3に示す。

いずれの試料でも、花粉化石がほとんどあるいは全く検出されない。分析残渣も SK4 上層埋土、SK26 上層埋土（土器の下）で普通程度であった他は、少ないあるいは痕跡程度である。

わずかに検出される種類は、木本花粉のスギ属、ハンノキ属、イボタノキ属であり、それぞれ1 個体が確認された程度である。なお分析残渣が他と比べて多かった SK4 上層埋土、SK26 上層埋土（土器の下）では炭化した微細な植物片（いわゆる微粒炭）が多く含まれている。その中には、分野壁孔や放射組織などの木材組織を有するものも含まれていた。

### (3) 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。

土坑試料のうち、SK26の埋土

下層からは植物珪酸体が検出され

ない。他の試料からは植物珪酸体

が検出されるものの、保存状態が

悪い。これらの試料から検出され

る分類群は少なく、タケ亜科やス

スキ属、分類群の判別が出来ない

不明が僅かに認められるに過ぎな

い。

なおSK22の埋土下層からは、珪化組織片としてイネ属の稻殻（穎）に形成される穎珪酸体が僅かながらも産出する。

表3. 花粉分析結果

| 種類        | SK20<br>埋土 | SK27<br>壺内<br>埋土 | SK4<br>埋土 | SK22 |    | SK26 |    |
|-----------|------------|------------------|-----------|------|----|------|----|
|           |            |                  |           | 上層   | 下層 | 上層   | 下層 |
| 木本花粉      |            |                  |           |      |    |      |    |
| スギ属       | -          | 1                | -         | -    | -  | -    | -  |
| ハンノキ属     | -          | -                | -         | 1    | -  | -    | -  |
| イボタ／キ属    | -          | -                | 1         | -    | -  | -    | -  |
| 不明花粉      |            |                  |           |      |    |      |    |
| 不明花粉      | -          | 1                | -         | -    | -  | -    | 1  |
| シダ類胞子     | 2          | 17               | -         | 1    | -  | -    | 1  |
| 合計        |            |                  |           |      |    |      |    |
| 木本花粉      | 0          | 1                | 1         | 1    | 0  | 0    | 0  |
| 草本花粉      | 0          | 0                | 0         | 0    | 0  | 0    | 0  |
| 不明花粉      | 0          | 1                | 0         | 0    | 0  | 0    | 1  |
| シダ類胞子     | 2          | 17               | 0         | 1    | 0  | 0    | 1  |
| 合計(不明を除く) | 2          | 18               | 1         | 2    | 0  | 0    | 1  |

表4. 植物珪酸体含量

| 分類群          | SK20<br>埋土 | SK27<br>壺内<br>埋土 | SK4<br>埋土 | SK22 |      | SK26 |    |
|--------------|------------|------------------|-----------|------|------|------|----|
|              |            |                  |           | 上層   | 下層   | 上層   | 下層 |
| イネ科葉部短細胞珪酸体  |            |                  |           |      |      |      |    |
| タケ亜科         | -          | <100             | -         | -    | <100 | <100 | -  |
| ススキ属         | -          | <100             | -         | -    | <100 | <100 | -  |
| 不明           | -          | <100             | <100      | <100 | 100  | <100 | -  |
| イネ科葉身機動細胞珪酸体 |            |                  |           |      |      |      |    |
| タケ亜科         | <100       | -                | -         | -    | <100 | -    | -  |
| ススキ属         | -          | -                | -         | -    | <100 | <100 | -  |
| 不明           | -          | -                | -         | <100 | 100  | <100 | -  |
| 珪化組織片        |            |                  |           |      |      |      |    |
| イネ属穎珪酸体      | -          | -                | -         | -    | <100 | -    | -  |
| 合計           |            |                  |           |      |      |      |    |
| イネ科葉部短細胞珪酸体  | 0          | <100             | <100      | <100 | 200  | 100  | 0  |
| イネ科葉身機動細胞珪酸体 | <100       | 0                | 0         | <100 | 200  | <100 | 0  |
| 珪化組織片        | 0          | 0                | 0         | 0    | <100 | 0    | 0  |
| 植物珪酸体含量      | <100       | <100             | <100      | <100 | 500  | 200  | 0  |

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100 : 100倍/g未満

### (4) 土壌理化分析

結果を表5に示す。

以下に、土坑毎に結果を述べる。

#### • SK20

野外土性(ペドロジー学会編, 1997)はS(砂土)であり、土色はマンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)で2.5Y6/4のにぶい黄色を呈する。

全炭素は0.03%、全窒素は0.02%である。C/N比は2である。ただし、それぞれの含量が少ないために、C/N比について量比などを言及することは難しい。

全リン酸は0.09mg/gと少ない。

表5. 土壤理化分析結果

| 遺構名  | 試料名        | 土色      |      | 土性 | 全炭素<br>(%) | 全窒素<br>(%) | C/N | 全リン酸<br>(mg/g) |
|------|------------|---------|------|----|------------|------------|-----|----------------|
| SK20 | 底サンブル      | 2.5Y6/4 | にぶい黄 | S  | 0.03       | 0.02       | 2   | 0.09           |
| SK27 | 壺内埋土       | 2.5Y8/2 | 灰白   | S  | 0.12       | 0.02       | 6   | 0.19           |
| SK4  | 上層埋土       | 2.5Y2/1 | 黒    | S  | 2.09       | 0.06       | 35  | 0.13           |
| SK22 | 上層(遺物包含層)  | 2.5Y7/3 | 浅黄   | S  | 0.05       | 0.02       | 3   | 0.09           |
|      | 下層土        | 2.5Y6/3 | にぶい黄 | S  | 0.02       | 0.02       | 1   | 0.06           |
| SK26 | 上層埋土(土器の下) | 2.5Y4/1 | 黄灰   | S  | 1.21       | 0.04       | 30  | 0.09           |
|      | 下層(底の溝内埋土) | 2.5Y7/2 | 灰黄   | S  | 0.01       | 0.02       | 1   | 0.07           |

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック改訂版（日本ペドロジー学会編、1997）の野外土性による。

S…砂土（粘土0～5%、シルト0～15%、砂85～100%）

C/N：全炭素÷全窒素

#### • SK27

野外土性はSであり、土色は2.5Y8/2の灰白色を呈する。

全炭素は0.12%、全窒素は0.02%で、C/N比は6である。

全リン酸は0.19mg/gであり、他の土坑試料と比較して最も多く含有する。

#### • SK4

野外土性はSであり、土色は2.5Y2/1の黒色を呈する。

全炭素は2.09%、全窒素は0.06%である。C/N比は35であり、炭素の割合が大きい。

全リン酸は0.13mg/gであり、SK27に次いで多い。

#### • SK22

野外土性は両試料でSであり、土色は2.5Y6/3にぶい黄色、2.5Y7/3浅黄色を呈する。

全炭素は0.02%と0.05%、全窒素はいずれも0.02%である。C/N比は1と3であるが、含量が少ないためにC/N比について量比などの言及は難しい。

全リン酸は0.06mg/gと0.09mg/gであり、いずれも少ない。

#### • SK26

野外土性は、両試料でSである。土色は上層埋土で2.5Y4/1黄灰色、下層で2.5Y7/2灰黄色を呈し、色味が異なる。

全炭素は黒色味の強い上層埋土で1.21%、下層では0.01%である。全窒素は0.02と0.04%である。C/N比は上層埋土で30と算出され、炭素の割合が大きい。下層は1であり、含量が少ないためにC/N比について量比などの言及は難しい。

全リン酸は0.07mg/gと0.09mg/gであり、いずれも少ない。

### 4. 考察

#### (1) 土坑の年代

土坑から得られた炭化材の放射性炭素年代はSK22がcalAD85～222、SK26がcalAD86～229、SK27がcalAD87～234であり、ほぼ同じ年代値を示している。

発掘調査所見からは、SK27が弥生時代後期前葉頃、SK22とSK26が古墳時代初頭頃とされる。今回得られた年代値は概ね弥生時代後期～古墳時代初頭を含む値である。しかしながら、現地調査

所見で看取される SK27 と SK22, 26 との差がほとんど表れていない。本分析調査の結果では、これら 3 基の土坑はほぼ同時代に帰属するといえるが、採取した層位などの現地調査所見を含めて慎重に検討することが望まれる。

## (2) 土坑の内容物

弥生時代後期前葉とされる SK20（底部）ではイネなどの栽培植物や可食植物に由来する花粉化石や植物珪酸体、また動植物遺体の存在を示唆する土壤理化学成分の顕著な富化は見られないことから、貯蔵穴に食物として動物体や植物体が納められた痕跡は確認できなかった。

弥生時代後期前葉とされる SK27 出土の壺内埋土でも栽培植物に由来する痕跡は見られず、貯蔵穴から出土した壺内に植物遺体が残っていたとは考えにくい。なお、全リン酸含量は他の試料よりも多く、土色は灰白色で暗色化していないことから、植物に由来する土壤腐植の混入が少ないことが想定される。何らかの形で動物遺体の影響を受けている可能性を示唆する点は興味深い。

古墳時代初頭頃とされる SK26（土器の下に当たる埋土上層および底の溝内埋土に当たる埋土下層）も花粉化石や植物珪酸体の産状や土壤理化学分析結果から、貯蔵穴に食物あるいは遺体の痕跡を見ることは難しい。

SK4（埋土上層）では、全リン酸含量が SK27 の壺に次いで多かった。ただし、土色は黒色であり、また発掘調査所見で埋土上層に炭化物の含有が見られた。そのため、埋戻しの際に混入したとされる炭化物に由来するリン酸成分が加わった可能性が高く、動物遺体の影響を受けている可能性は考えにくい。

SK22 では、遺物包含層の下層でイネ属の糊粉に由来する珪化組織片が僅かながらも産出した。これより、袋状土坑内部の貯藏物のひとつとして稲糊粉が納められていた可能性が考えられる。

なお、SK27 出土の壺内埋土からスギ属が、SK4（埋土上層）からイボタノキ属が、SK22（遺物包含層の上層）からハンノキ属が、それぞれ検出され、弥生時代後期頃や古墳時代初頭頃に遺跡周辺で少なくともこれらの木本類の生育がうかがえる。また植物珪酸体の産状からも植生の詳細を検討することが難しいものの、少なくとも検出されたタケ亜科やススキ属などのイネ科が生育していたと思われる。

ところで、各試料からは花粉化石は殆どあるいは全く検出されなかった。花粉化石の産状が悪い場合は取り込まれにくかったことや堆積後に分解消失したことなどが考えられる。今回の場合には、分析残渣が少ない試料や痕跡程度しか見られない試料などがあったことから、もともと土壤中に花粉やシダ類胞子が取り込まれにくかった環境であった可能性がある。また一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1967；徳永・山内、1971；三宅・中越、1998 など）。分析対象とした土坑はいずれも貯蔵穴と想定されていることから、利用時や埋積時に好気的環境であった可能性もある。その場合は、僅かに取り込まれた花粉やシダ類胞子も分解の影響を受けたと考えられる。

植物珪酸体の産出も悪く、埋土となった土壤や土坑の周辺を含めてイネ科の生育量が少なく、土層中に植物珪酸体が蓄積しにくい状態にあったと考えられる。

また土壤中の理化学成分については、土坑などの埋土が砂質であることから、動植物遺体由來の成分が混入したとしても現代までに流下・消失し、絶対量も少なくなった可能性が大きい。さらに埋土となった土壤が元来有する保持量については調査しておらず、今回は影響の有無を明確にすることが難しい。そのため、今回の結果はSK22やSK27以外の土坑が貯蔵穴として利用された可能性を必ずしも否定するものでは無い。貯蔵穴としての機能を終える際に内容物が外部へ持ち出されたことも想定される。

#### 引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 土壤標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壤標準分析・測定法, 博友社, 354p.
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑, 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ペドロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版, 博友社, 169p
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50, 000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.
- 島倉巳郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Stuiver M. & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

## まとめ

### 1 集落の変遷及び構成について

緑井大上遺跡の集落遺跡では、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、テラス状遺構5か所、柱穴群1か所、土坑12基などを確認した。これらの遺構は出土遺物から見ると、弥生時代後期初頭から古墳時代前期までの時期幅に収まると想定される。以下、時期別に分類してみたい。

- ・弥生時代後期初頭（若島一則氏による編年におけるⅠ期<sup>1)</sup>）— SX5
  - ・弥生時代後期前葉（Ⅱ－1期）— SK20・SK27
  - ・弥生時代後期末葉（Ⅱ－3期）— SX1・SX2
  - ・古墳時代初頭（Ⅲ－1期）— SH1・SH2・SX1・SX2・SK4・SK22・SK24・SK26
  - ・古墳時代前期（Ⅲ－2期）— SK18
- ※ SK22・26・27については埋土中から出土した炭化物による放射性炭素年代測定を実施したが、AD90～100±20年でいずれもほぼ同時期のものとの結果を得た。遺物の年代観と近いものはSK27である。SK22・26については、炭化物が広がりを持たず限定して埋土中位以上から出土しており、混入したものと捉えられる。

この他の遺構については、時期を想定し得る遺物が出土していないが、規模や構造などから集落の存続時期の範囲内に収まるものと考えられる。また、確実に弥生時代後期中葉のものと想定できる遺構が確認できなかったが、調査区内出土土器を見ると、弥生時代中期末葉から後期中葉のものも含め、古墳時代前期までのものが連綿と見られる。

本遺跡は現状地形や土層観察から、全域で後世の削平が顕著に見られる。特に中央の平坦面については、元々のレベルが大きく下げられたと考えられ、SH2のように傾斜の下がった場所でわずかに壁が残存する状態になっている。加えて古墳が築造されたことや大型の土坑SK1・2に代表される後世の遺構により、本来存在していた集落遺構が消失したことが容易に想定される。

また、調査範囲のうちSX2南側及びSB1西側にあたる場所は大きくえぐられたような地形になっている。地元の方に伺った話では、土取りをしたためにこうした地形になったとのことであった。このことからも集落が存在していた時期の平坦面は現状より広かったことは間違いない。

これらの条件をふまえて、集落の構成を考えてみたい。竪穴住居跡はSH1・2の2軒しか確認できなかったが、1辺5m前後と広島湾岸の住居跡としては比較的大型の住居にあたる。SH2は中央平坦面の北寄り、SH1は中央平坦面の南側の一段下がった平坦面に位置する。SH1とSH2は同時期の遺構と想定されるが、その距離は約44mと離れている。平坦面の広さも考慮に入れると、同時期にあと数軒の住居の存在を想定してもよかろう。

遺構の配置を見ると平坦面東側と南東側の縁部に貯蔵穴と想定される土坑が集中しており、本来は平坦面中央に住居が配置されたものと考えられる。さらに斜面には作業場や通路としての役割

が想定されるテラス状遺構が配置されており、広島湾岸の集落遺跡でよく見られる遺構が揃っている。

## 2 緑井大上第1号古墳について

緑井大上第1号古墳は南北9.8mの方墳で、埋葬主体部が長さ4.38m、幅1.3mの二重墓壙になってしまっており、墓壙下段には長さ3.74m、幅0.68mの割竹形木棺が納められていた。棺内からは破碎された鉢などの鉄製品が出土し、墓壙や周溝内からは本古墳の時期を特定するような土器は出土しなかった。

緑井大上第1号古墳のように埋葬施設が二重墓壙となっており、納められた棺が割竹形木棺と考えられている古墳は広島市域では、本古墳を含み15例確認できる(第8表)。墓壙の上段部分は、後世の削平の影響を受けている例が多くあるが長さが3mを越えるものが多く、本古墳のように4mを越えるものは特に大きいものに分類することができる。墓壙下段は長さ3m以下のものが大半で、本古墳と権地古墳が群を抜いて長大で、極めて特徴的である。

棺内から出土した鉢の特徴は、幅が刃部先端付近まで一定して広くなっている、刃部の長さが短く、裏透きがない。このような例はIIa類に分類(古瀬、1991<sup>3)</sup>)されており、4世紀代から古墳時代を通して使用された形状のようである。出土状況にも特徴があり、棺内から出土した鉄製品は破碎された状態で、接合することができない部分が多いことから、複数個体が木棺に入れられる前に破碎され、棺の中に納められたと考えられる。このように人為的な破壊行為が認められる鉄器は破碎鉄器と呼ばれ、清家章氏は、その中でも折り曲げたものは折り曲げ鉄器、分割されたものは破断鉄器として分類している<sup>4)</sup>。県内において破碎鉄器が副葬されていた例として、成岡第1号古

第8表 広島市域の二重墓壙・割竹形木棺の古墳

| No. | 古墳名       | 主体部  | 所在地         | 上段    |         | 下段    |           | 備考      | 文献 |
|-----|-----------|------|-------------|-------|---------|-------|-----------|---------|----|
|     |           |      |             | 長さ    | 幅       | 長さ    | 幅         |         |    |
| 1   | 緑井大上第1号古墳 |      | 広島市安佐南区緑井地区 | 4.38  | 1.3     | 3.74  | 0.5~0.68  |         | 本書 |
| 2   | 権地古墳      | A主体  | 広島市安佐南区紙園地区 | 4.65  | 2.7     | 3.75  | 0.5       | 下段は朱の範囲 | 1  |
| 3   | 池の内第3号古墳  | A主体  | 広島市安佐南区紙園地区 | 4.15  | 1.4~1.8 | 2.75  | 0.45      |         | 2  |
| 4   | 芳力谷第1号古墳  |      | 広島市安佐南区紙園地区 | 2.8   | 0.75    | 2.2   | 0.6       |         | 3  |
| 5   | 大町七九谷古墳   |      | 広島市安佐南区大町地区 | 3.25  | 1.5     | 2.3   | 0.47      |         | 4  |
| 6   | 道川第1号古墳   |      | 広島市安佐北区高陽地区 | 3.5   | 2.1     | 3.1   | 0.6       | 粘土櫛     | 5  |
| 7   | 恵下第1号古墳   |      | 広島市安佐北区高陽地区 | 3.3   | 1.9     | 2.7   | 0.8~1.0   |         | 6  |
| 8   | 恵下第2号古墳   |      | 広島市安佐北区高陽地区 | 2.35  | 1.27    | 2.35  | 0.65~0.8  |         | 6  |
| 9   | 可部寺山第2号古墳 |      | 広島市安佐北区可部地区 | 3.3   | 1.0     | 2.55  | 0.6       |         | 7  |
| 10  | 可部寺山第3号古墳 |      | 広島市安佐北区可部地区 | 2.3   | 1.0     | 1.9   | 0.4~0.45  | 舟形木棺?   | 7  |
| 11  | 月見城遺跡ST2  | d主体  | 広島市佐伯区五日市地区 | (1.3) | 0.9     | (0.9) | 0.4       |         | 8  |
| 12  | 月見城遺跡ST5  | a主体  | 広島市佐伯区五日市地区 | 3.14  | 1.4     | 2.56  | 0.6       |         | 8  |
| 13  | 城ノ下第1号古墳  |      | 広島市佐伯区五日市地区 | 3.6   | 1.94    | 2.95  | 0.55      |         | 9  |
| 14  | 城ノ下第3号古墳  |      | 広島市佐伯区五日市地区 | 3.15  | 1.55    | 2.65  | 0.7       |         | 9  |
| 15  | 成岡第3号古墳   | 第7主体 | 広島市安芸区中野東   | 2.75  | 0.9     | 2.55  | 0.57~0.77 |         | 10 |

墳（広島市安芸区中野東：初頭，折り曲げ鉄器－刀子状鉄製品<sup>5)</sup>），道上第5号古墳（福山市神辺町：前期～中期前半，折り曲げ鉄器－短剣2，鎧，刀子<sup>6)</sup>），新宮第2号古墳第1号主体部（安芸高田市八千代町：4世紀後半，折り曲げ鉄器－鎧<sup>7)</sup>），下矢井南第4号古墳埋葬施設1（三次市矢井：4世紀末～5世紀初頭，破断鉄器－刀<sup>8)</sup>）の事例がある。破碎方法と鉄製品の種類の組み合わせが，本古墳と完全に一致する事例はないが，本古墳の時期を想定する上で示唆に富んでいる。

本古墳の時期は，埋葬主体部の墓壙の形状と規模，長大な割竹形木棺が納められている点，破碎鉄器が副葬されている点，弥生時代後期～古墳時代初頭まで営まれた集落に関連する遺構（SK3）を削平して古墳の周溝が設けられていることから，おおよそ5世紀前葉の時期が想定できる。

### 3 緑井大上第2号古墳について

緑井大上第2号古墳は，長軸8.5mの梢円形を呈した円墳である。中心埋葬と考えられるST3は，鎧によって蓋を固定した割竹形木棺が納められた長さ2.46m，幅0.7mの土壙墓で，棺内からは刀子，鉄鎌，鉄斧，鉄鎗，素環頭大刀，錐状鉄製品，ガラス小玉が出土した。墓壙内及び周溝からは，須恵器などの土器は出土しなかった。

安芸地方の5世紀から6世紀代の鉄製武具・農工具が出土した古墳（第9表<sup>9)</sup>）を見ると，本古墳と全く同じ構成の副葬品が見られる古墳はないが，本古墳よりも1種類，副葬品が前後する古墳（寺山第3号古墳，権地古墳，中小田第2号古墳，地蔵堂山第1号古墳，禪昌寺西古墳，城ノ下第1号古墳）は6基確認できる。城ノ下第1号古墳のみ八幡川東岸に位置しており，残る古墳は太田川の両岸，三角州の北側の限定された地域に分布している。これらの古墳は中小田第2号古墳が竪穴式石室，寺山第3号古墳・権地古墳が竪穴式石室状の箱式石棺，地蔵堂山第1号古墳・禪昌寺西古墳・城ノ下第1号古墳は土壙墓でそれぞれ異なる埋葬施設となっているが，寺山第3号古墳には木棺に鎧が使用されており，木棺が納められる埋葬施設は異なるが本古墳と共通した点が認められる。このように，ほぼ同様の副葬品を有しながら，埋葬施設が異なる現象は，それぞれが異なる葬送思想を持っていたか，石材を埋葬施設に使用することが可能であった権力差があったとも考えられるが，威信材として武器・農工具といったバラエティーに富んだ副葬品を有することが可能な一定以上の権力を有していたといえる。また，本古墳や寺山第3号古墳の木棺に使用されていた鎧は，朝鮮半島南部の墓制の影響を受けていると指摘<sup>10)</sup>されている。被葬者本人が渡来人であるとは断定し難いが，少なくとも被葬者の周間に渡来人がおり，その影響を受けたと想定される。

広島県内で鉄斧が出土している古墳時代前期から中期にかけての古墳は，68例<sup>11)</sup>ある。その中で，本古墳例のように無肩の袋状鉄斧（全長18.9cm）は，68例中33点あり，その中でも大型のもの（16cm以上）が出土している古墳は，上小田古墳（広島市安佐北区：16.0cm），山王第5号古墳（東広島市豊栄町：19.0cm），下矢井南第4号古墳（三次市吉舎町：17.4cm），亀山第1号古墳（福山市神辺町：17.0cm）で，5世紀初頭から中頃にかけての時期と考えられている。本古墳例は，これらの中でも最大きい部類に入るが，袋部の縫合が行われておらず木柄に未装着であ

第9表 安芸地域の鉄製武具・農具出土古墳

| 古墳名     | 所在地           | 時期             | 埋葬施設      |                     |   | 武器    | 農工具   |    |        | 文献 |    |
|---------|---------------|----------------|-----------|---------------------|---|-------|-------|----|--------|----|----|
|         |               |                | 名称        | 種類                  | 跡 |       | 馬具    | 銅鏡 | 武劍・武刀等 | 鉄鎌 |    |
| 向井      | 安芸高田市<br>美土里町 | 6c 前半          |           | 竪穴式石室(箱式<br>石棺状・蝶腹) |   |       |       |    | ●      |    | 11 |
| 新宮3号    | 安芸高田市<br>八千代町 | 5c 前半          | 1号主<br>体部 | 土壙                  |   |       |       |    | ●      | ●  | 12 |
| 新宮6号    | 安芸高田市<br>八千代町 | 4c 後半          |           | 箱式石棺                |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 中田瀬自作1号 | 北広島町<br>千代田   | 古墳時代前期<br>末~後期 |           | 竪穴式石室(木棺・<br>敷石)    |   |       |       |    | ●      |    | 13 |
| 中田瀬自作5号 | 北広島町<br>千代田   | 5c             |           | 箱式石棺                |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 金子2号    | 北広島町<br>千代田   | 5~6c           |           | 小型竪穴式石室             |   |       |       |    | ●      | ●  | 14 |
| 楓路小谷1号  | 安芸太田町<br>中筒賀  | 5c 前半          | 第1主<br>体部 | 土壙(組合式木棺)           |   |       |       |    | ●      |    | 15 |
|         |               |                | 第2主<br>体部 | 土壙(割竹形木棺)           | ● |       |       |    | ●      |    |    |
|         |               |                | 第3主<br>体部 | 土壙(割竹形木棺)           |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 楓路小谷3号  | 安芸太田町<br>中筒賀  | 5c 前半          |           | 土壙(割竹形木棺)           |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 楓路小谷4号  | 安芸太田町<br>中筒賀  | 5c 前半          |           | 土壙                  |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 芳ヶ谷1号   | 広島市<br>安佐南区   | 4c             |           | 土壙(割竹形木棺)           | ● |       |       |    | ●      |    | 3  |
| 池之内4号   | 広島市<br>安佐南区   | 5c 後半          |           | 竪穴式石室?              |   |       |       |    | ●      | ●  | 2  |
| 池之内5号   | 広島市<br>安佐南区   | 5c 末~6c 初      |           | 石蓋土壙?               | ● | ●刀    | ●     |    | ●      | ●  |    |
| 寺山3号    | 広島市<br>安佐南区   | 5c 後半          |           | 箱式石棺(竪穴式<br>石室状・敷石) | ● | ●刀    | ●     |    | ●      | ●  | 16 |
| 寺山      | 広島市<br>安佐南区   | 5c 末           | c 主体      | 土壙                  |   |       |       |    | ●      |    |    |
|         |               | ~5c 前葉         | d 主体      | 箱式石棺                |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 権地      | 広島市<br>安佐南区   | 5c             | B 主体      | 箱式石棺(竪穴式<br>石室状)    |   | ●刀    | ●     |    | ●      | ●  | 1  |
| 白山1号    | 広島市<br>安佐南区   | 5c             |           | 箱式石棺?               |   | ●槍    | ●     |    |        | ●  | 17 |
| 白山2号    | 広島市<br>安佐南区   | 6c 前半~中葉       |           | 箱式石棺                | ● |       |       |    | ●      |    | 18 |
| 空長2号    | 広島市<br>安佐南区   | 5c 末~6c 初      |           | 箱式石棺                |   | ●刀    | ●     | ●  | ●      | ●  | 19 |
| 空長4号    | 広島市<br>安佐南区   | 5c 後半          |           | 竪穴系横口式石室            |   | ●刀    | ●     |    |        |    |    |
| 大町七九谷   | 広島市<br>安佐南区   | 5c 初頭          |           | 土壙(割竹形木棺)           |   |       |       |    | ●      |    | 4  |
| 轟井大上2号  | 広島市<br>安佐南区   |                | 1号主<br>体部 | 土壙(割竹形木棺)           | ● | ●     | ●素面大刀 | ●  | ●      | ●  | 本書 |
| 大明地2号   | 広島市<br>安佐北区   | 5c 初頭          | 1号主<br>体部 | 土壙(木棺)              |   |       |       |    | ●      | ●  | 20 |
| 中小田2号   | 広島市<br>安佐北区   | 5c 後半          |           | 竪穴式石室(礫床・<br>木棺)    | ● | ●     | ●劍・刀  | ●  | ●      | ●  | 21 |
| 西願寺     | 広島市<br>安佐北区   | 4c 前半          | D-2       | 竪穴式石室               |   | ●劍    |       |    | ●      | ●  | 22 |
| 地藏堂山1号  | 広島市<br>安佐北区   | 5c 中葉~後半       |           | 土壙(木棺)              |   | ●素面大刀 | ●     | ●  | ●      | ●  | 23 |
| 真龜1号    | 広島市<br>安佐北区   | 5c             |           | 粘土床・割竹形木<br>棺       |   |       |       |    | ●      |    |    |
| 恵下1号    | 広島市<br>安佐北区   | 5c 中頃          |           | 土壙(木棺)              | ● |       |       |    | ●      |    |    |
| 恵下2号    | 広島市<br>安佐北区   | 5c 後半          |           | 土壙(礫床・木棺)           | ● |       |       |    | ●      |    |    |
| 弘住2号    | 広島市<br>安佐北区   | 5c 後葉~6c<br>前葉 |           | 礫床+割竹形木棺            | ● |       |       |    | ●      |    | 24 |
| 弘住3号    | 広島市<br>安佐北区   | 5c 後葉~6c<br>前葉 |           | 竪穴式石室(礫床・<br>木棺)    |   | ●槍    | ●     | ●  |        | ●  |    |
| 虹山      | 広島市<br>安佐北区   | 5c 前半~中葉       | 1号主<br>体  | 土壙(割竹形木棺)           | ● | ●劍    | ●     | ●  | ●      | ●  | 25 |
| 上小田     | 広島市<br>安佐北区   | 5c 中葉          |           | 箱式石棺(礫床)            |   | ●劍・刀  |       |    | ●      | ●  | 26 |

| 古墳名    | 所在地        | 時期          | 埋葬施設   |                | 武器 |    | 農工具  |     |    | 文献 |    |
|--------|------------|-------------|--------|----------------|----|----|------|-----|----|----|----|
|        |            |             | 名称     | 種類             | 銚  | 長箭 | 鐵劍   | 武刀等 | 鉄鎗 | 短甲 |    |
| 諸木     | 広島市 安佐北区   | 5c 後半～6c 前半 | 第1主体部  | 土壙(木槨・羅床・木棺)   | ●  |    |      |     |    | ●  | 23 |
| 可部塙山2号 | 広島市 安佐北区   | 5c 前半       |        | 土壙(削竹形木棺?)     | ●  |    |      |     | ●  |    | 7  |
| 可部塙山3号 | 広島市 安佐北区   | 5c 中葉～後半    |        | 土壙(削竹形木棺?)     | ●  |    |      |     | ●  | ●  |    |
| 可部塙山6号 | 広島市 安佐北区   | 5c 中葉～後半    |        | 土壙(削竹形木棺?)     |    |    |      |     | ●  | ●  | 27 |
| 押昌寺西   | 広島市 東区     | 5c 後半       |        | 土壙(木棺)         |    | ●刀 | ●    |     | ●  | ●  | 28 |
| 須賀谷2号  | 広島市 東区     | 5c 後半       | 第2主体部  | 土壙             | ●  |    |      |     | ●  |    | 29 |
| 月見城ST3 | 広島市 佐伯区    | 5c 後半～6c 初頭 | b主体部   | 土壙(木棺)         |    |    |      |     | ●  |    | 8  |
| 城ノ下1号  | 広島市 佐伯区    | 5c 後半       |        | 土壙(削竹形木棺)      | ●  |    | ●劍・刀 | ●   | ●  | ●  | 9  |
| 城ノ下4号  | 広島市 佐伯区    | 5c 末        |        | 土壙(木棺)         |    |    |      |     | ●  |    |    |
| 城ノ下5号  | 広島市 佐伯区    | 5c 後半       |        | 箱式石棺           |    |    |      |     | ●  |    |    |
| 上安井    | 芸芸郡 海田町    | 4c          | 理葬施設1  | 竪穴式石室(木棺)      | ●  | ●劍 | ●    |     | ●  | ●  | 30 |
|        |            |             | 理葬施設2  | 土壙(木棺)         |    |    |      |     | ●  |    |    |
| 森信10号  | 東広島市 高屋町   | 6c 前半       |        | 竪穴式石室(箱式石棺)    |    |    |      |     | ●  |    | 31 |
| 三ツ城1号  | 東広島市 西条町 初 | 5c 後半～6c    | 2号棺    | 竪穴式石櫛(箱式石棺・羅床) | ●  |    |      |     | ●  |    | 32 |
| 古市     | 東広島市 西条町   | 6c 後半       |        | 竪穴式石室          | ●  |    |      |     | ●  |    | 33 |
| 大槀3号   | 東広島市 西条町   | 5c 前半       |        | 箱式石棺(敷石)       |    |    |      |     | ●  | ●  | 34 |
| 藤が追1号  | 東広島市 八本松町  | 古墳時代前半      |        | 竪穴式石室(羅床)      |    |    |      |     | ●  |    | 35 |
| 蛇追1号   | 東広島市 志和町   | 4c 末        | 第1号主体部 | 土壙(粘土櫛・削竹形木棺)  | ●  |    |      |     | ●  |    | 36 |
| 蛇追2号   | 東広島市 志和町   | 5c 前半       |        | 土壙(粘土櫛・削竹形木棺)  |    |    |      |     | ●  |    |    |
| 山王4号   | 東広島市 豊栄町   |             | SK1    | 土壙(削竹形木棺)      |    |    |      |     | ●  |    | 37 |
| 金口2号   | 東広島市 福富町   | 6c 前半       |        | 石蓋土壙           |    |    |      |     | ●  |    | 38 |
| 金口4号   | 東広島市 福富町   | 6c 初頭       |        | 箱式石棺(敷石)       |    |    |      |     | ●  |    |    |

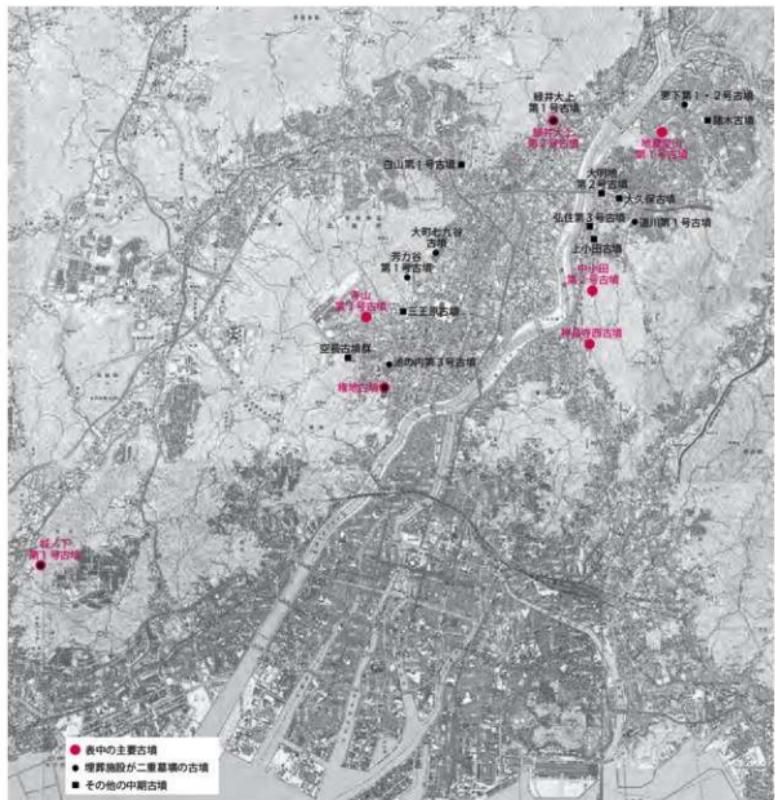
ったと考えられ、刃も付けられていないことから、実用的な工具ではなく、副葬するために用意された儀礼的な祭具になったものと考えられる。そのため、他の例の時期よりも新しく、5世紀後半以降の時期が推測される。

本古墳から出土した素環頭大刀（全長 76.3 cm）は県内においては 4 例目で、安芸地方では、地蔵堂山第1号古墳（広島市安佐北区：全長 77.5 cm）、白鳥古墳（東広島市：環頭横径 6.1 cm）、備後地方で門田敦盛第3号古墳（三次市：全長 70.3 cm）が確認されている。白鳥古墳例は、環頭部のみが図化されているが刀身も残存している<sup>12)</sup>。残る 2 例は全体が残存しており、円環と刀身を直接接合し 2 つの部位で構成しているものと、円環と柄部分と刀身と 3 つの部位を接合しているものに分けられる。前者には地蔵堂山第1号古墳・白鳥古墳例、後者には門田敦盛第3号古墳と本古墳例が該当する。前者は刀身の茎を直接、円環と接続しているのに対し、後者は円環と柄部分（円環基部）と刀身にそれぞれ接合されており、それぞれの部位を個別に製作することが可能な作業工程の細分化が見られる。刀身部分では門田敦盛第3号古墳が全長 54.1 cm、本古墳が 59.5 cm で差は 5.4 cm あり、環頭部分も含めた長さもほぼこの差が反映されていると考えられるため、柄部

分の長さの差は大差なく、刀身の長さに応じて全体の長さが決まるため、刀身部以外の部位がある程度の規格性を持ち、製作されたものと推測される。

また、環頭部分と刀身部分の接合方法を見ると、門田敦盛第3号古墳例では、円環基部と刀身の茎の鍛接部分は本古墳例のように厚みを減らすために刀身の茎を薄くする加工が施されていない。また、本古墳例では柄を固定するための目釘孔以外に、円環基部と刀身を固定するための孔が空けられ、鉄製の目釘で固定されており、門田敦盛第3号古墳例よりも一步進んだ技術で製作されていることが判明した。

本古墳の木棺には鎧が使用されており、渡来人との強い関係性が認められる点を重視し、想像を豊かにすると、この出来の良い素環頭大刀は日本の国外で製作又は国内の渡来人によって製作されたもの、門田敦盛第3号古墳は技術的にやや未熟な国産のものとして解釈することができる



第54図 広島市域の5世紀代の主要古墳 (S=1/100,000)

はないだろうか。

以上のように、緑井大上第2号古墳の時期は副葬品の組み合わせ、鉄斧の比較、素環頭大刀の構造の比較により、5世紀後葉になると推測される。

## 4 結び

今回の調査では、緑井・八木地区で存在の可能性が想定されていたものの調査例がなかった弥生時代の集落跡が初めて確認できた。集落跡は丘陵上に弥生時代後期から古墳時代前期まで営まれ、その後、丘陵上では集落に代わり古墳の築造が行われるという広島湾岸における典型的な傾向も確認できた。

古墳では、広島湾岸の5世紀代の主要古墳と比較しても遜色のない割竹形木棺を設置した二重墓壙や鉄製武具や農工具などの副葬品を確認することができた。また、緑井・八木地区では、これまで前期古墳や後期古墳の調査は行われていたが、中期古墳については、存在の想定はあったものの調査事例がなかった。それが、今回の調査により緑井地区においても古墳が連綿として造り続けられていることが判明した。

また、遺構の確認はできなかったが、古代から中世前期までの遺物が出土し、「緑井郷」の時代の一端が垣間見えた。近世墓と考えられる遺構も検出しており、断続的にではあるが、弥生・古墳時代から中世、近世に至るまでの本地域での人の営みを考察し得る材料が得られ、広島市域でも古い歴史を誇る八木・緑井地区的歴史を考える上で貴重な成果となった。

### 注

- 1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌1』財団法人広島市文化財団 2002年  
以下、後期土器編年は若島氏の編年による。
- 2) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』1991年
- 3) 古瀬清秀『副葬品の種類と編年 4 農工具』『古墳時代の研究 第8巻 古墳II 副葬品』雄山閣出版 1991年
- 4) 清家章『④破碎副葬と葬送祭祀』『古墳時代の考古学3 墓構造と葬送祭祀』同成社 2011年
- 5) 財団法人広島市文化財団『成岡A地点遺跡』2001年
- 6) 古瀬裕子編『道上第2・3・5号古墳、門前2号遺跡』財団法人広島県教育事業団 2004年
- 7) 八千代町教育委員会『新宮遺跡群発掘調査報告書 八千代町埋蔵文化財報告書第1集』2000年
- 8) 山澤直樹編『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)下矢井南第3~5号古墳』公益財団法人広島県教育事業団 2014年
- 9) 表は『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10)権現第1~3号古墳』(財団法人広島県教育事業団 2010年)の第5表及び『中期古墳研究の現状と課題Ⅱ~古墳時代中期の交流~第21回研究集会発表要旨集・資料集成』(中国四国前方後円墳研究会 2018年)のデータを用い、作成。

- 10) 亀田修一「日本の初期の釘・鍵が語るもの」『文化の多様性と比較考古学 2004』考古学研究会 2004 年  
岡林孝作『古墳時代木棺の展開過程における鍵の基礎的研究 研究成果報告書 平成 24 年度～平成 26 年度  
科学研究費助成事業 基礎研究（C）』2015 年
- 11) 山澤直樹ほか「第 11 表 広島県内の鉄矛を出土した主な前・中期古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34）下矢井南第 3～5 号古墳』公益財団法人広島県教育事業団 2014 年
- 12) 新谷武夫「安芸・備後の装飾大刀」『芸備 第 41 集』芸備友の会 2012 年  
東広島市中央図書館内の三ツ城古墳ガイダンスコーナーにて展示中。柄部分が破断しており、部分的に接合復元がされている。見た限りでは地蔵堂山古墳例と同じ造りのように見える。

### 第 8・9 表文献リスト

| 番号 | 文 献  |
|----|--|
| 1  | 広島市教育委員会 1984 「極地遺跡」「九郎杖遺跡 極地遺跡発掘調査報告」                           |
| 2  | 広島市教育委員会 1985 「池の内遺跡発掘調査報告」                                      |
| 3  | 広島市教育委員会 1984 「芳ヶ谷遺跡」『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』                         |
| 4  | 財團法人広島市文化財団 1990 「大町七九谷古墳」「大町七九谷遺跡群」                             |
| 5  | 広島市教育委員会 1982 「高陽台遺跡群発掘調査報告」                                     |
| 6  | 広島県教育委員会 1977 「恵下 B 地点遺跡」「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」             |
| 7  | 財團法人広島市文化財団 2004 「可部寺山 1 号遺跡」                                    |
| 8  | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1987 「月見城遺跡」                                  |
| 9  | 財團法人広島市歴史科学教育事業団 1991 「城ノ下古墳群」「城ノ下 A 地点遺跡発掘調査報告」                 |
| 10 | 財團法人広島市文化財団 2001 「成阿 A 地点遺跡」                                     |
| 11 | 広島県教育委員会 1982 「向井古墳」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3）                |
| 12 | 八千代町教育委員会 2000 「新宮遺跡群発掘調査報告書」                                    |
| 13 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1986 「中出勝負姫墳群」「歲ノ神遺跡群 中出勝負姫墳群」                |
| 14 | 広島県教育委員会 1982 「金子古墳群」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3）               |
| 15 | 広島県教育委員会 1982 「橋路小谷古墳群」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（3）             |
| 16 | 広島市歴史科学教育事業団 1997 「寺山遺跡発掘調査報告」                                   |
| 17 | 広島県立可部高等学校 1962 「はにわ側刊印」   |
| 18 | 広島県教育委員会 1973 「白山 2 号古墳」「白山城跡発掘調査概報」                             |
| 19 | 広島市教育委員会 1978 「空長古墳群発掘調査報告」                                      |
| 20 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1987 「大明地遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」（IV）      |
| 21 | 広島市教育委員会・広島大学文部省考古学研究室 1980 「中小田第 2 号古墳」「中小田古墳群」                 |
| 22 | 広島県教育委員会 1974 「西願寺遺跡群」   |
| 23 | 広島県教育委員会 1977 「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」                        |
| 24 | 広島市教育委員会 1983 「弘佐遺跡発掘調査報告」                                       |
| 25 | 虹山古墳発掘調査団 1989 「虹山古墳発掘調査報告」                                      |
| 26 | 本村豪章 1960 「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』第 2 号                      |
| 27 | 広島県教育事業団 2004 「可部寺山第 6 号古墳」「寺山城跡」                                |
| 28 | 神昌寺西遺跡発掘調査団 1980 「神昌寺西遺跡発掘調査報告」                                  |
| 29 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1985 「須賀谷古墳群」「須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書」            |
| 30 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 2001 「上安井古墳発掘調査報告書」                           |
| 31 | 東広島市教育委員会 1990 「森信第 10 号古墳発掘調査報告書」                               |
| 32 | 広島県教育委員会 1954 「三ツ城古墳」  |
| 33 | 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター 1983 「古市古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） |
| 34 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1985 「大槻第 3 号古墳」「大槻遺跡群」                       |
| 35 | 広島県教育委員会 1971 「広島県賀茂郡八木松町藤か迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第 9 集          |
| 36 | 東広島市教育振興事業団 2005 「蛇追第 1～4 号古墳・蛇追遺跡発掘調査報告書」                       |
| 37 | 豊栄町教育委員会 1994 「白山 4・5・6 号古墳」                                     |
| 38 | 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1997 「金口古墳群」                                  |

# 図 版

図版 1



a 遺跡上空から太田川上流方向を望む（航空写真・29年度調査前・西から）



b 遺跡上空から太田川下流方向を望む（航空写真・29年度調査後・北から）

## 図版 2



a 調査前近景航空写真（南東から）



b 29年度調査後航空写真（西から）



a 30年度調査後航空写真（西から）



b 基本層序 C-C'（東から）

図版 4



a 西側斜面近現代土取り痕跡（北西から）



b SH1 B-B' 土層断面（北東から・第8図では反転）



a SH1 遺物出土状況（南西から）



b SH1 (北東から)

図版 6



a SH1 (南東から)



b SH2 遺物出土状況 (北西から)



a SH2 (北東から)



b SB1 (北東から)

図版 8



a F2 区ピット群 (北東から)



b SX1 粘土塊出土状況 (北から)

図版 9



a SX1 遺物出土状況（北から）



b SX1・2（北から）

図版 10

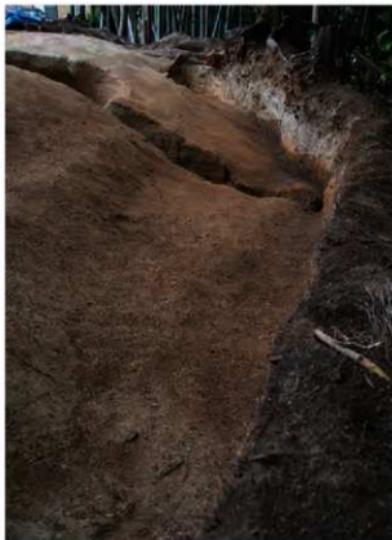


a SX3 (南西から)



b SX4 (東から)

図版 11



a SX5 (南から)

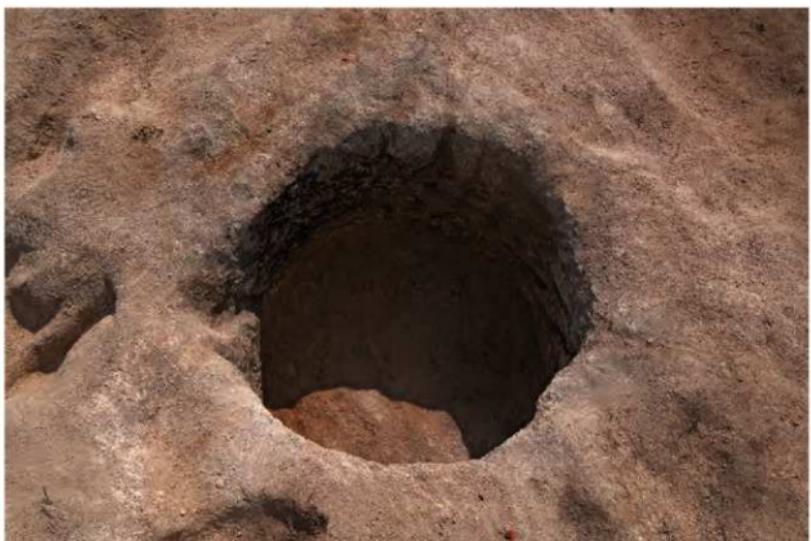


b SK3 (南東から)

図版 12



a SK4 土層（西から）



b SK4（北から）

図版 13



a SK16 (北西から)



b SK17 (北西から)

図版 14



a SK18 遺物出土状況（南西から）



b SK18 (北から)



a SK20 遺物出土状況（東から）

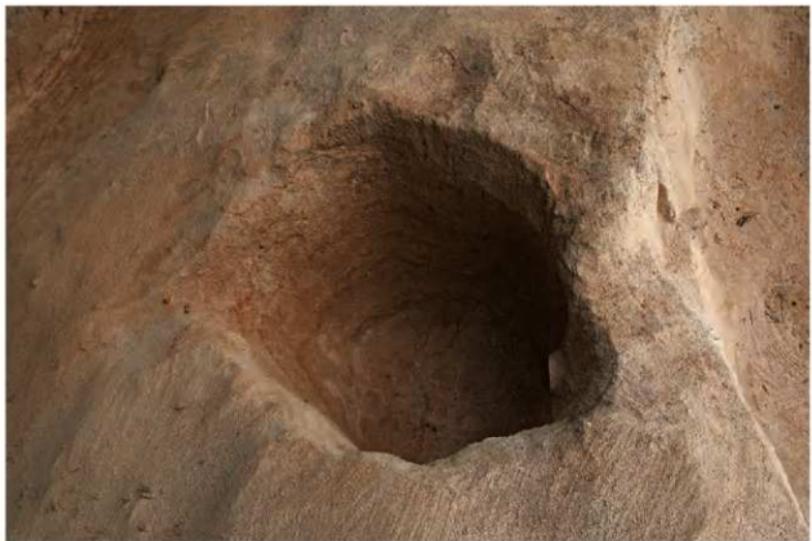


b SK20（南から）

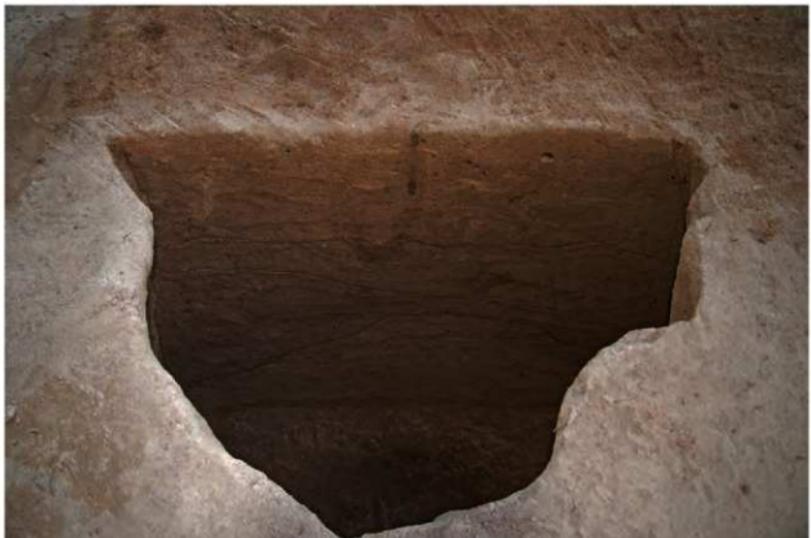
図版 16



a SK21 土層（北西から）



b SK21 (北西から)

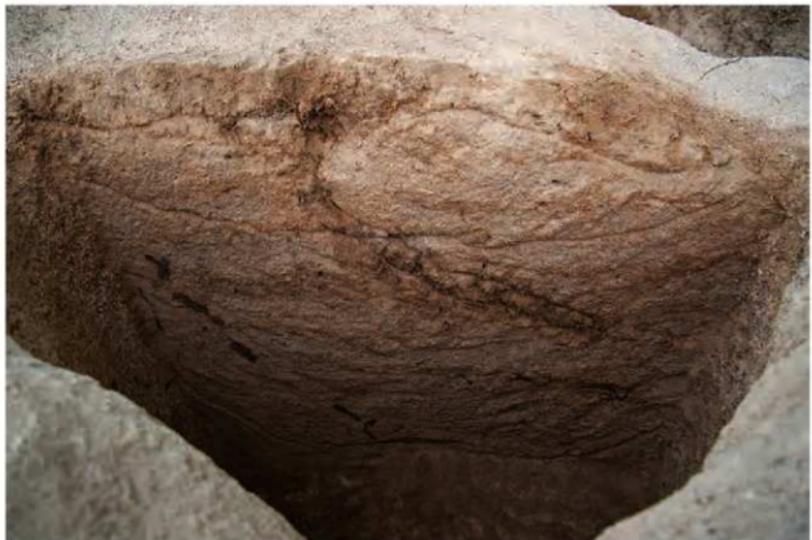


a SK22 土層（北から）



b SK22（北から）

図版 18



a SK24 土層（南西から）



b SK24 (西から)

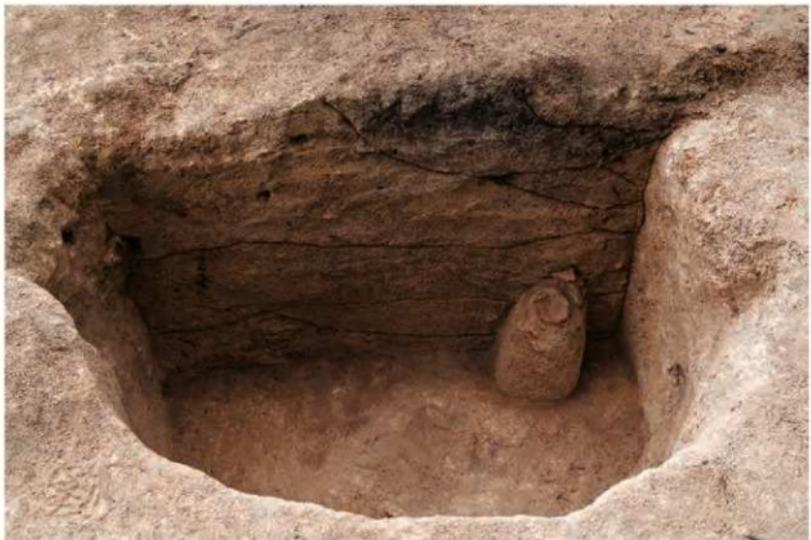


a SK26 遺物出土状況（北から）

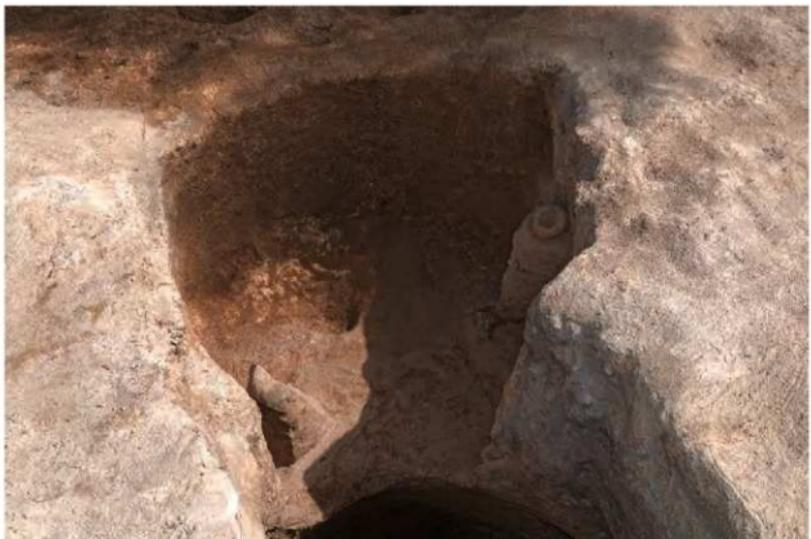


b SK26（北から）

図版 20



a SK27 土層（東から）



b SK27 遺物出土状況（西から）



a SK27 (南西から)



b SK28 (北西から)

図版 22



a 第1号古墳（西から）



b 第1号古墳（北から）



a ST1 木棺変質土及び自然石出土状況（29年度・西から）



b ST1 木棺変質土及び掘り方断ち割り状況（29年度・西から）

図版 24



a ST1 遺物出土状況（30 年度・北から）



b ST1 完掘（西から）



a ST1 完掘（北東から）



b ST2（北から）

図版 26



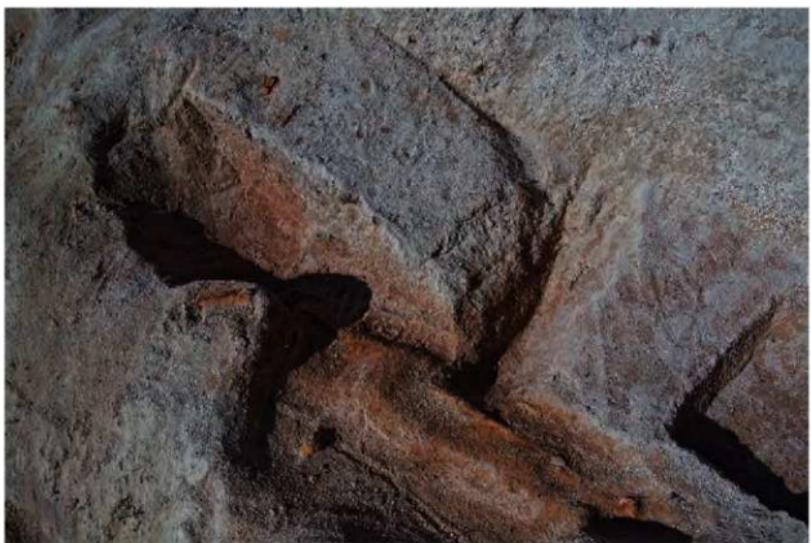
a ST5 (南から)



b 第2号古墳 (南西から)



a 第2号古墳周溝（SD5）内土層（基本層序B-B'南側・西から）



b ST3 遺物検出時上層土層（東から）

図版 28



a ST3 遺物出土状況（南西から）



b ST3 素環頭大刀出土状況（南東から）



a ST3 鎌・斧出土状況（東から）



b ST3 矛出土状況（南東から）

図版 30



a ST3 完掘（北東から）



b ST4（北東から）



a SD2・3 土層（西から）

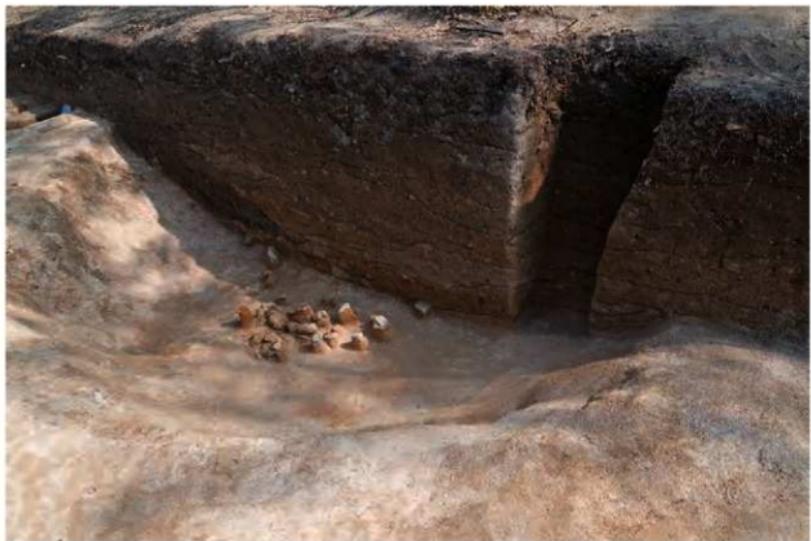


b SD2・3, SK1・2・19（西から）

図版 32



a SD4 (南東から)



b SK1 土層及び疊出土状況（基本層序 A-A' 南側・西から）



a SK1 土層及び礫出土状況（基本層序 D-D' 中央付近・北東から）



b SK1・2 遺物・礫出土状況（東から）

図版 34



a SK1・2 (北西から)



b SK5～13 検出状況 (南から)



a SK11 土層（東から）



b SK11（東から）

図版 36



a SK14 (北から)



b SK15 (北から)



a SK19 土層（西から）



b SK19（西から）

図版 38



a SK23 (西から)



b SK25 磚出土状況 (北西から)



a SK25 (北西から)



b 石垣裏込め土層 (北から)

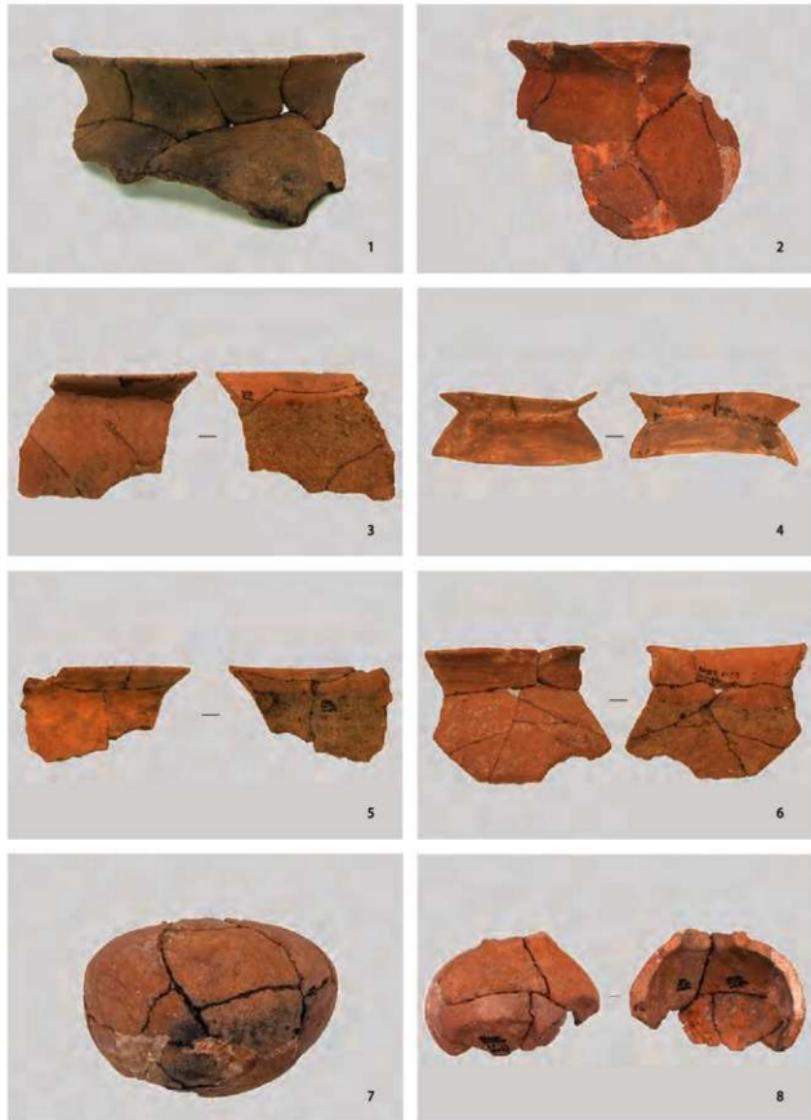
図版 40



a 石垣（北西から）

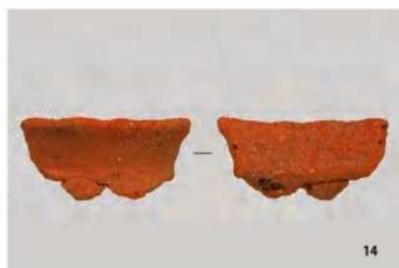


b 石垣（北から）



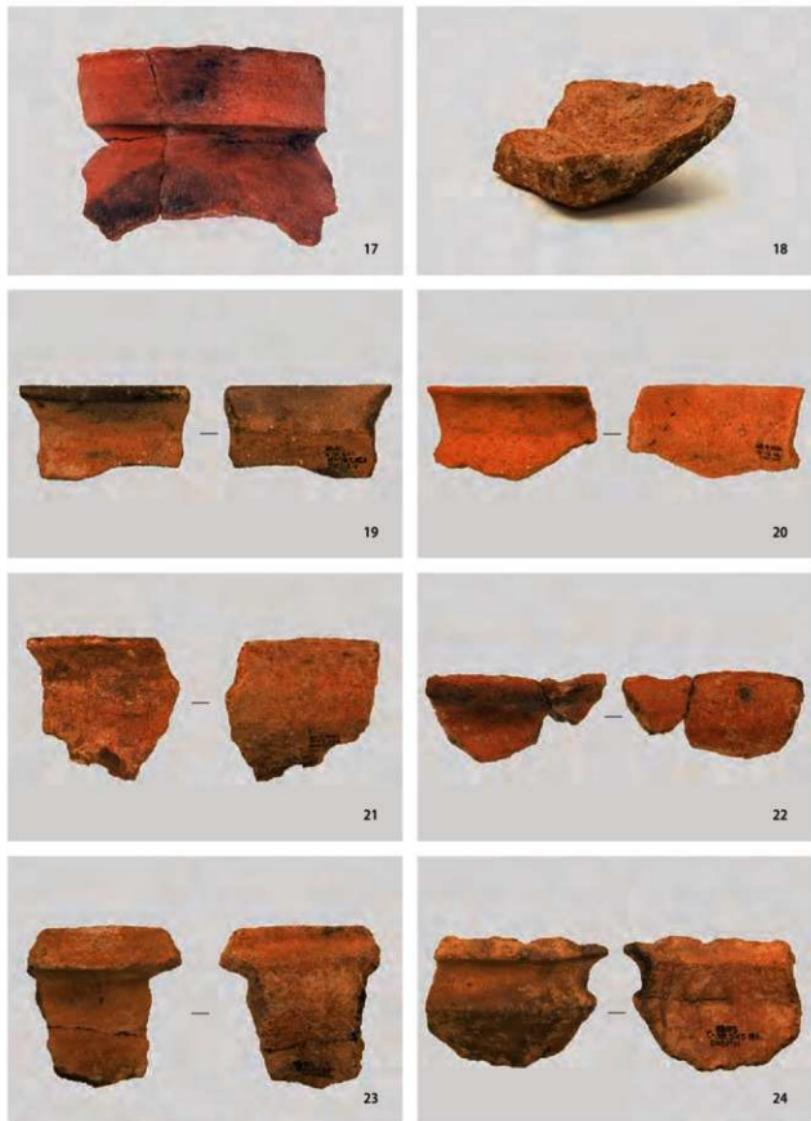
土器 (1)

图版 42



土器 (2)

図版 43



土器 (3)

图版 44



土器 (4)



土器 (5)

图版 46



37



38



39



40



41



42



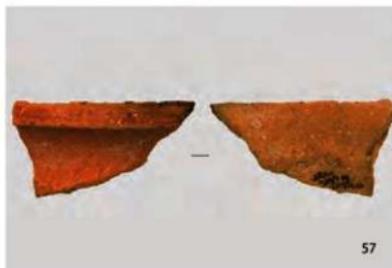
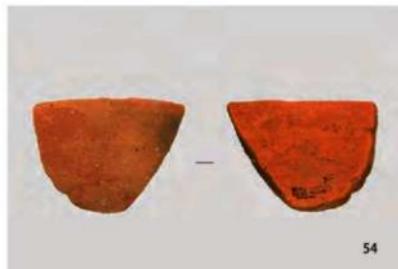
43

土器 (6)



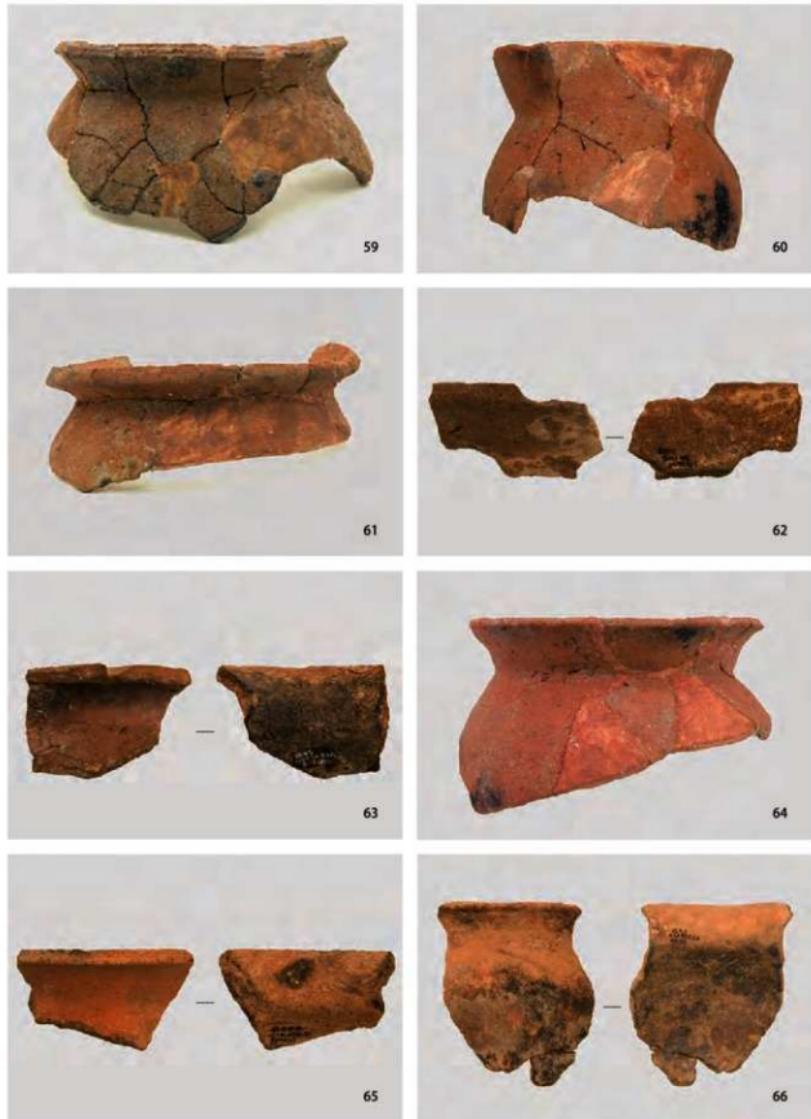
土器 (7)

図版 48



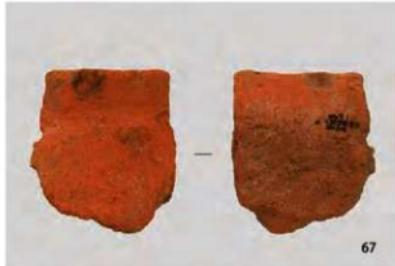
土器 (8)

図版 49



土器 (9)

图版 50



67



68



69 上



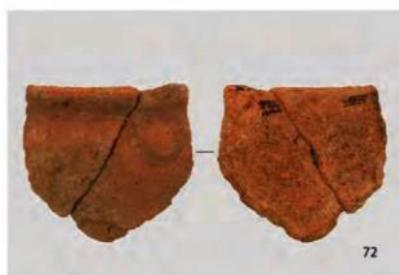
70



69 下



71



72

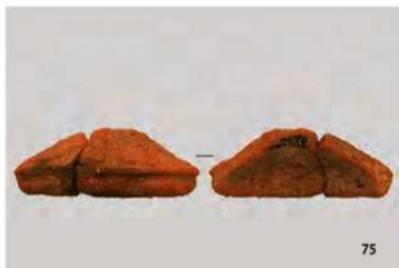
土器 (10)



73



74



75



76



77



78



79



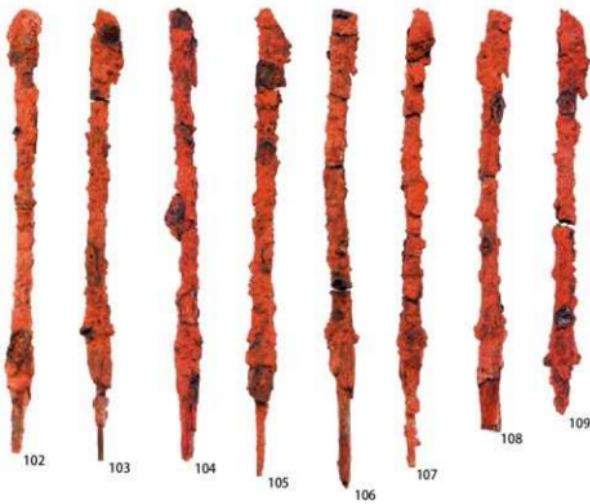
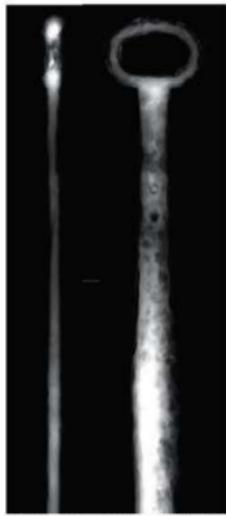
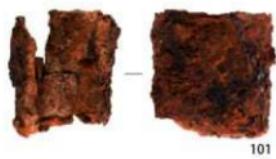
80

土器・須恵器

図版 52



須恵器・鉄器・玉類



図版 54



110



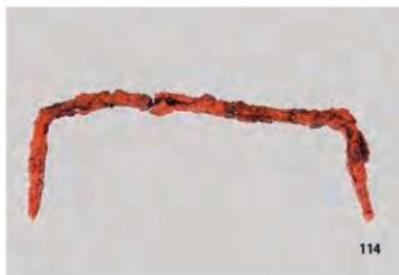
111



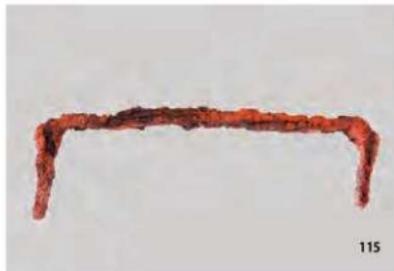
113



112



114

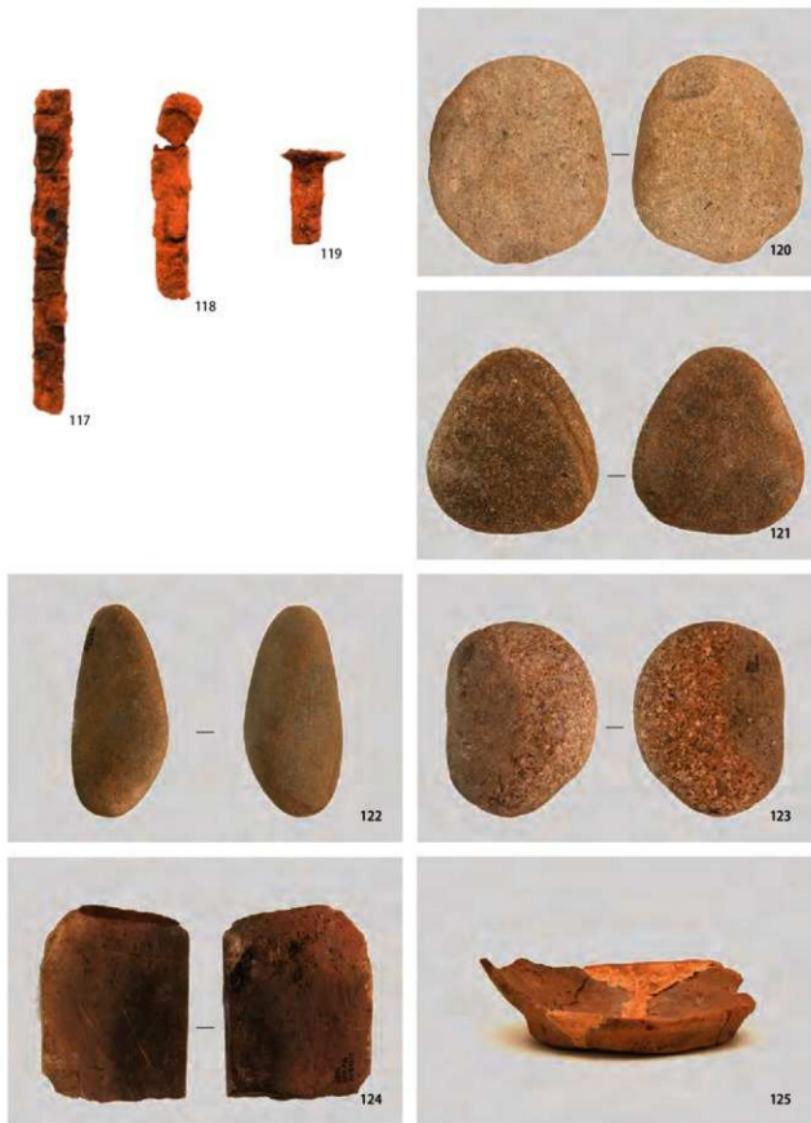


115



116

鉄器



鉄器・石器・土師質土器

图版 56



126



127



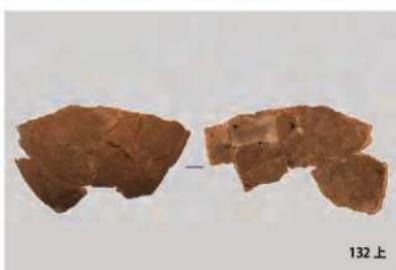
128



129



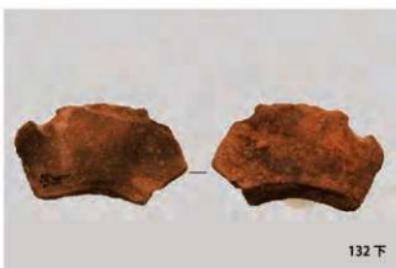
130



132 上



131



132 下

土師質土器



133



134 上



135



134 下



136

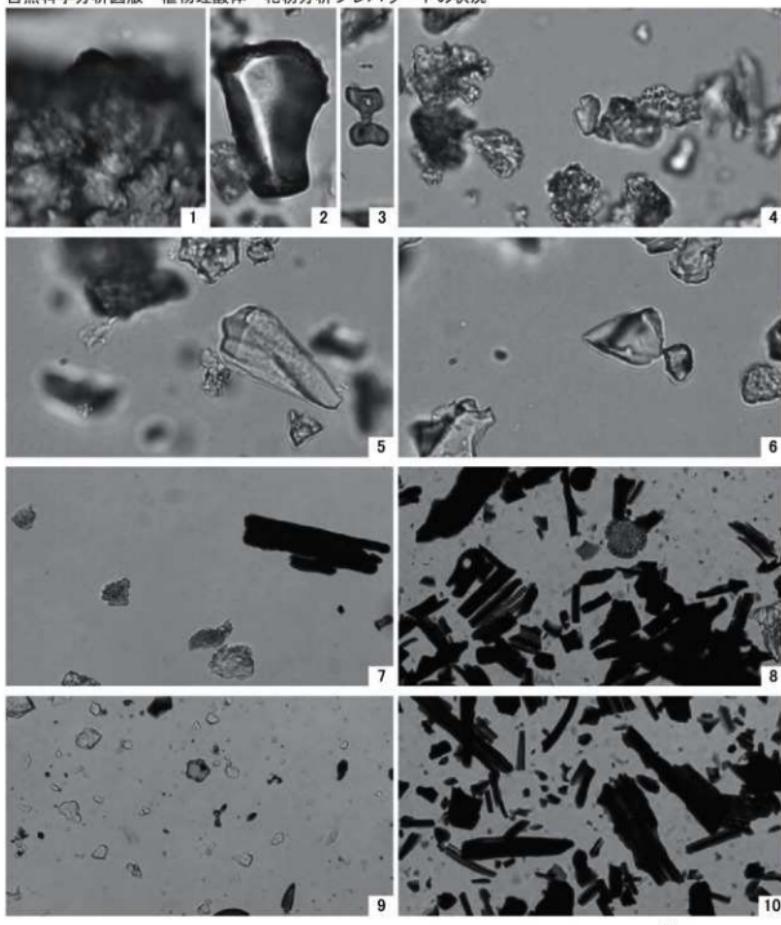


137

黒色土器・須恵質土器・磁器

## 図版 58

自然科学分析図版 植物珪酸体・花粉分析プレパラートの状況



1. イネ属頸珪酸体 (SK22: 下層土)
2. ススキ属機動細胞珪酸体 (SK22: 下層土)
3. ススキ属短細胞珪酸体 (SK22: 下層土)
4. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況 (鉱物粒子が散在) (SK20: 底)
5. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況 (鉱物粒子が散在) (SK26: 下層)
6. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況 (鉱物粒子が散在) (SK27: 壺内埋土)
7. 花粉分析プレパラート内の状況 (SK20: 底)
8. 花粉分析プレパラート内の状況 (SK4: 上層埋土)
9. 花粉分析プレパラート内の状況 (SK22: 下層土)
10. 花粉分析プレパラート内の状況 (SK26: 上層埋土)

50  $\mu m$   
(1-6)  
50  $\mu m$   
(7-10)

## 報 告 書 抄 錄

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第6集

## 緑井大上遺跡

—広島市安佐南区緑井八丁目所在—

2019年9月

編集発行 公益財團法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課  
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号  
TEL 082-568-6511

印 刷 大村印刷株式会社  
〒730-0851 広島市中区桜町2番15号  
TEL 082-503-1221